
氷室研究所

優楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷室研究所

【著者名】

ZZコード

N5619E

【あらすじ】

主人公の田丸由宇が編入した大学で、叔父の氷室教授の研究チームがちょっととした事故を起こす。それに私が巻き込まれたお話。この研究テーマがズバリ『性転換』であつた。そして由宇は からへ…。由宇はこの先どうなっていくのか…?

001 メンバー

とある大学の研究室…。今年の4月から大学生になる。といつても、短大から系列の大学に試験的に編入する制度を始める事になり、その一人目に選ばれたのが私田丸由宇（ユウ）だ。ただ単位の関係で2年生からの編入となつた。

その中の一人に選ばれたのも、遠縁の氷室教授がいたからだ。遠縁と言つても、私の記憶の中では一度も登場したことがない。

そして御礼というわけではないが、春休み返上で研究室に手伝いにきているのだ。そこで私は大変な事に巻き込まれてしまつ…。

「失礼します。」

「どうぞ。」

「うちを見る視線は3つ。男性2女性1の視線。

「どうぞ中入つて、田丸さんですよね？」

「はつ、はい。」

「先生から聞いてますよ。とりあえずここに座つて。」

「すみません。」

「私は葵ひかり。学年は1つ上だけど年は同じだからよろしくね。」

「田丸由宇です。みなさんよろしくお願ひします。」

「葵つて呼び捨てで構わないから、気軽に呼んでね。」

「はあ…、じゃ慣れるまで『葵さん』で…、」

「『『れん。』とかいらないつて…』

「はあ…。」

ちよつとボーカルな感じの氣味くんな子だ。同じ年齢の女の子がこるのは心強いし、有り難かった。でも初対面で呼び捨ては…。

「よしうね。インスタントしかないビーハー飲むでしょ?」

「うさ。ありがとう。」

「で、あつひで色々準備してるのが、じいじのコーダー引き継いだ真木翼君。私はマッキーって呼ばせてもらいつてる。で、じいじの男の子が、」

「三崎司です。4歳から同じ学年なんどよろしくお願ひします。やれに俺も今日からなんで。」

「どうも。」

「真木君は私と同じ学年なんだけど、浪してるから、私達よつと上よ。」

「はあ…。」

「おこー向も今バラす事ないだろ?」

「こずれはバレるんだからここじやんー」

『チジ。』と舌打ちしている。

「はー、パーー。」

「ありがとう。」

「で、来てもうひてあれなんだけビ、先生1週間位休むつてや。」

「えつ?」

「なんでも沖縄に魚取りにこくとかで、わざ連絡がきてね。」

「わへ、魚?そりですか…。」

「だからここは4月からきてくれれば構わないから。」

「えつと…、じゅ、今田は?」

「あ…、もし用事とかあれば帰つてもいいよ。」

「…。」

「暇だったり、これからマウスに薬を投げるのはから見ていけば?」

「先生いないんですね?」

「ファックスで指示きてて、それやつたら帰れるから真木君が巻きでやつてる」とよ。」

『真木が巻き…。』葵は渾身の親父ギャグのつもりか…？しかも笑顔でこいつを見てる。ハニカミ笑いしか出来なかつた…。

「葵ダジャレかよ？それつまんねえよ。田丸さんも困つてんじんか…」

「私なりに和むかと思って氣を使つたつもりだつたんだけど…。」

「困らせてびうんだよ？」

「だね…。」

「いや…、困つてないです…。一人のやり取りも面白いですしそ…。」

「フォローしてくれるなんて田丸さんつて優しいね。で、どうする？見てく？。」

「はい。是非。」

この選択が私にとって凶と出たのだ。

薬の投与は大きなプラスチックの水槽みたいなケースで行われるようだ。手を入れて作業するところは、長い手袋状のものが中に伸びていて、中と外を完全に遮断している。

既にマウスの籠はケースの中に入っている。そこに三崎君が、冷蔵庫みたいな保管庫から試薬を運び出しているところだった。

「なんか鍵とかもかかって厳重ですね？劇薬かなんかですか？」

「先生の指示だからね。今回は薬作る段階から慎重だつたみたい。先生が作った試薬だし、それに私達が鍵扱えるくらいだから、全然劇薬とかじやないとと思うよ。ねえマッキー？」

「えー？」

と真木さんが振り向いた時に後ろに立っていた三崎君とぶつかって、薬の入った瓶を落としてしまった。

「あつー！」

パリンという音とともに液体が飛び散り、異臭が漂ってきた。

『臭つー』と思ったのもつかの間、意識が遠くなつて…、次に気が付いた時は葵に揺り起こされたところだった。

「田丸さん！」

「うう…、」

「良かつた気付いた。」

田を開けると葵の心配そうな顔が飛び込んできた。

「葵…さん…。」

「大丈夫？」

「私…。」

「ちょっと窓開けてくるね。」

葵はそう言つと窓を開け始めた。部屋の換気をするためだらう。私は体を起こすと、そこには横たわっている男2人がいた。

「二人は…？」

「起こしてみてくれる? ガラスの破片あるから気をつけてね。」

「はっ、はい…。」

確かに瓶の破片が飛び散っていた。蒸発したのか液体は見当たらぬ。

「三崎君。三崎…。」

『ん…?』私はボーッとしながらも、三崎君の体を振り動かそうと、肩や胸の辺りを触っていた。が、左手で触った彼の胸に違和感を感じたのだ。

えつ? おっぱい…? 女の子? 何? 太ってる男の子じゃないよね…、

つていつかむしろ痩せ型だし…。

「田丸わざわざした？起きない？」

「いや…、あの…、」

「ん？」

窓を開け終わつた葵が近寄つてきた。

「三崎君の胸…、」

「胸？熱でもある？」

葵が三崎君の胸を触つて私の顔を見た。『えつ？』と呟つて再確認してくる。『えつ？えつ？えつ？』しまじには少し揉み始めた。

「女の子っぽい胸だね…。て言つかむしら女…。」

「はい…。」

「ニユーハーフって奴かな？最近の整形の技術つてす」「つて言ひつし…、小さいけど本物っぽい…。」

「はい…。」

「下も工事済みかな…？」

「触るんですか？」

その時真木さんが気付いたらしく『ウッ…』と声を漏らした。

「マッキー！」

「あ…。俺どうしたんだ…。」

「三崎君が薬落として、それ吸い込んでみんな氣を失つてたみたい。」

」

「あ…、やうか…。なんか少し氣持ち悪い…。」

「大丈夫？医務室行こうか？」

「ん…、ちよつと様子みよう…、お前ら大丈夫なんか？」

「私は一人より遠かつたから、それでもないみたい。田丸さんはどう？」

「多分…、平氣です。」

「やうか。三崎は？」

「あ…、そりだ。三崎君がね…。」

「三崎がどうした？」

「いや…、なんていうか…、」

「何だよ？はつきり言えよ。」

「いや…、今回の事と関係ないけど…、」「ハーフっぽいのよ。」

「はあ？」「ハーフ？何言つてるの？」

「胸があるの。それも人工の胸っぽくないのよ」

「…マジ？顔とか全然男顔じゃんよ？」

「マジだつて！嘘だと思つたら触つてみれば？」

「せひ、触れるかよ！」

「照れなくてもいいじゃん？」

「チツ…。お前らの事は黙つていろよ。人には秘密にしておきたい事があるんだから。」

「何よ急に…？」

「だつ、だから…、お前らわ…、とにかく三崎起いやつ。」

「うへ、うん…。」

秘密か…、カミングアウトしたならともかく、自分が女になりたって思つてる事が他人にバレたらイヤだろ？な…。ここはやつぱり見なかつた事に…。とにかく三崎君を起こす事になつた。

三崎君が起きたあとは、変な空気になつた。3人共胸の事を聞けずにはいる。

「先生には俺が報告しておくれよ。」

「頼んだね。」

「三崎君は気にしなくていいからね。」

「はい…。すみませんでした。」

「実質今日からメンバーになつた人に、試薬持つてくるように頼んだ俺の責任だから…。」

確かに…、ん…？ 実質？ て、事は以前に三崎君はきた事があつたのか？

「すみませんでした。」

「大丈夫だつて。ここはマッキーに任せておけば大丈夫だから。」

「はい…。」

「あと田丸さんも『メンね。気分悪くなつたりはしないと思つかば、ヤバイと思つたら病院行つてね。』

「はい。」

「じゃ、瓶の破片片付けて帰らつか?」

「あつ、俺やります。」

三崎君は掃除道具を持ってきて、ささつと掃いてガラス用らしきバケツに破片を入れていた。

「二人が次来るのは、4月からで大丈夫だからね。」

「分かりました。」

ラッキーーアパート探してバイトも探せる。そして一応私は、葵と携帯電話の連絡先を交換させてもらつて、仮住まいのウイクリーマンションへと帰る事になった。

賃貸住宅雑誌とアルバイト雑誌を買い込み、コンビニの弁当を食べて布団に潜り込む。その日は3月だというのに寝苦しい不思議な夜だった…。

その理由は、三崎君に起ひつていた体の変化が私にも起こつたからである。

その変化とは…、その変化は体の性転換である。寝てる間に私の体は完全に男性化していたのだ…。

朝起きて伸びをしようとした胸を張った瞬間、ブチブチブチーとパジヤマのボタンが取れる音と、ビリビリと破ける音がしたのだ。

『何?』と思ってパジャマを見ようと下を見ると、はだけた胸が目に入ってきた。あれ?胸が…、胸が無い…?

『え、一つ!』何?何だ…?胸を触ってみたが明らかに男のような胸だった…。小さかったが丸みのあった私の胸が…。

その場に立つてみると、今度はパジャマの下のお尻の辺りからビリッと嫌な音がした…。そして破けたパジャマを脱いでいく段階で、完全に男の体だという事が分かつた。朝の男の生理現象が女性物の下着の下で誇張しているのだ。

確かに先週地元から出てきて以来、彼氏と会つてなくて多少欲求不満なのは感じていたが、こんな変な夢を見るとは…。と思つてボーッと座つていたが、全然夢が進まない。まさかリアル…？ 頬を摘んだり引っ張つたり…。痛くない…。ヤバイ、意味分かんない…。

辺りをグルグル見渡していると携帯電話が鳴つた。葵だ。昨日登録した葵の名前が携帯電話の画面に表示されている。受話状態にして耳を当ててみると、

「もしもし？」

葵の声じゃない…。明らかに別人で男の声だ…。私は声が出せなかつた。

「もしもし？ 田丸さん？」

私を知つている。それに葵の携帯電話からだし…。

「…。」

「葵だけど、聞こえてる？」

「はっ…、はい。」

自分の声まで男の声音だつた…。

「良かつた…、大丈夫? その声の感じだと田丸さんも男になつてゐる?」

田丸さんも…、も?

「は…い…。」

「Jの時頭の中を嫌なイメージがよぎつた。葵も男に…?」

「やつぱり…、今、マッキーから電話あつてね、マッキーもそつみたい…。」

『マッキーもそつみたい…。』つて? 真木さんも…?えーと女になつたつて事か?

「あつ、あの…。葵さんも体が男になつて、真木さんが女になつてるんですね?」

「あの薬のせいね。」

「薬つて…? 昨日、割つた瓶の?」

「そり…。」

「これから私どもしたら…?」

「それはこれから会つて話そりへ、今マッキーがウチに向かつてるとこだから。そのあと着替え持つてあなたのところ行くから住所教えて?」

今私の選択肢はないようだ。素直に住所を教えて一人の来るのを待つ事にした。

待つ間にお風呂に行つて鏡を覗いた。そこには私の顔の原型を留めた、ジャニ系のイケメンが映つている。

「ヤバッ…惚れそう…。」

そんな独り言を言つてる場合じゃない。一人が来るまで着る服がない。サイズが一回りか二回り大きいのだ。今の格好は、女性物の下着を履いてる変態男といったところだ。

布団に包まって一人を待つ私は、色々な事を考えていた。あの薬があれば元に戻れる？もしくは解毒剤みたいなものがある？まあ教授がいるからなんとかなるだろ！と軽く考えていた。

ソフトマッチョまではいかないが、結構しなやかな筋肉をしている。骨太ではないが、女の時より「ゴツゴツ」してゐる様にも感じる。

恐る恐る下着の中の突起物も確認してみた。『キモッ!』と思いつつ、『エッチの時はこんなのが私の中に出入りしてたんだ』。と、興味から触つてみると、と言つても摘むようにもつだけ。力ツチ力チだ。袋の方は、こんな感じか。

私の男性歴は1人だけ。初体験も18才と今時の子にしては遅い部類だろう。その彼とは2年近い付き合いなのだ。

ピンポーン。部屋の呼び鈴が鳴る。覗き穴から見るとモテルっぽい女性と体格のいい男性の2人が立っていた。

「どちら様ですか?」

「葵です。」

男の方が答える。あれっ?確かに葵は小柄な感じの背格好だったが。バスタオルを腰に巻き付け、体をチエックしてドアを開けた。

「ほーつ、ジャニーズ系だ?格好いいね。」

私は一人を見て目を疑つた。

「本当に真木さんと葵さん?」

「ああ…。中入つていい?」

「あつ、じうど。」

一人を中心へと入れると、開口一番、

「狭つ！」

「ウイクリーマンショソつて狭いね。ビジネスホテルの方がいいんじゃない？」

「いや、マンスリーで契約をせてもうつてるから、こいつの方が経済的で……。」

「賃貸住宅雑誌あるじやん。新しく住むとこ探してるんだ？」

「はい……。でも中々いいのが無くて……。電話しても昨日決まりましたとかばつかで……。」

「この時期はね……。学生が部屋見ないで決めちゃうからね……。」

「あつ、はい、服。」

「ありがとうござります。」

「サイズは……、多分前の俺くらいだから大丈夫だね。」

「そう言えば真木さんって、少し小さくなりました?」

「少しね。葵なんかデカくなりすぎだし。」

「確かに」。

真木さんの服だと少しキツそうだ。

「下着は一応新品持つてきただから。」

「どうも…。じゃ早速着替えてきます。」

そう言つてコニーチトバスへと向かつた。後ろからは『本当になんにもないね。』という余話が聞こえてくる。実際着替えくらいしか持つてきてない。あとあるのは、いつちで買つた布団くらいなもんだ。

バスタオルを取り、今履いてる女性物の下着に別れを告げる。そしてトランクスを取り出し履いてみた。今まであつた締め付け感がなく楽チンだ。

Tシャツにパーカーにジーパンを履いて、部屋へと戻つた。

「本当にジャニーズ系だね。肩まである髪がまたいいじゃん!」

「うふ。格好いい!」

「そんな褒めないで下さこよ。照れるじゃないですか?」

「いや、本当にジャニーズ系が好きなんだね。」

「えつ~どうゆう意味ですか?」

「理想の異性つてやつ~。」

「はあ…。」

「俺の好みはモデル体型のスラッシュとした感じで、」

「私の理想の異性はガツチリしたスポーツマン。」

「で、田丸さんの今の感じを見ると、いかにもジャーナーズ系って感じだよ。」

「はあ…。」

確かに真木さんは綺麗な感じでまとまつてゐし、葵は爽やかなスポーツマンに見える。要は理想の異性に近付くつて事みたいだ。

「じゃ、行いつか?」

「えつー・じいにっ?」

「研究室。三崎君も気にかかるんだけど、連絡先交換してなくて、どうじてるやう?...」

「やうだー私達元に戻れるんですね?」

「どうだろ?」

「えつ?」

「さつき、葵と話ながらきたんだけど、同じ薬が学校になじようなく氣がするんだよ。」

「えーつ?」

「先生の事だから配合データの取り忘れはないと思ひながりね。」

「じゃ、そのデータがあれば同じ物が作れると……？」

「多分ね。ただ同じ効果が得られるかどうかは分からぬけれどね。」

「そんな……。」

「まあ、先生が帰つてくるまでの辛抱だよ。」

「あつー…やつにえぱいつ帰つてくる予定でしたつけ?..」

「来週?あと5日後かな……?」

「それまで」のまま?」

「あと、薬の材料がすぐ手に入るかとか、調合してのべる時間
おけば完成するかとかにもよるけどね。」

「じや最短でも……。」

「1週間から10日かな。」

「長かつたら?..」

「データが無くて、偶然出来たものだつたら一生の可能性だつて……。」

「嫌です!..」

「可能だっけ？」

「あらよ田丸さん。」私はポジティブに答える。

「ポジティブって、」

「だつたじながな体験してのつと私達へつじやなこなー?」

「ああ……。」

「だつたじ戻れるまで、樂しくへんりつよ。」

葵はポジティブ過ち。寝る前まで女だったの。……。やくなつた
やつね……。

005 グラドル

学校までは真木さんの友人の車で移動になった。つて言うか借りたって事はその友人に会つたわけで、真木さんを見て理解してあげたのであらうか？普通に考えたら…、理解しがたい事柄だけど…。考えてみたら真木さんの服は誰の？身長は男性の時とそんなに変わらない160センチ台後半位なのに、明らかに女性物の衣類だった。葵の元の身長は150センチ位だったはず…。体形が違い過ぎる…。

学校は春休みだけあつて寂しい感じだ。主のいない校舎は静か過ぎて、逆に薄気味悪い感じだし…。

私達は車を停め研究室まで話しながら歩いた。話題は真木さんの胸のサイズだつた。悔しい話だが女性だつた私より大きい事は確かだ。計つたわけではないから正確には分からないうが、自分で持ち上げた感じだとDカップ位はあるらしい。羨ましすぎる。つて言うか悔しい…。

研究室の前に着くと1人の女性が立つていた。服装から年齢を察するにオバサン？

「あの…、どちら様ですか？先生に…、教授に用事なら来週まで帰つてきませんけど。」

「あつ、すみません。それではここに出入りしてる学生さんと連絡取りたいのですが…。あなたたちはここなの？」

「あの、失礼ですが、どういった御用件でしょうか？」

「失礼しました。私はここに昨日入つしてこた学生で、三崎とう者の母です。」

「三崎君の…。」

「マジキーホー入つてもいいたら?」

「あつ、すみません。どうぞ。」

「それじゃ…、あなたたちがこの研究室に入へつしてゐる先生もん?」

「まあ…、複雑な事情はあるんですけど、そつですね…。」

「複雑?」

「まあ、どうぞ。」

中に入つて話を聞くと、どうやら三崎君は昨日の夜のウチに完全に女性化してしまつたらし。三崎君は実家住まいだ。

お母さんは、一緒に夕飯を食べている時に、変化していく息子を田の当たりにしたらしく、びっくりしたそうだ。当然だらう。今も理解は出来ないが、親としては男に戻つて欲しくて、ここに来たらしい。

「なるほど…。でも薬は三崎君が割つた瓶でおそらく最後なんです。」

「えつーすみません。あの子が悪いのですね。」

「やうやうの意味で言つたではありません。私達にも責任はありません。」

す。」

「三崎君には液体が少し体にかかつたから、変化が早かつたのかも
しれませんね。」

「えつ？それは…？」

「私達も同じ症状が出てるんですけど。同じ被害者なんですよ。」

「あなたたちも…？それじゃ…」

「はい。でもお母さんとの事は危無用でお願いします。」

「はあ…。」

「「」の事が外部に漏れれば、三崎君を含め研究材料にされかねない
ので。」

「研究材料？」

「要はモルモットです。」

「え～っ！～考へてもみなかつた…。でも確かにこのままだと有り
得る…。」

「お母さんの他に知つてゐる人は？旦那さんとか？」

「内の人には単身赴任中で家にはいません。知つてゐるのは私だけです。」

「

「そうですか。それではぐれぐれもお願ひしますね。」

「はい…。それで元に戻るんですよね?」

「それは俺達にも分かりません…。」

「そんな…。」

「すみません。それが現状で…。俺達もビックリしているか…。」

「じゃ、まずは先生に連絡してみては?」

「先生つていまだに携帯電話持つてない人なんで、まったく連絡付かないで私達も困つてます。」

「真木さん昨日のファックスの番号は?..」

「昨日、電話したら「コンビニ」だった。」

「そつか…。」

「お母さん=崎君はどうな感じですか?」

「ん~…、発育し過ぎのグラビアアイドルみたいな感じですかね…?」

「いや、外見じゃなく内面と言つが、へ「こんでませんか?俺達も朝発育し過ぎ?昨日触つた感じではAカップ位だつたに…、真木さんのDカップを越えたか?一人して羨まし過ぎる…。」

「いや、外見じゃなく内面と言つが、へ「こんでませんか?俺達も朝

起きてからの事で、どう言つたらいいか分からぬですけど…。」

「司なら昨日の夜から、部屋で引きこもつて出て来ないの。今もどうしてるか…、心配で…。」

「ですよね…。今度ウチらが遊びに行きますよ。同じ境遇の俺らが
いけば、少しさは気が紛れるでしょ?」

「お願いします。では早速…。」

「いや、ちょっと研究室内を少し調べてみようと思つので、お伺いするには明日以降にでも…。」

「もうですか……。」

調べる？何か手掛かりでも探すのか…？何か気になる事もあるのだろうか？

三崎君のお母さんは、住所と携帯電話の番号とアドレスを交換して帰つていった。

「マッキー今日まだこれから向かうつもり?」

「何つて…。」

一瞬私の方をチラシと見た気がした。

「パソコンの本体を持って帰るつもりで。」

「みんなのどうするの?」

「先生の事だから、ここ以外にもデータのバックアップはあるだろうし、持ち帰つて調べてみようと思つてや。」

「そのパスワード知つてるの?」

「まあ…。」

「じゃ、今いで良くな?」

「ゆづくつ落ち着いて見たいから家でやるよ。」

「やうなの?」

「……。本当は保険の意味合ひが強いけどね。」

「保険?」

「色々考えられるだろ?先生の親戚の田丸さんの前で言つのもなんだけど、俺らが先生に裏切られる事だつて考えられるし……」

裏切る?

「もし先生がバックアップデータ持つてなかつたら、その時はウチの方方が有利なるし。」

「まさか……。」

セツキチラシと見たのはこのせいが……。

「私なら気にしないで下さい。親戚といつても遠縁で、私には教授の記憶はなくて、顔すら分からないですから。」

「やうなの?」

「はい。」

「やう……。マッキー他は?なんか持つて帰るものある?」

「今んどじは無いかな……。」

「やう……。ねえ、マッキー。」

「何?」

「恥ずかしい事あるんだけど…。」

「どうした改まつて？」

「実は私ね…、今そのままの体でいいかなって…。」

「男のままつて事?」

「アリ…。」

「あ？何だ？葵は何を言に出したんだ？」

「実は私…、」

「性回—性障害?」

「…。」

「図星?」

「気付いてたの?」

「まあな。人を見る目が他の子と違うよ。男を見る目も女を見る目も…。それに2年間一緒にいて、スカート姿を見た事がない。」

「だから…。」

「構わねんじやね？お前がそのままいたいなひ…。」

「マックー…。」

「ウチの先生の研究に興味ある奴は、多かれ少なかれそんなもんさ。冷やかしも含めてな。」

「あの…、質問してもいいですか？」

「何？」

「教授は何を研究なさいたんですか？」

「えつ？田丸さんは何も知らないで来たの？」

「はあ…。」

「あー、じゃあ、田丸さんはカクレクマノミって知ってる？」

「はあ…。あのちょっと前にアニメ映画になつたやつですよね？」

「やう。じゃ…、あの魚つて自ら性転換するの知ってる？」

「へへ、やうなんですか？」

「ん？」

「群れの1番大きいメスだけが、子供を産む事が出来るんだ。群れの中で次に大きい奴だけがオスで、あとは全部メスなんだ。」

「はあ…。」

「そのボスメスが死んだ時、群れの2番目に大きな体の奴がボスに

なれるんだが、次に大きいのは？」

「オス…？」

「そう。そいつがメスに性転換してメスになり、次いでかい奴がオスになる。」

「へ～つ。えつ？つ、つまり先生は…？」

「性転換の研究さ。あと自然界では、植物や魚類、海老の一部でもその現象は見られるらしいよ。」

「つまり…、」

「研究は一応成功してたって事かな。今のところ遺症っていうか、弊害もないし人間に投与しても平気そっだし。」

「でも許可なく人体実験したら…、」

「今回は事故だよ。それにこんなのが日本で許可が下りるわけがない。」

確かに…。

「でもこんな薬が世間に回ったら、人権的に…、いや、人道的にダメじゃないですか？」

「葵みたい子にはありがたい薬さ。」

「それは…。」

「体にメスを入れなくてすむし、生殖機能だつてもしかしたら、変化後の体通りに機能するかもしね。」

「…。」

「ホルモン剤を投げるとみなす体の負担もなくなる。いい事の方が多い？」

「そつか…、でも悪用される可能性だつて…。」

「確かに…。でも氷室教授が見つけなくとも、いづれ誰かが発見する。いつか誰かが発表して良かれ悪しかれ世の中に出るなら、少しでも早く出た方がいいでしょ！ 苦しんでる人の為になつた方が良くない？」

見方を変えれば、どちらも正解なのかもしれない…。でも私達レベルで議論されるべき問題ではない気がする…。

葵のカミングアウトを真木さんは、サラッと受け止めていたが、私にとってはセンセーショナルだった。

「ナチュラルマッチキーは？ 性同一性障害？」

「俺は…、高校の友人がこれだった…。奴は真剣に悩んだ揚句に自殺したよ。最後の最後に俺には相談してくれたけど、力になれなかつた。俺は話を聞くくらいしか出来なかつたからな…。」

「じゃ…。」

「でもそれはマッチキーのせいじゃないじやん！」

「どうだろ？ 俺の顔や態度に嫌悪感が出てたかもしれない…。当時の俺は、これについてよく理解してなかつた…。」

「…。」

「それから少しは関心を持つようになつたけど、俺自身はノーマルさ。奴には男友達としてしか接してやれなかつた。」

「そつか…、」

「一田俺ん家行こつか？』

「ゴメン。これ運んだら別行動でいいかな？」

「どうした？」

「会いに行きたい子がいて…。」

「分かった。田丸さんはどうする？」

「一人は不安なんで、付いていきます。それにあのウイークリーマンション帰つてもやる事ないですし。」

「OK。じゃ、行こう。」

そして葵を駅で降ろして、車は真木さんのマンションへと移動した。22歳の若者がなんてとこ住んでるんだ…？お嬢様だったのか？いや、以前は男だから、御曹司と言った方が正解か。

「どうぞ。」

「立派なマンションですね。」

「貰いものだけだな。」

「えつ？貰い物？」

「まあ…。」

「真木さんって…？もしかしてホストがなんかですか？」

「昨日までな。」

「昨日まで…。」

「「I」の体と声でやるなら、ホストじゃなくてホステスかキャバ嬢だ
るべ。」

「まあ…、じゃ、「I」のマンション出てかなきゃなんですか?」

「だ…な…。貯金ないからあるから引越したいけど…、問題が
一つある…。」

「何ですか?問題って?」

「不動産契約する時に身分証明書だすだろ?」

「はあ…。」

「全部性別が男になつてゐから、今の「I」の体じゃ契約してくれなさ
セバシヤね?」

「確かに…、じゃ、私が真木さんの振りして契約しましょ?つか?写
真なしの身分証明書でなんとか契約出来ませんかね?」

「わっか…。じゃ…、逆に「I」が田丸さんの代わりに契約すれば
いいって事だ。」

「ですね。」

「なんとかなつせうだな。」

「はい。」

「せうだー！田丸さんとサイズ変わらなそうだから、服とか靴とか持つていきなよ。」

「ありがとう。助かる。」

「ベッドルームのクローゼットに沢山あるから適当に選んで。」

「うん。」

クローゼットの中の普段着の方は学生らしさを感じだが、ぶら下がつてゐるスーツ系はいかにもホストそのものだ。洋服を選んでいると、居間でパソコンのセッティングをしていたはずの真木さんが、いつのまにか後ろにいた。

「田丸さんバイトは？」

「うわーーびっくりしたー。驚かさないでトセーよー。」

「わらいわらい…、で、バイトなんだけビセ。」

「ん？」

「いや、部屋にアルバイト雑誌あつたから。仕送りだけで生活していくのかな?と思つてや。」

「仕送りなんか無いですよー。バイトは早急に探さないとダメですね。」

「だったらホストクラブ紹介するよ。履歴書いらなしー！」

「ホストは……。」

「その体で履歴書の性別欄の女に丸するわけ? どうみても男に丸しねきやだろ?」

「うか……確かにこのままだと不動産も契約出来ないが、バイトも出来ない……。ここはバイトのつもりでやってみるか……? ていうか、その選択肢しか無いのか……?」

「今なら俺のお密さんも紹介出来るし。」

「少し考えさせて下せー。」

「ん、分かった。やりたくないついででも言ひてー。」

「はい。それより、バッグか旅行ケース貸してもうれますか?」

「そつか、気付かなくて悪いな……。そうだ、いつその事、田丸さんが「ココに住めば?」

「えつ? でも出てかないといけないんでしょ?」

「俺の親戚つて事にすれば、いけない事もないよ。従兄弟だな……。うん、そうじゅー。」

「真木さんは?」

「暫くは一緒に住んで、次決まつたら荷物を移動させる。って言っても持つていける荷物は……ないか。」

「暫くつて……？」

「1・2週間だよ。」

「はあ……。」

「ホストクラブには俺の親戚つて事で頼んでみるよ。」

「いや、まだ……。」

「そうと決まつたら、ウイークリーマンションに荷物取りに行こうか？」

「はあ……。」

真木さんは結構強引な人だった。なんだかいつの間にかこの人のベースにはまつてゐる……。

008 良い理解者？（前書き）

多少エッチな表現があります。嫌いな方は読まないでください。

008 良い理解者？

「朝来た時も思つたけど、本当に荷物少ないよな？」

「向こうにあつたものは家電から何から、ほとんど処分してしまつたからー。」

「もつたいない。」

「それなんで、持つてきたのは本当に服だけで、必要な物は、実家に送つちゃいましたから。」

と笑いながら言つてやつた。なんだか真木さんとは砕けて話せるようになつてきた気がする。そのうち私も『マッキー。』って呼んでたりして…。

「せうか…。じゃ…、持つてくれ物はこんだけ?」

「何度も確認しないで下をこよ。」

「ははは…。じゃ、行ひつか。」

「はい。」

帰りも真木さんの運転だつた。これで検問なんてあつたら、免許証偽造で捕まつちゃうのか?

「といひで真木さん。」

「何?」

「あの服って、葵さんじゃないですよね?」

「…うん。」

「誰ですか?」

「これは、友達の…、」

「友達の?」

「ニユーハーフの友達がいてな、そいつに事情話したら車も貸してくれてや。」

「はあ…、Jの車の持ち主か…、納得。」

「何が?」

「いや、だつて、朝の短い時間で事情を理解してくれる友達つて、すごいな…と思つてたから。ニユーハーフさんなら納得です。」

「そつか…。そいつには、研究内容を話した事があったから、意外とすんなり受け入れられたっていうか…。」

「ふうん。でもなんか都会つてすいですね。」

「何が?」

「私の田舎でニユーハーフなんていませんでしたよ。それに性同一

性障害の方に接する機会があるなんて…。」

「アハ…。」

「はい。そうだ! 女になつた真木さんと会つた時のリアクションビ
ュでした?」

「そりやー驚いてたよ。胸揉まれて、股に手が伸びてきて。そんで
もつてすんげー喜んでたよ。」

「喜んだ…? そうですよね…。でも実用化されるとして、どれくら
いの年月かかるんですかね…?」

「どうだろな…? でも奴らは闇ルート期待してんじゃないのか?」

「闇…。なんか危険な臭いしますね~。」

「なんか楽しんでない?」

「だつて、もう思いつ切り関わっちゃつてますもん。」

「だな…。」

「実験台になつてでもいいからつて人も、現れそうじやないです
か?」

「これで子供が産めればその業界の人達も喜ぶんだろうけどな~。」

「出産ですか?」

「うん……完全女性化が彼女達の最終目標だろうから……性転換手術を受けたところで、子供を産めない現実はどうしようもないからな。誰もがブチ当たる壁らしいし……。」

「そっか。」

「なあ、家帰つたら頼みたい事あるんだけど。」

「何ですか？」

「オナニーしてみてくれない?」

え？！？

精子が出るかだけでも知りたいんだ。

- 6 -

「ここでは生理はくるかも知れないと、女性の排卵なんて分からぬいだろ?」

「まあ…。」

「本当は、出た時に無精子症かどうかも調べたいけど専門外だから。だから出るかどうかだけでも知りたいんだ。」

「なんで私が……。」

「頼む。」

「なんかさつも言つてたモルモットの気分になつてきました…。」

IJの発言のあとしばらく沈黙した…。

「そりだよな…。わりい…。忘れてくれ、会つて一回の人に頼む事じやないよな。」

「…。やつます。」

慌ててしまつた…。

「えつ~?」

「やつますよ。誰かがやうなきや ですよね?」

「マジで?助かる。」

「そのかわり…。」

「うふ。そのかわり何?」

「やり方分からないから教えて下れ。」

「あつ…、そつか…、やつだよな…。分かつた。」

それから真木さんのマンションに arrivé まで、またしばらく沈黙が続いた…。なんて恥ずかしいんだ…。

Hレベーターで真木さんの部屋のフロアに行くと、真木さんのドアの前に女性が一人立っていた。

「あの人って、貢いでくれた人じゃないですか？」

「いや、あれは違うよ。」

「彼女？」

「違うってーわざ話してた子だよ。」

「わつわつ？」

「近付くといつも気付いたよ。だ。

「よつー店出なくていいのか？」

「まだ少し時間あるから平氣ー。それより何処行つてたの？そんない
い男連れて？」

「ん…なんか違う？」

「さつき話してた浜崎愛だよ。旧姓浜崎茂。」

「どうもー。茂です。」

「えつ？茂？じつ、この人がニゴーハーフ？」

「そうです。ねえ、早く紹介してよ。」

「田丸由宇ちゃん。今朝くらいまで女の子でした。」

「あら、勿体ない。」

何が？

「でもヨダレがでそくなぐらいカツコイイわね～。この子なら元女でも許すわ～。」

一瞬悪寒が走った。

「立ち話もなんだから二人共上がってよ。」

浜崎さんも部屋に上がるんですか～？なんか先行き不安だ…。

「人の関係つて……？真木さんと浜崎さん……。二人共一応は元……男だよね……。

「愛ちりやんち、」

「何？」

「田丸さんがニコーサーフ見るの初めてなんだってさ。体拝ましてあげてよ。」

「あ～ら、だから珍獸見るみたいな顔してたんだ。タマちゃん見る？」

「結構です。そつ、それよりタマちゃんは止めて下さい。」

「あら、そしたらなんて呼んだらいい？」

「じゃ、じゃ……、由宇でー地元の友達には名前で呼ばれてるのさ。」

「じゃ～愛とはもう友達って事ね。」

「そつ、それは……まあ……。」

友達……？会つてから何分経つた？

「私は愛つて呼んでね。」

「はあ……。」

「といひで田丸ちゃん、私の体見とくっ。」

「えつ？」

「田丸さん見とけよ。社会勉強になるぜー。」

「マジですか?」

「安くじとくよー。」

「今日は止めときます。今日は、刺激が多くてひどいかもしれません…。」

「分かった。見たくなつたら言つてね。といひで真木ちゃん服どこに置けばいい?」

「あへ、ありがと。ソファーの上にでも置いといて。」

「分かった。ねえ真木ちゃん。」

「ん?」

「『ナイト』辞めて行かないんでしょ?」

『ナイト』……?

「『』の体じゃない。ホストじゃねえだろ?」

「真木さんがホストしてた店か…。

「なんならウチの店で働かない?」

「遠慮しとく。」

「なんですよ?」

「なんでつて…、当分困らないし、男にお酌しながら触られたりするのもな…。」

「ウチの子達なんかお触り大歓迎なのに…、贅沢な!」

「【詮】とくけど俺はあくまでも…、」

「ノーマルね。分かつてるわよーそ�だ、由宇ちゃん聞いてよ。」

「あつ、はい。」

「真木ちゃんたら、私が工事済んだら抱いてくれるって言つてたのに、約束守ってくれないのよ!失礼だと思わない?」

「工事…?あー工事!工事終わってるんですか…?」

「だったら体は完全女なんだから、見ても仕方ないじゃん!20年間自分の体見てるつーの!」

「あれ?興味出しきた?身も心も女よーやりぱり見せようつか?」

「興味だなんて、違います。つて變ちゃん本当は見せたいんじゃない

いですか?」

「えつ?あーそつのかな?」

「男と別れて、今見てくれる奴いないからな。」

「ん~、確かに。」

男?まあ…、確かに綺麗ちゃんみたいな綺麗系の「ゴーハーフなら、彼氏がいてもおかしくないか…。

「やついえば理由聞いてなかつたけど、なんで振られたの?」

「『なんだ』って…、」

「言こたくなかったら別にいいけど。」

「じいてあげれば変態だったのかな…?」

「へへ、変態!-?」

「私の竿有り玉無しのト半身ヘ・やつむー事ヘ・ビヒムー事ヘ・変態つて理解

竿有り玉無しのト半身ヘ・やつむー事ヘ・ビヒムー事ヘ・変態つて理解出来ない…。」

「『やつむー事ね。』じゃないわよー約束守らないで…。それに、やつむー間に女の体になっちゃってー羨まし過ぎる。私なんかい

「へりお金かけたか…。」

「へりかけたんですか…？体は興味ないけど、そつちは興味あります。

「へりだめちやん、田丸さんにお願いしよひよー。」

「ん？ 私？」

「あつ、へりね、この際由宇ちやんにお願いしようかな？」

「えつ？ 何？ つて、やつぱりアレか？」

「ねえ～由宇ちやん。私どへりへ。」

「まつ、まほまーつ…、嫌ですー遠慮しどもます。」

「愛ちやん振られいやんのー。」

「んー、諦めないー由宇ちやん考えとこてね？」

「考えれないつーのー。」

「へりだー車じぱりく借りとこて大丈夫？」

「ポンコツだけど大事に乗つてね。」

「サンキュー。分かつてるつてー。」

「愛ちやんがいたのは短い時間だけど、精神的に凄い疲れた…。出

来ればしばらく会わなくてもいいかな…。

それから真木さんはパソコンに向かっていたが、『クソツー』といふ声が聞こえてきたので居間にいつてみた。

「どうしたんですか？」

「パスワードが変わってる…。」

「え？？」

「確かに何ヶ月かに一度はえていたのは知つてたけど、このタイミングで変わつてるとは…。」

「思ひつけば…？」

「試したけどダメだ。」

「そうですか…。でも、まだ教授に裏切られるつて決まったわけでもないですし…。」

「まあ、そうなんだけど…。」

沈痛といった感じか？少しへこみ気味だ。

「そうだ！飯でも食いに行くか？」

「はー。あつ、でも…。」

「でも？」

「無駄使いしたくないので、私でよければ何か作りましょうか？」

「手料理か…、でも作るって言つても材料なんか一切ないしな…。」

「冷蔵庫の残りもので…。」

とキツチンの冷蔵庫を開けると、本当に材料になるものは入つてなく、水にビールに一応調味料の類いが入つていた。

「ないだろ？それに飯くらい俺が奢るよ！」

「本当ですか？」

「ああ…。なんでも言つてくれーイタリアンか？焼肉か？」

イタリアン…、なんていい響きだ…。私の田舎には駅前に喫茶店があるだけで、ファミリーレストランやファーストフードがない町だった。5年前にやつと出来たコンビニは2年持たずに潰れたし…。でも今の私の体は肉を欲していた！

「じゃ、焼肉でー。」

「おじ、じゃ行くか！」

「はい。」

「こんなに食べていいいものか？それにこんなにビールが美味しいなんて…。逆に真木さんはそんなに食べてなく、焼きに回っている。

「じゃんじゃん食べて！」

「真木さんも食べて下さじよ。」

「食べてるだろレバ刺しひとか…、」

「レバ刺し好きなんですね？」

「アレ…、おかしい…、」

「えつ？」

「いや、俺はこんなにレバーなんて食わなかつたのに…。」

「そりなんですか？さつきから美味しいそりに食べてゐるじゃないですか。それにさつき追加もしてたし。」

「ああ…。」

変な人だ。あー、それにもかかへてカルビの脂がこんなにしつこく感じるのは、この肉が上等なカルビだからかな…？

「美味いか？」

「はい。」

「ダイエットとか気にしてないのか？」

「美味しいものを食べてる時は、『明日からやる』って決めてるんです！」

「随分都合いいんだな？」

「はい。それに今は体が男性なのでカロリー消費率も高そうですし！」

「そつか。」

「女の時は筋肉が少ないので、消費カロリーが少なかつたみたいで、女性は男性に比べると太りやすいみたいです。」

「なるほど…。つて事は今はこっちが太りやすい体质つて事か…。ん、待てよ?つて事は、レバーを食べてる今の俺は鉄分を欲してるわけか?」

「かもしれませんね?意外と生理も早く体験出来たりして!..

「面倒臭いのは避けたいな…。」

「人には射精要求しておいで、自分はそれじゃおかしくないですか?」

「声でかいよ。隣に聞こえだろ!..

私はビールを飲んでるからか、少し機嫌がよくなつてるらしい。

「あつ、すみません。でも生理がくれば子供産めるって事じゃない

ですか？」

「さうか……。理論上そうだよな……。」

「はい。でも妊婦があの薬の影響受けたりひとつなるんですかね？」

「妊婦が……？ 妊婦は昔から薬の服用はダメって相場が決まってるんだからダメだよ！」

「『もしも』の話です！ 今回みたいな事故だって有り得るじゃないですか？」

「……。そうだよな……。どうなるんだろうな……？」

「追加のレバ刺しにカルビお待たせしました。」

店員さんが追加の肉を持ってきた。どうでもいいけど食べ過ぎか

……？

011 更なる変化

真木さんは飲み方が大人だ。やっぱり元ホストだから？私といえば普段飲み慣れてないから、中ジョッキ2杯でいい気分…。

「マッシュキーー！」

「ん？」

酔った勢いで『マッシュキー』と呼んでみた。

「…。」

「何？」

「今日はまだやつをままでした。」

「どう致しまして。また食べに行こうな？」

「はい。でも今度は割り勘でー！」

「あんまり無理すんなよ。金ねーんだろ？」

「…。」

その通りだが、そんなにストレートに言わなくてもいいじゃん…。

「キチツと働くつーのー。」

「働いて給料出た時に男だつたら、今度はそつちが奢つてくれよ。」

「へつ…、それは…、割り勘でお願いします。」

「なんで?」

「その時もし体が男でも、心はこの女なんで…。」

「なるほどね。」

「はー…。」

「なあ?」

「…。」

「俺の事『マッキー』でいいから、そつち呼ぶの『由宇』でいいか?」

「あつ…、ですね…。これからみひくへねマッキー…。」

「よろしく由宇。そつ着いたぞ。エレベーター乗つて部屋上がる。」

エレベーターみたいな狭い空間…。マッキーつてよく見るといい女だな…。襲いたくなつちやうかも…。

って何考えてんだ?俺は男じゃねえ! あ…、俺じやなくて私! 私だつづーの! 变な感覚だつた…。酔つてるから酔つてるからに違ひない…。

「シャワー先使つていこよ。そつぱつしてきな。」

「ああ、サンキュー。」

「タオルは棚にあるやつ適当に使つていいからー使つたら洗濯機に突っ込んでおいてよ。」

「分かった。」

脱衣所に入つて一枚ずつ脱いでいく。パンツ一枚になつて鏡で自分を確認すると、朝より筋肉が付いていてソフトマッチョな感じになつている。

「理想的だ…。」

何言つてゐんだー？なんか俺頭おかしくなつてきたかな…？あつ…、また俺つて頭の中で…。

パンツを脱いでアソコを見ると、興奮して固いわけでもないのに、朝見たより大きくなつてるか…？

サツとシャワーを浴び腰にバスタオルを巻いて出で行くと、

「キャッ！」

「何ーなんだよ？」

「いや、なんでもない。なんだろ…？」

「うひの台詞だよ。お風呂空いたよ。」

「分かった…。」

何が『キャッ！』だよ。若い乙女が初めて男の裸見たわけでもあるまいし…。

ん…？ そうゆー事か？ 感覚までが変わってきたって事か？ でも女だった俺が風呂上がりに胸も隠さずこんな格好で歩いてるなんて、昨日の俺からは想像出来ないな…。あつ…、また、俺って言つてるし…。もう俺でいいや…。

葵じやないけど、このまま男も悪くないかな…。そんな事を考えながら横を見ると、昼間愛ちゃんが持つてきたバックが皿に付いた。何が入ってるんだ？

え～とまずは…？ 新品のブラにショーツか…。で？ それと…、まあ…、着替え一式つてどこか…？ ん…、化粧品か…、おいおい生理用品までは準備いいね…。

今度はテーブルの上の雑誌に目がいく…。表紙は最近人気のアイドルだ。可愛いね～。一枚めくると、見開き一杯にその子が水着になつて笑顔を振り撒いてる。女だった頃の俺より胸でかいな…。自分が生睡を飲んだのが分かつた。

もう一冊別のエッチそうな雑誌も興味が沸いてきた。表紙は布の少ない水着をきたグラマーな女性。めくつていくと、一枚目から素っ裸の女性…。男性誌つてバカだな…。

でもしつかり俺の下腹部はムクムクと反応し始めていた…。

「おー、そのバックパック投げて！」

風呂場の方からマックキーが声かけてきた。

「自分で取りきなよ。つーか、別にタオル巻いて出でくればいいじゃん。」

「ん…まあ…でも、なんか恥ずかしいな…。」

恥ずかしい？なんだろ？急に女っぽくなつた？

「女の裸なんか昔の自分ので見慣れてるよ。今はこんな体だけど…。」

「

「あー、そうだよな。なんか急に恥ずかしくなつちやつてさ…。」

そう言つと何を思つたのか首にバスタオルかけて素っ裸で出でてきた。

た。

「おーーー！極端なんだよーーまったく…。」

逆にこいつが田のやり場に困るつて…。それにしてもウエスト細いな…。

「ははは…見慣れてる割りこは照れてるじやん。」

「女同士でも、片つ方が素っ裸のシチュエーションなんてないし…。」

「

「やつちだつてほとんど裸だろー。バスタオル巻いてるだけだし…、ん…ー?」

「ん?」

マッキーの視線が「」の方に向けられ…?ん…?

「何で下半身『カク』してんだよ?」

肩幅に足を開き腕を組んで見下すしながら言われた。「」っぽい感じ?

って、それよりなんて答えればいいんだ?まあ男の生理現象だよな…?でもなんて言つたら…。

「フツ…。」の雑誌見てたの?」

「うへ、うそ…。」

「やつか…?エッチな雑誌見たらやんと反応するんだな…?」

「えつ?」

「こや、」の手の雑誌みたら興奮して反応するんだなって…。」

「なつ、なんか…、マッキーって、じつしても研究者田線なんだね…?」

「あつ、わり…。」

「いいけど……」

「もうだ…ついでだから頼んでいい？」

何か期待した顔で見てる。って事はやっぱアレかな？

「ダメ?」

「…分かった。」

一度はほんとしたりして、拒否してもいざれ要求していくだろうし。

「よし、ちょっと待つでんな。」

そう言って、テレビの前に行って向やローレをセッティングしだした。もじかしてエッチなDVD見るとか…? 再生ボタンをマッキーが押すと案の定そっち系のDVDだ。

彼氏もAVが好きで、みーと一緒に見させられた。だから俺は多少見慣れてるところがある。

マッキーはボックスタンドティッシュを持ってきて横に腰掛けた。目が合った。

「横にいたら気が散る。」

「こ…せ…。」

「あ…、もうか…やり方か?まあ、もうじばりく観てなよ。」

「うん……。」

ならべくなら、ひとつとと済ませたて終わりにしたいのが今の心境だ。

エッチなシーンはどんどん進んでいく……、アソコが更に固くなつていくのを感じ恥ずかしくなってきた。

「そろそろバスタオル取りなよ。」

「……。」

「大丈夫だよ。じつちだつて見慣れてるし!」

「うん……。」

考えてみればそうだよな……、向こうだつて裸なわけだし……。ん?
なんか不思議だ……、昨日初めて会つた人の前でお互い裸なんて……。
恋人でもないのに……。

「何こいつガン見してるんだよ?つてゆうかヤラせねーぞ!」

「ちひ、違うよ!..」

俺が女とヤル?想像してもみなかつた。

「動搖した!」

「じひないつーの!..」

「まひ、触るくらいならいいけどな。ほらつー。」

そう言つて俺の右手を取り、自分の左胸に持つていった。柔らけー…。こんな感じか…。つて、お風呂の時に、自分の胸マッサージしてたじちゃん！

「バスタオル取るよ。」

うわつーバスタオルが取られてく…、

「デカツー！私の…、ん…？わた…、あれつ？」

と言葉を噛みつつ、手はアソコに伸びてきた。触られてるよー…。しかも上下に動かし始めたし…。なんか、気持ちいいかも…。

「どう、どうしたの？」

「いや…、自分の一人称がおかしくて…。頭の中で考えるのと違つていうか…。『私』ってのはスッと出てくるんだけど…。」

話しながらも手の動きは止まらない。気付けば俺もマッキーの乳頭を刺激してたりするし…。

「ストップー！」

「何？どうした？」

「自分でやります。なんか頭変になりそうです。」

「なんだよ。気持ちよかつたら出してよかつたのこ。」

「じゃなくて、なんか変じゃありません?」

「何が?」

「マッキーはノーマルなんですよね?」

「わうだよ。」

「INのシチュエーションに違和感ないんですか?」

「まあ……、そりか?まあ、言われてみれば……、そりかな……?」

「でしょ?」

「そういうえば他人の男性器触るなんて初めてだ……。男だった時に他人の触るなんて考えもしなかった……。」

「さつき全然躊躇しなかつたでしょ?」

「そんな事は……。わ、わ、気持ち悪い……」

やうやく、マッキーは手を離した。

「どうします?明日は患者から趣味趣向まで完全に変わつたら?」

「そんな……。」

なんか一気に不安になつてきた……。そしてその時携帯電話が鳴つて一人して、ビクツとしたのだ……。

鳴つてゐる電話はマジッキーの携帯電話で、葵からの着信だった。マジッキーが受話器越しに葵と話している。

「んー。それで？ほおーっ！普通になつたつてことか？そりや良かつたじやん！良かったかどうかはあれか？まだ分からねえか？」

「マジッキー！」

「あー葵ちゃんと待つてな。何？」

「葵さんなんだつて？」

「あー、なんでも、好きだつた子に会つに行つたら、なんか女の子の事が好きだつた感情がなくなつて、男の方に興味が出てきたらしいよ。ノーマルになつたみたいだつてさ。」

「えつ？ノーマル？」

「うふ…、何？」

「でもそれつておかしくないですか？」

「何が？」

「今の葵さんは男なわけで、その葵さんが男を好きなんでしょう？」

「ん…、あつ、わつか…、それもそうだな…。葵さー。」

またマッキーは葵さんと話し始めた。

葵は体が変わつても性同一性障害なのだろうか…？それだと可哀相な気がする…。という事はこの実験は失敗つて事か…？薬の量を調整すればなんとかなるのか…？

それを考え出したら三崎君が妙に気になりだした。はたして三崎君はノーマルな人？それともアブノーマルな人？それに量つて意味だと、少量とはいえ直接皮膚にかかるわけだし…。

「んー分かつた。じゃ、とりあえず明日な。こっち…まあ、こっちはあれだ、なんとかやつてるよ。うん。そうだな…、9時くらいまでに連絡するよ。お、じゃ、また。」

電話を切つてしまつたようだ。特に話も無いが代わつてくれてもいいのに…。まあ明日には会えるみたいだから別にいいけど…。

「何だつて？」

「『『やばいかな~』』だつてさ。」

「わけ分かんないですよね？」

「だな…。とにかく…、ありや、すっかり萎えちやつたな。」

「えつ~？」

本當だ。私に付いている男性のシンボルはすっかり萎えてしまつてゐる。いまさらか…。

「よし、仕切り直してやるか？」

「やるの?」

「おー…、ってHツチじゃないぞ!」

「て…、っていつか、さつきからNツチがエツチとか言つてて、意
識してゐるやつちぢゃん!」

「やつ、そんな事ないよ…。」

「どうだか?」

本当にマツキー、エツチしたかつたりして…。また「」で電話が
鳴つた。チッ…。どちらともなく一人共舌打ちしていた。

今度の着信は私の方だった。ディスプレイには地元に残した彼氏
が表示されていてる。

「ゲツー?」

「出なごの?」

「「」の声じや、出れないでしょ?」

「変わりに出ようつか?」

「友達の携帯電話に出ながのひのひて変じやない?」

「やうか?」

「うん。」

「ところで相手は誰？親？」

「彼氏。」

「かれつ。」

着信音は30秒位で鳴り止んだ。

「どうすんだよ彼氏？」

「どうすんないいって……。」

今度はメールの受信音がなった。メールの内容を確認すると、

「何だつて？」

『『連絡くれ。』つて。』

「そんだけ？」

「そんだけ。」

多分話題は「ゴールデンウイークの話。多分こいつ遊びに来るつ

て話だと思う。そんな話だけしてあって、具体的な事を何も詰めてなかつたから、その確認の電話だつたのだろう。」

「付き合ひ長いの？」

「2年。」

「春休み中帰る予定だつたとか？」

「彼は4月から新社会人で、今は研修中だから会えないし……。それに、そのまま4月に入つて仕事だつて言つてた……。」

「そつか……。」

「ホールデンウイークまで元の体に戻れるかな?」

「どうだら?」

「…。」

「明日三崎君の家行つたら沖縄行つてみる?」

「教授のと?」

「それ以外あるかよ?」

「でも居場所知らないんじゃ……?」

「ファックス送つてきたコンビニ辺り行つて、写真持つて聞き込みするしかないだろ?」

「見つかるかな……?」

「何もしないよつよくない?」

「まあ……。」

果たして無事教授に会える事が出来るのだろうか？それより彼氏に何でメール返そつ…？つて、三崎君の家に行くのはいつ決まったんだ？

結局昨日はあれつきり寝る事になつた。俺的にはモヤモヤして嫌な思いで寝床についた。なんだか眠りの浅いスッキリしない夜だつた。

更に最悪な事に、ピンポーンと朝から何やら来客らしー。なんだよこんなに朝早く…。田代めが悪いことはこの事だ。

『えつ?どうした?なんで来たの?』などと、女の声になつたマックキーの声が聞こえてきた。

「何あんた馴れ馴れしいー翼ー翼ビーーるんじょ?」

なんだ?誰だら?そんな事思つてたら、部屋のドアが急に開いて掛け布団が剥ぎ取られた。

「つば…?あんたが翼の従兄弟?」

眼に目を無理矢理こじ開けると、スーツ姿のキャリアウーマン風の女性が立つていた。

「…はー?」

朝から全く話が読めない。なんだこの展開は?ドアの方を見るとい、両手を合わせて謝つてる感じでマックキーが立つている。

「だから…、あんたが翼の従兄弟かつて聞いてるの?」

「んなお姉さんに朝から怒られるなんて、初めてかな…?いや、

別に怒られてるわけじゃないか…。でも詰め寄らねてる?

「翼君行ったの?」

「…。」

「あんたなんとか言こなさこよー口が無いの~それとも耳が無いの?」

「あつ、あつまく。」

「やつと喋った!~?~あの人何処行ったの?」

「あの…。」

「何?」

「おせよひざこます。俺、田丸由宇って言こます。」

「えつ?」

「始めまし!。」

「あつ、じつも…。つてやうじやない!~

「始まばり怒るか?」

「えつと…、マッキーから…、翼君から連絡あつたんですか?」

「うう…、朝メールがきて、その後携帯電話の電源落としたみたい

で一切連絡つかないのよー。」

「ナリなんだ…。」

マッキーは、なんて余計な事をしてくれたんだ。気付くまでほつとけばいいじゃんか…。それをわざわざ知らせなくても…。

「それでメールはなんて?」

「『しばらく旅してきます。その間従兄弟に部屋貸します。』って、そんな一方的な事ひどくない?」?

「でも捨てられたわけじゃないんでしょ?」

「え? ?」

「だから、別れたわけじゃないんでしょ?」

「やつ、それもそうね…。つてゆーか付き合つてもないけど…。」

「付き合つてない…。」

マッキーの方をチラッと見たら目を逸らされた。ニヤロー・女の敵め!

「うん…。それで翼の行き先知りたいんだけど…? 何か聞かされてない?」

『うん…。』と俺が答えた時、この人の顔が淋しそうだった。

「昨日の晩まで一緒にここに居たんですけど……。」

急にマッキーが会話に入ってきたやがった。

「この子は……？」

「えっと……、」

「もしかして、あなたも従姉妹？っていうかむしろあなたの方が翼に似てるわね……。」

「そっ、そうですか？」

そりゃそうだ。元はマッキーで原型留めてるんだから、面影があるに決まってる。

「もしかして妹さん？」

「違います……、」

そう言つたと同時にマッキーが『やうです……』と言つてしまつた。マッキーと田が合つ。

「えつ？どうち？」

「えつと……、妹みたいなもんで、『いつが従姉妹で、俺は一人の近所に住んでる幼なじみです。』

「そつ……、あなたが従姉妹なんだ……。」

「はい。」

「で、あんたは幼なじみなの？」

「です……。」

なんとか彼女に対して、いつの設定が決まつたみたいだ。

「で？ 翼どこ行つたの？」

その設定は決まつてない……。俺はチラシとマッキーの方を見てしまつた。その目線を彼女は見逃さなかつたよつて、マッキーの方に振り返つた。

「えつと……、何処に行くとは聞いてません……。しばらく留守にするから、よひしくって……。」「

「本当？」

「本当です。」

「やう。」「

そんなんで「まかせんのか？俺ならもつと聞くな……。」

「一人？一人なわけないか……。せつと女と一緒によね……。」

何だ、それが聞きたかったのか……？要は嫉妬か？

「それは無いと思ひますよ。」

「思います？あんたに翼の何が解るの？」

「いや……、美穂さんに連絡して行くべういだから、それはないとほ
う。」

「ちょっと待つて！」

「はい？」

「あんた、さつきから馴れ馴れしいけどなんなの？私の下の名前も
知ってるし……。」

「えっ？あ……、それは……。」

「翼と寝た事あるの？」

実際に妙なやり取りだ。この美穂さんが、全てを理解してくれる人
ならば、多分マッキーは喋つてるはず……。愛ちゃんみたいに……。
でも喋つてないって事は、理解してくれる可能性は低いつて事だ
らう。

「そんなわけないでしょ。」

「……。」

「あなたは従兄弟が恋愛対象になるタイプ？」

「それは……。」

「ないでしょ？」

「まあ……。」

「私ももうです。従兄弟と寝たりしないですー。」

「わっ、わうだよね。『ゴメンね、変な事言つたりして……。』

「気にしないで下さー。」

「それより私の名前は、翼から聞いたの?」

「はー……、それで翼が帰つてくるまで私達居てもいいですかね?」

「どう、どうぞ……。それよりいつ戻つてくるかな……? それも聞いてない?」

「はー……。」

「わう……。」

「あーーーあとお願いしたい事あるつて言つてしまーしたー。」

「何?なんだつて?」

「由宇を……、田丸君を一人前のホストにしてくれつて……。」

「あ?何言い出した始めたんだ…?」

「「」の子?私は?私の事はなんか言つて無かつた?」

「特典付。」

「え？…。」

そしていちいちチラシを見た。

「確かによく見るトイケメンね…。ホストもつてゐるの？」

「翼の勤めてた『ナイト』に紹介してもうすぐだったんです。」

「マイキーへ行くがぜか、まだ決めてないだろ…。」

「履歴書要らないことなんて他になんないです。」

「確かこりゃたださ…、なんでもうなるんだよ。」

「よし！私がそこまでのじめで立上りあげる。美穂さんだけひいてある。」

「でも翼いないだろ…。」

「あなたまで悪ノリしないで下さっこ…。美穂さんだけひいてある。」

「つてそういうんだよ？」

「でもやっぱり俺はホストするしかないのかな…？」

美穂さんと三人で朝食をとることになり、準備は全てマッキーがやつてくれた。朝食といつても「コーヒーを入れてトーストにベーコンエッグと簡単なものだけ」。手慣れたもんだが、美穂さんに疑われないようにしてほしい…。

会話は…、何を話していくのやら…。美穂さんの事はあとでマッキーに聞けばいいし…。マッキーの事でも聞いてみるか…。

「二人は?付き合ってるの?」

「へつ?」

逆に質問された。

「そんなわけないじゃ ないですか!」

「そんなわけない?でも昨日の夜はここに一人だったんでしょ?」

「まあ…。」

なんて言い訳すればいいんだ…?嘘に嘘の上塗りだから、段々辛くなつてくる…。

「彼氏をすすんでホストにさせるような彼女なんていないですよ。」

確かに…。彼氏がホストになるつて言つたら反対するよな…。

「そう…よね…。だつたら一人は相当な仲良し?」

「は、はい……。年も近かつたので……。」

「まあ……、いいわ……。田丸君だつけ？」

「はい。」

「携帯電話の番号とアドレス教えてよ。ナイトに勤め始めたら連絡頂戴。」

「分かりました。」

そして連絡先を交換すると、美穂さんはやつと仕事へ向かった。

「マッキーね……、」

「悪かつたーまさか来るとは思わなくてた。」

「それにしても……。」

「まあまあ……。でもこれでお互いにこの家に住めるみたいだし。」

「そうだけど……。」

「えっ？一緒に？同棲…？昨日初めて会つたばかりの人と一緒に住むのーー？」

「必要な物あつたら実家から送つてもうえよー。」

「ちゅうと…。美穂ちゃんのくじしないでしょ？」

「否定もしてなかつただろ?」

「やうだけど…。」

「美穂はドミだから、強く上田線で言われたらほとんびりしゃべり。強く出られると『嫌ー』って言えない人なんだよ。」

「マッキーつて人は…。」

「店に来たら優しいこと」と、キツ田に書いたこのバランス感をつけろよ。」

「えへ?」

シンケレッテやつか?ちょっと違うか…。甘えたり突き放したり…。オラオラぽいのつてあんまり好きじゃないなあ…。

「難しくないよ。役者のつむいで演じればばいにのさ。」

「そんな事言つても俺は役者じやないし…。」

「まあ不本意かもしけないけど、昨日から男なわけだし、この際だから男を楽しんじゃえばいいじゃん!」

「葵じやあるまいしー。」

「やうだけど、今日元の体に戻れるわけでもないし、ポジティブに

考えていくしかないだろ?」

「…。」

「まあ、いいや。着替えたら三崎君の家行くぞー。」

「分かったよ…。」

なんだかんだマッキーのペースになっちゃつ…。まつたへ強引だなあ…。

「葵は…。」

「さつきメールの返信があつて、OKだつて。」

「何が?」

『『アパートに迎え行くから10時に出れる準備しつけ。』つてメールしておいたから、その返事がOKって事だよ。』

「説明下手だな~。」

「うみこみー。」

「ところで美穂さんって何やってる人?このマンションのお金だって彼女から出てるんでしょ?」

「まあ…、あんまり話したがらないんだけど…、社長な事は間違いない。親も相当な資産家みたいだしな。」

「ふうん。そうなんだ。社長かー？その割には随分若そつだつたけど何歳？」

「36歳。」

「えつー！嘘？どう見たって20代じゃん！」

「だな。最近のエステとか美容の力つてすごいよな。あと化粧か？」

「ほえーつ。36かー。」

「自称だから本当の年は知らないけどな。ちなみにバツ一子無しで金持つてる事は間違いねえよ。」

自称ね。バツ一は別にどうでもいいけど…。金持つてどんだけ金持つか気になるなー…。

「興味出でてるだろー。」

「体の関係は当然あつたよね？」

「そつちに興味だすなよーそのくらい想像したら分かるだろー。」

「だよね…。」

やつぱりか…。

「ちよつと待つてーもしかして、それ私もやるの？」

「枕ね…。」

「枕？」

「枕営業つてやつね。色恋営業だから一段上に上がりたかつたらみんなやつてるよ。一度寝てやつたら、お密として長く引っ張れるしね。つていうか、普通の健康的な男だったらそのくらいなんでもないよ。」

「…そんなもん?」

「逆に寝た事ない奴は、いつまでも昇つてこれねえ奴だよ。センスないか、話し下手か、要は根本的にホストとしてダメな奴だな。」

「なるほどね。」

「まあ中には客と寝なくとも、ナンバー1になる奴もいるんだろうけど、今のところそんな奴聞いた事ないな…。いても稀だよ。ヘルプの奴らは、無駄に枕してる奴がいるみたいだけだ。」

「無駄にね…。これつてレクチャーしてるつもり?」

「そんなつもりはないけど…。まあ、太い客か見定める目が大事だつて事や。」

「太い?」

結局まだレクチャーは続くらしい。

「沢山お金を落してくれる客だよ。上客さ。太客以外と枕しても無駄になる事もあるし。」

「美穂さんは太い客なんだ？」

「Hースじゃないけどな。」

「Hース？」

「太客の中でも一番の上客の事さ。美穂は三番田くらいかな。」

「ふ〜ん。そのHースには貰って貰っていないの？」

「まあ、色々貰つてるよ。だけど中には貰いづらいものとかもあるし。」

「例えば？」

「車とか……」

「車？」

「ツーシーターな。今回はず田守と葵乗せるから乗らなかつたけど。」

つていうか貰つてるじゃん！

「あとはクルーザーとか、土地の権利書とか……」

とかつて……すでに俺の想像を超えた……。

葵の住んでるところは普通のアパートで安心した。葵もお水系でバイトでもしてるかと考えていたからだ。

マッキーが葵に電話している。電話を切ると一人の男がすぐアパートから出てきた。葵か？それにしては……。

「不精髪かよ？」

「意外と伸びるのが早くてわ…。シャーバーあつたら貸してくれない？」

「丁字剃刀買えよ。髪濃そうだからその方がいいって！」

「やうなの…？」

葵はちょっとしたアスリート並の体付きになっていた。逆三角形の体形。

元々葵は、レズつていうか性同一性障害だったわけで、理想の異性つていつてもいなのはず…。けど昨日の葵は『ガツチリしたスポーツマン』とか言ってた…。もしかしてバイセクシャルつてやつか…？両方いける人なのかな…？それともただ単に男性ならつて意味かな…？

「マッキー口紅してる？」

「よく気付いたな。由宇はまったく気付かなかつたけど、葵はよく見てるな。」

「マジ? こいつの間で...」

「『由井』って呼んでるんだ?」

「昨日からな。」

「私も『由井』って呼んでいい?」

「うん。俺も葵つて呼ばせてもいいね。おひひひひひひひひ。」

あれつ? 葵は自分の事『私』って言つたな...。やっぱり性別変わつても性同一性障害なのか?

「えいえいえいえ。」

「やつだー服買いくに行くか? そんなピチピチな服じゃ嫌だろ?」

「いいかな?」

「 もう。あと三崎の家行くの二十産も買いたいし。この辺りで美味しいケーキ屋知らねえ?」

「それならここの店ある。服屋行つたあとでいい?」

「OKー。じゃ行こう。」

「その前にお願いあるんだけど...。」

「金だろ?」

「うん…。貸してくれる?」

「貸さないでもないけど、それよりバイトしない?」

「バイト?」

バイト?・またホストの話か?

「テーント?・もらいたい奴がいるんだ。」

『テーント?・どんな話だ?』

「誰と?・その前に何の性別は?」

「世間では「ユーハーフ」って呼ばれてる奴だ。」

「外見は女、戸籍は男って奴か…?」

『愛ちゃんの事か?』

「工事終わってるし、お互いが望むならエッチしてもいいぞ。」

「つていうかね…。」

「頭ん中チパニックなんだろ?」

「ん?まあ…。」

「男が好きなんだか女が好きなんだか、『じゅわ』『じゅわ』してる。そんなトコだらうな?」

「まあ…。」

なんか、ビノーマルな俺には葵の気持ちがよく分からない…。こんなんで愛ちゃんなんかに会つて、更に分からなくならないのか…？待てよ…、俺こそ…、今の俺…どうちが好きなんだ？

「男とか女じゃなく、まずは人と向き合つてみるよ。付き合つとか好きとか嫌いじゃなく、向き合つてから始めてみな。葵ちゃん色々聞いてみるとこ…よ。」

やつぱり愛ちゃんか。人と向き合つか…。分かるよ…な、分からな…よ…な…。

「ありがとう。今度友達として紹介してよ。」

「OK。じゃ合付きのデータは止めとく…。」

「まあ、今日は…。」

あれ？二つの間に合付きのデータになつて…。

「わうか…。」

マッキーが二つをチラツと見た。俺は無理…

「分かったよ由宇。お前には頼まないつて…！」

「マッキーは人の気持ちがよく分かる事で…」

「まあいいや、店行くぞ。」

洋服はマッキーが見立てくれた中から葵が選び、ケーキ屋では葵が適当に美味しそうなを選んでいた。

ケーキ屋の外ではマッキーが誰かと電話している。恐らく三崎君のお母さんだろう。一応事前連絡つてやつだな。ケーキ屋の会計を俺と葵で割り勘して、外へ出て行くと…、

「大変だ…。」

何が?マッキーは相変わらず説明が下手だ…。

「大変だ！」

「どうした？」

「沖縄の……。」

「沖縄？先生から？」

「なんだつて？」

「沖縄の警察から……。」

「警察？」

説明下手なマッキーの話を黙つてきていてると、なんでも教授が泊まっていたペンションの部屋に、一人のおばちゃんが入り込んで保護されたとの事だ。何か盗んだとかはないようだ。

それで、なんでマッキーに連絡がきたかといふと、教授が連絡ないまま2日間帰つてこないので、荷物を調べるとマッキーの携帯電話の番号が出てきたので連絡したとの事だ。それになぜかおばちゃんもマッキーを指名してゐるらしい。

「で？」

「おまけやんが、石垣の本署に移されるから呑つてやつてくれつてや。」

「先生は行方不明なの？」

「うそ…。」

「なんでマッキーがそのおばちゃんを会わないとこないの？」

「あのおばちゃんも私を指差してきてるからだ。」

「マッキーって沖縄に知り合ってるの？」

「いや…、いない。まあ、これってどういってんの？」

「どうして…。」

「マッキーせへじつ思つてるの？」

「うん…。私の見解だと…、教授はいなくなつてなんかないんじやないか…、って…。」

「は？ 2日間帰つてきてなこんでしょ？」

「最後まで聞けよ。」

下手な説明にも段々慣れてきた。

「そのおばちゃんが教授なんだよ。」

「はあ？」

教授がおばちゃん？ 何言つてんだ？ 教授は男つて聞こてるナビ

…。それにペンションの人だつて…。

「教授も薬を持ったか、作ってる工程で、なんらかのかたちで薬に触れてしまった。そして、私達みたいに女性に性転換してしまつた…、とか…？」

「…。」

「それでそれを警察に素直に言えずに捕まつた。」

「…。」

「素直に言えないのは自分の保身の為…。」

「可能性あるわね…。」

それにしてお姉の葉が気になつてきた。男の身なりでお姉な喋り方は止めてくれないかな…。俺の田舎にはニコーハーフもないれば、お姉マンもないから違和感がある。だったら愛ちゃんの方が気にならない。

俺はどうなのだろう?たまには俺も言つてるのかな…。

「で、どうするの?」

「行くしかないだろ?」

「そつか…。」

「一応、沖縄本島までの夕方の便を押さえてくれたみたい。」

「やつた——初沖縄——」

「あー、ゴメン。 とつあえず席一つしか押せんでないみたい。 一応あとへ席頼んでみたけど。」

「でもこの時期なら席空いてるでしょ?」

「じつだら、春休みだし、卒業旅行とかで混んでるかもよ。」

「えーーー?」

「どういへ? ANA? JA?」

「聞いてないよ。 東京の警察と羽田で待ち合せになつてる。」

「由宇私達も予約しよ。」

「折り返し電話へんつてー。」

「でもじつせなならトップシーズンに女として行きたいや。 可愛いビキニとか選んでさ……。」

「何言つてるの? 先生に会いたくないの?」

「まだ、 そのおまちやんが先生つて決まつたわけじゃないでしょ?」

「わうだけビ……。 でもそのおまちやんが先生じゃなかつたら、 先生は2日間も何処行つたの?」

「知らないよー。 クマノミ採りに行って海流に流されたとか?」

「そしたらダイバーショップで大騒ぎでしょーもしそうだったら海保とか含めて捜索活動してて、それを警察が知らないなんて考えられない。」

「そつか…。」

「研究の成果が誰かに漏れて、誰かに拉致されたとか?」

「誰が拉致るんだよ。」

「タイの病院関係とか?」

「タイの病院?」

「なんでタイ?しかも病院つて?」

「それは、あれだよ…、タイの性転換手術の技術つて、世界的に見てスゴイ優秀なんだよ。」

ふうん。

「で、一種のドル箱産業に成りつつあるみたいだよ。」

「性転換手術が?」

「そう。愛ちゃんなんか予約してから一年待つたらしいし。だからこんな薬出来たら、飯の種が取られるようなもんだろう?」

「一年…。って、話が飛躍し過ぎだよーまずはそのおばちゃんに会

つてからだつてー。」

確かにこんな薬が世間に普及したら、そっち系の病院から恨まれるな……。

でも、そのおばちゃんが本当に教授なのだろうか？ 教授じやないとしたら、おばちゃんとマッキーの関係は？ 教授の行方は？ おばちゃん＝教授つて考えた方がいいのか？ マッキーの考え方もあながら間違えでもないのかな……？

018 バツの悪い

三崎君の家に5分前に着いて、わざわざ呼び鈴を鳴らしてくるが誰も出でてくる気配がない。

「本当に三崎君の家？間違つてない？」

「間違えないよ。表札だつて『三崎』になつてるだろ？」

「だね。。。」

「連絡は？してあるんだよね？」

「えつ？」

「してないの？」

「。。」

「ちょっと、電話してみたよ。」

「おつ、おつ。。。」

事前に約束のない訪問ほど効率の悪いものはない。いなかつた場合、相当時間のロスだ。

「あーもしもし。三崎？今ビーピー。あーそう。そつか。いや、」

「マッキーが俺と葵をチラツと見た。

「今? 三崎くん家の前。分かった。じゃ…、近くのファミレスか喫茶店で待ってるよ。うん。分かった。いや、いいよ。昼飯もまだつたし。うん、じゃ、1時間後ね。」

それで電話を切った。どうやら外出中らしい。部屋に引きこもりだった話はどうしたんだ? 励ましこそあたはめでは…? マッキーがバツが悪そうにじつを見てる。

「昼飯奢るか?」。

「とーぜんー!」

「1時間位で帰ってきて?」

「みたいだな。なんか買い物らしによ。」

「買い物? 落ち込んでたんじゃないの?」

どういった心境の変化だ? 部屋から出て買い物するなんて…。三崎君が元々どんな子か知らないけど、元気になつたなら何よりだ。

ファミレスでオーダーを済ませると、葵がトイレへ立つた。

「沖縄の捕まつたおばちゃんが、教授だと本気で思つてる?」

「ひじつまな命つては思つ。」

「そっか。」

「沖縄に知り合いなんていないし、ペンションに2日間いなかつたなら可能性は十分でしょ！」

「間の1日は何処に居たんだろうね?」

俺もそのおばちゃんが教授に思えてきた。

「野宿とか？」

「おばちゃんの格好で？もしさうなら少し笑えるかも。」

その時、キヤーーーッ！と叫び声がして、声の方を向くトイレの方からだ。そこから若い女性が出てきた。店員さんが近付いて何やら話している。

「なんだろね？」

「『ギブリ』でも出たのかもよ。」

「不衛生な。」

他人事のように話ていたが、他人事で済まされなかつた。店員さんがトイレの方に入つていくと『何してらつしやるんですか?』と聞こえてきた。誰かが叫んだ女性に何かしたのか?ストーカーか?『いや……、その……』と何やら言い訳してゐようだ。

「ねえ、由宇さん。」

「ん…？」

「怒り切ってるのって葵じやないよな…？」

「葵？」

葵…。あつ…？もしかして間違えて女性用のトイレに入ったとか？いや本人は間違えたつもりもないかもしれない…。マックキーと目が合い一人して席を立つて騒ぎの方へ向かうと、怒られてるのはやはり葵だ。

「すみません。間違えちゃって…。」

「お姉さん困りますよ。」ちひらのお姉さんと謝り下す。

それから葵はペコペコと頭を下げっぱなしだった。連れの俺達まで…。なんとも情けない…。店員のとつなしもあってなんとか大事には至らなかつた。

ここで警察沙汰になつたら大変だ。葵は身分を証明しなければならなくなる。学生証の顔と今の本人は若干違う。性別に関しては、性同一性障害と言い張れなくもない。ここはオオゴトにしなかつた若い女性に感謝だ。

食事はササッと済ませ早めに店を出た。バツが悪くて居づらかったからだ。急いで食べたからか、食べた気がしなかつた。流し込んだといつた方が正しいかもしれない。

でも明日は我が身じゃないけど、俺も気をつけよう。電車の女性車輌にも間違つて乗らないようにしなければ…。

019 標名（前書き）

久々の更新です。m(—)m誰も書いてくれなそつだから自分で
書いちやいます。更新キタ━━━w(。o。)w――ツ！！

今、私の目の前に座ってる女の子は、確かにグラビアなんかの表紙になつてもおかしくない感じに仕上がっている…。

「なんか私の顔に付いてます?」

「えつ? いや…、何も…。」

三崎君のあまつもの変化についつい見入ってしまった。

「三崎君を…、」

「先輩! もの『三崎君』つてのは辞めて下さご。呼び捨てでかまいませんよ。『三崎』つて呼んで下せご。」

喋り方も女の子っぽい感じか…? いや仕草も…、

「じゅ…、三崎。ひょひょ聞くけど…、」

「はー。」

「引きもつたのが、どうして急に買い物に出来るまでになつたわけ?」

「それば…、部屋でネット見てたら女性の服とかに興味が出てきて…。あとテレビの女性タレントの服とか見て、あの服可愛いとか、あの服セクシーとか…。それに…、」

「はあ……、

「それになんだか急に肩凝つて、母親に相談したら『胸が大きいからよ。ブラだけでも買ってこようか?』って言われて、それで『せつかくならちゃんとしたサイズ計つた方がいいから、一緒に買い物行かない?』って誘われて、なんか買い物つて聞いたらウキウキしてる自分に気付いて。」

確かに服の上からでも、その豊満な胸が存在を主張している。肩凝りになるサイズなんて羨まし過ぎる…。

「三崎は何カップ?」

「Fです。」

H……フ……、Fかよ……。

「先輩は?」

「Dカップ。」

「ふうん。あつ、そうだー先輩ちょっと耳貸して下さい……、

そう言つたかと思うと三崎君がマッキーに耳打ちを始めた。なんだ? 女になつた同士で内緒話か? マッキーが『いいよ。別にカブつてもいいし。』と言つて軽く頷いている。『カブつても』……?

「三崎ー・マッキーだけに言つて私達には内緒?」

黙つて聞いていた葵がツツ『ミミを入れた。

「別にたいした事じゃねえよ。なあ三崎？」

「だったら言こなせこよ～。『元なるじゅんね由宇』？」

「えつ？あつ、うそ…、うひ…だね…。」「

「なんだ～まだ由宇は三崎いへんかになつてゐるの？」

「俺は、まだなんどなく三崎君を見てボーッとしていたのだ。

「えつ、こや…、やんなんじゅなこよ。なんか可愛こなあつて…、可愛こ感じに変わつたなつて思つててわ…。」

「かつ、可愛いなんて…、」

一瞬三崎君が照れる仕草をして、それがまた可愛いかった。

「だから、それがくぎつかになつてる原因だろ～。」

「えつ～あつ、うつか？」

なんか男子が可愛い子や綺麗な女性を曰で追いつめ、心理が分か
る気がした。マツキーも十分綺麗なのが、昨日は俺も自分の変化
に困惑して、それどころではなかつたのだ。

「まつたく…。」

「あの…、田丸さん。」

「はー。あつ『メン』。わつ見なにから。」

「こや…、わづじやなくて田丸さんもカツコマイですよ。」

「えつへあつセーハあつがヒハ。」

「で、今度私ヒトーレヒトセコ。」

「〇 … ヒトーレヘ。」

「ヒートヒテ？俺にはれつときとした彼氏が…、でも今の俺は男なんだよな…。」

「ダメ…、ですか？」

「こや、別に…、」

「じやあ、決まりー今度買い物付合つてー。」

「はあ…。」

「三崎は元男なのに、男嫌じやないのか？」

「…。うへん、じづなのかな…？でもほり田丸さんと頼ればナンパとかもされなくてすみそつだしー。」

「ボディガードなら俺より葵の方がいいんじゃない？」

「確かに…。」

「葵さんは大きくなりすぎてちょっと恐いかな…。それには出来損ないのニコーエーフみたいだし…。」

「何だとーー！」

「だつて言葉遣いと体のギャップが…。それに私的には田丸さんくらいの体格の方が…。」

ん…？体格？なんか変な言い方だな…。でも葵のギャップに違和感を感じるのが、俺だけじゃない事が分かつてなんか安心した…。

「由宇『』指名だつて！よかつたな。ホストやりだしたらいこの調子で指名取りなよ。」

「田丸さんホストするの？」

「なんかそんな感じで話が進んでて…。」

「ホストか…。でも似合ひそう。田丸さんならすぐになンバーワンになれるよ。」

「それ、あんまり嬉しくないかも…。」

しばりへ崎君の家で雑談をするとマッキーの携帯電話が鳴った。相手は沖縄の警察で、内容は飛行機の座席があと一つだけ確保出来たとの事だった。

「葵と由宇どっちかしか行けないな。どっちが行く？」

「私が行くー！」

即葵が立候補した。

「由宇は？」

「俺は…、俺も行きたいです。」

「何？何の話？」

三崎君には簡単に内容を説明したが、あまり興味を示さなかつた。

「一応亲戚だし、行くのは由宇の方がいいんじゃないかな。」

「そんなん…、一度も会つた事無い人なんだから私でも変わらないでしょ？」

「公平にジャンケンで決めたら？」

三崎君がジャンケンを提案してきた。せっかくマッキーが後押ししてくれてるのに…。

「よし、ジャンケンで決めなよ。」

マッキーまで…。でも結局勝つて沖縄行きをものにしたのは俺だった。ところで途中づまく話を変えられた内緒話はなんだったのだるひ…？

羽田那霸間は、マッキーと席が離れてたのもあって暇だった。ただキャビンアテンダントのお姉様方が妙に優しくて気持ち悪かった。たマッキーに言わせれば『由宇がカツコイイからだよ。』だそうだ。

その中の若い子から名刺をもらつた。真下晴子といつ名前と携帯電話の番号・アドレスが書いてある名刺。明らかに会社から支給された名刺じゃなく、プライベート用に自分で作った名刺だ。

俺は人生初のナンパをされたのだ。しかも女性から…。逆ナンか…。嬉しいような悲しいような…。ナンパされたのはマッキーには黙つておいた。また『ご指名か?』なんて言われないとも限らない。

「なんかあのCA私の事睨んでなかつた?」

「気のせいだよ。ほら、荷物取りに行こう。」

搭乗口で挨拶してくる彼女の視線を確かに感じたが、そんなのは無視だ。荷物を受け取り出口に向かうと、迎えの警察官で比嘉さんという方がいて、今日の宿泊施設まで送ってくれる事になった。と言つても明日は小型飛行機で移動なので空港に近いホテルだ。

そこで私に『あなたが真木翼君ですか?』と聞いてきた。よく考えてみれば、マッキーは男のはずだった。昨日の電話に出た時は平氣だつたのか…?

「いえ、私が真木です。」

「マッキー!」

「」の発言に一瞬ビックリした。この場は俺の方が都合がいいので

は？だけどマッキーの判断は違うようだ。

「あつ、そうですか？あなたが真木翼君…、さんでしたか…？」

比嘉さんも聞いていた情報と違うのか首を捻っていた。
ホテルに着くとフロントで比嘉さんとホテルの人何やら揉めて
いる。そして渋い表情で私達に近付いてきた、

「真木さんすみません。ちょっとした手違いでダブルベッドが予約
されてたみたいで…。」「

ダブル…？」

「失礼ですが、お二人の関係は恋人とかじゃないですかね…？」

「由宇別にいいよね？」

「えつ？あー、うん…。」

だつたら昨日も一緒に良かったのでは？

「よかつた。じゃ、手続きしてきます。」「

その後手続きはスムーズに進んでるようだ。

「マッキー…、」

「襄わないでね…」

「襄わないつーの…」

「冗談で言つたのに気付くのが少し遅かつた。マッキーが苦笑いしてゐる。

「比嘉さんこの辺りで美味しい店ありますか?」

「あー、出来れば今日はホテルから出ないで頂けたいんです。このホテルのレストランも結構美味しいですよ。」

「そうですか…、分かりました。」

「よろしくお願ひします。天候が悪くならない限り、予定通り8時には迎えに来ますから。」

それからマッキーと一同部屋に入る前に食事する事にした。レストランは結構空いていた。夕食には遅過ぎていたからだろう。そんな時間だったが、あとから女性が3人入ってきた。よくよく見るとあのCIAが、その中にいる。口には航空会社の関連のホテルか…? 制服を着てると綺麗ないい女に見えたが、私服になると2割くらい見映えが落ちて感じるのはなんでだろ?…。制服フェチにでもなつたかな…?

食事中は生ビールを頼んで飲んだが、初めてビールを美味しいと感じた。それに昨日は2杯でいい感じに酔っ払つてたのに、別人のように飲めそうな感じだ。

マッキーはというと昨日と変わらないペースで飲み始めたが、私は逆に2杯目で気分が悪くなつたようだ。

「なんだか…、今日は色々動き回つて疲れたか…、調子悪いのかな…?由宇悪いけど先に部屋戻るよ…。」

「大丈夫かよ…？」

俺の方に飲む勢いが出てきたのに、途中で終わっちゃうなんて…。
まあ気分が悪くなつたなら仕方ないけど…。

「まだ食べてていいから、これで支払いしておいて…。」

そう言つて財布を置いて先に部屋に戻つてしまつた。仕方なく一人、テーブルの上に残つてる料理とビールを詰め込んでいると、

「連れがいたなら、言つてくれればよかつたのに…。」

振り向くとそこには名刺をくれたCAのお姉さんが立つていた。
お姉さんの連れは会計をしているところだ。

「綺麗な人だつたね？モデルかなんか？」

「違いますよ。」

「ふうん、そうなの。」

「はい。」

「ねえ、何処住んでるの？」

「なんですか？」

「東京戻つたら遊びようよ。都内？」

「まつ、まあ…。」

「電話番号教えてよ。」

「いや……、俺付き合ってるのは子こるんで……。」

「別に『付き合つて』わけないだい。『なんて言つてるわけじゃないわ
よ。』

参つたな……、俺には彼氏が……、あーそうだ……、ゴールデンウイー
クに会つ話じつじょり……。いや、それより今は一日も早く体を元に
戻す事を考えよう……。

「だよね。」

そう言つて結局、電話番号とアドレス、そして名前を教えてしま
った。

「由宇君いつ帰つてくる予定?」

「あー、え~と、4日後くらいかな……? 未定の旅行なんだ。」

「分かつた。私の休みの日確認してメールするね。」

「……。いつもこんな感じなの?」

「こんなって?」

「名刺配つてナンパしてるのって意味。」

「そんな事無いよ、好みのタイプの人だけ。中々いないけどね。」

「ふうん。」

「引くかもしないけど、私ってジャニ系が好きなんだ…。」

ゲッ…女の時の俺と一緒に…、納得。でも俺の場合は、ジャニ系を田の前にすると緊張して何も話せなくなる感じだった。でもこの人は違うようだ。

「引いた?」

「いや…、そんな事ないよ。」

「じゃあ、帰つたら会ってくれる?」

「い、いいけど、学生だから金なこよ。」

「テート代は私が全部出すから気にしないで…」

貢にじゅうタイプか…。余り期待させないよひじないとな…。
そこでレジの所にいる先輩達に『先行つくるよ。』と声をかけられ『すぐこきますから先に戻つて下さー。』と応対した。

「連絡するね。」

「ああ…。」

正直、電話番号とアドレスを教えた事を後悔していた。面倒臭くならなきやいいのだが…。そう思いながら俺も部屋へと戻った。

021 初体験（前書き）

多少エッチな表現があります。嫌いな方は読まないでください。

部屋に戻ると下着姿のマッキーが俯せでベッドを占拠していた。そして、どうやらブラも外そうとしてたのか片方の手が背中に回つたままなのだ。付けたり外したりする習慣がないから取り損なつて、そのまま寝てしまつたのだろう。

仕方ないな…、と思いつつ外してやろうとホックに手をかけた瞬間ドキッとした。指先が彼女の白くて滑らかな肌へと触れたからだ。綺麗な肌だな…。そう思いつつホックを外し、彼女の体を仰向けにしてブラを取つてあげた。そして、仰向くなつてもツンと上を向いて張りのある胸が、俺の目に飛び込んできた。

ヤバイ…！元女だというに興味が湧いてきた…。興味と言つより、触りたい衝動に駆られている…。自分で見慣れてたはずなのに…。

昨日雑誌で見たヌードが、目の前に生身の姿で実在するのだ…。ゴク…。無意識に生睡を飲み込んでいた。

ちょっととぐらいなら…。そう思ったのが間違いだった。胸を触りだしたら止まらなくなつていた。無我夢中で、どうやつて服を脱いで、どう彼女のショーツを脱がしたのかなんて覚えてなかつた。何がが弾けた瞬間だつたのかもしれない。何か…、何かとは…、理性？モラルみたいなもの…？とにかく最後までやつてしまつたのだ…、マッキーと…。マッキーも時折悩ましげな声を漏らしていた。そしてマッキーの知りたかつたモノを彼女のお腹の上に解き放つたのだ。

その彼女のお腹の上に撒き散らしたモノを、綺麗にティッシュで拭き取りながら自己嫌悪気味になつてしまつた。酔つ払つてたとはいえ…、などと自分に言い訳なんかしたりして…。

彼の見様見真似でやつたとはいえ、気持ち良かつた。男つてこんな感じなんだな…。

夢の中で女性が騒いでる……、夢……。その夢の中の女性はマッキー
だった……、違う……、夢じゃない……。ついで田が醒めた。

「ひょっと起きてよー。」

俺はやめられないと本をマッキーに握り持っていた。中々田が開
かない。

「田中君起きなさい。」

「ん……、何時もいつも起きる時間?」

「まだ4時前だね?」。そんな事じやなくて……。」

「なこ……、なんだよ……。」

田の前には裸のマッキーが、ベタ座りで座っていた。内股でお尻
までベツニドリつけている。女の子の柔軟な体じやないと座れない格好
だった。

「何?」

「説明してよ。」

「ん……、だから何を?」

「はだか……、私達裸なんだけど……、もしかしてした?」

ギクッ……。そんな音が聞こえてきた。うな感じだった。

「もしかして私襲われたとか？」

セリフ帳に一つ一つ手をアソコでもつていつて確認している。

「かな…。俺もしかして襲はちゃったかも…。」

「はあ？ 意味分かんない！」

「『ゴメン…。あっ、そうだ。アレは出たよ。タップリ出たから。』

「えつ？ 何？ アレって、もしかして…、」

「やつ…、ちやんと外に出せたし…、『ハリ箱の中にトイイッシュの残骸あるから見てみなよ。』

「本当かよ…？ ん…？ ちょっと待てよ。『外に出せたし』って言つた…？」

「えつ…？ うん。」

「それって確信犯じゃない？」

本日2度目のギクッといつた音が聞こえてきそうな感じだった。

「くつ、苦しそうだつたからブラン外してあげたらつ…。『ゴメンなれい。』

「つたぐ…。」

と言いつつゴミ箱に鼻を突っ込んでティッシュ臭いを嗅いでいる。

意外にもそんなに怒つてない感じだつた。

「自分だけ気持ちよくなりやがつて…、」

「だから、『ゴメンつて…。』

「じゃ…、」

そう言つてマッキーは、お仕置きとばかりに俺に跨がりくすぐりだした。応戦するかのように手をつかんでそれを防ごうと必死に絡みあつた…。でも体力では今の俺の方が上で、いつしか形勢は逆転し、俺がマッキーに覆いかぶさる体制になつていた。笑いが無くなり見つめ合つ格好だ…。

「しょつか…？」

「えつ？」

すると俺の手を解き頭の後ろに手を回してきて、俺の顔を引き寄せキスをしたのだ。男になつてファーストキス…、始めから濃厚なディープなキスだつた…。

マッキーには色々と指示されながらのエッチだつた…。女だつた頃された事のない行為まで仕込まれた、女性が喜ぶセックスクスを…。人生で2人目だ…。さらに、一瞬躊躇したものの、口でも奉仕してくれた…、「元男なのに…嫌じやないのか…？」

付き合つてる彼氏はアダルトビデオは好きなくせに、実際のエッチは単調で淡泊なものだつた。同じ相手と2年もすればそんなものかもしれない。それに最近はエッチの回数も減つてきてたし…。とにかくマッキーは快樂に達して満足していたようだつた。

「どうだつた？」

「女っです」いやバイね……すくへ気持ち良かつたよ……。でもこれでホストになつても困らないはずだよ……。一度寝た客は結構引つ張れるし……、2回寝たら離れられなくなるよ……。」

あつーもしかしてこれもレクチャーのつまつか……？自分から誘つたのに、そんな言い訳まで用意してゐるなんて……。

「せひ、シャワーでも浴びて朝食食べにこいつか？」「

「だね……。」

せつぱりマックキーのベースになつてしまつ。男だつたなら引つ張つてくれる頼りがいのある人だが、これが女だと印象が変わるのはなんでだらう……？

022 返信（前書き）

ついでに、前回、由宇は男としてエッチを経験してしまいました。しかもその相手は「マッキー」。でもそれは愛の無い快楽のエッチ。今後一人の中にちゃんと恋は育っていくのでしょうか…？

昨日と同じレストランで朝食を取っていると、30分も早く比嘉さんが顔を出した。

「あっ、おはようございます。お一人共お早いですね？」

「比嘉さんこんばん。」

「いや～早く着いてしまったので私もコーヒーでも飲んで待つてよ」と思つてしまつて。

「そうでしたか…。」

「もう食べ終わつましたか？」

「そうですね。すぐ行きますか？」

「行けるなり…、」

「じゃ、由宇、部屋から荷物取つてきて、チェックアウトしておくれから。」「

「分かった。」

部屋に上がり荷物を持とうとした時メールの受信音が鳴つた。誰だろ？彼からか？と思いつつ確認すると昨日のCAの晴子さんで『一足お先に東京に帰ります。』と書いてあり、ハートマークが三つも付いて、更に制服姿の満面な笑顔の写メ付きだった。

比嘉さんは那覇空港までで、石垣では別の担当の刑事さんが待つていた。

「どうも照間と申します。早速なんですが、氷室さんから連絡はありませんでしたか？」

「はい。電話でも言つたのですが、先生の出張中、やりかけの研究がある時は、定期的に指示等の連絡が入るのですが、今回はパッタリですね…。」

「そうですか…。」

「あの…、それでそのおばあちゃんってのは…?」

「あつ、それが今回は被害も無かつたので、厳重注意という事で釈放する事になったのです。なんですが、名前も住所も言わないので、調書を書けない状況でして…。」

「はあ…。」

「身分を証明するモノでも持つていればいいのですがね。で、喋つたと思ったら『真木翼を呼んでくれ!』の一言だけなんで、ウチらも困つてまして。」

なんとも頑固な人だ。でも教授的には、外部に研究内容を絶対に漏らしたくないのだらう。俺達もそのつもりでいかなくてはならぬい。

「誰だか心当たりありますかね?」

「さあ？沖縄に知り合いまいないので…。」

「そうですか…。もし知り合いでしたら身元引き受けをお願いしたいのですが、大丈夫ですかね？」

「はい、もちろん。」

そんな会話をしていると、いつしか車は警察署へと滑り込んだ。そして俺達は会議室のよつなどこで待たされた。少し待っているヒドアが開き、さつきの照間さんが入ってきた。

「真木さん」ひりへ。

一人で立ち上ると、

「あ、お連れの方はここでお待ち下さい。」

「あ、ここまできて叔父さんと対面出来ないなんて…。」

「じゃ行ってくる。」

「うん。」

マッキーも『この人も一緒に会わせて下さる』へらい言つてく
れてもいいのに…。

どのくらい待たされたのだろう…。やる事がないので携帯をいじり始めた。そうだ晴子さんにメールを返そう。始めから返信をしないのでは、可哀相と思い返信の文を考えた。

でもあの内容の薄いメールに対して返す内容はどうしたらいいの

だろつ……つて言つたかその前に、何一つ彼女の事を知らない……。まあ何歳かも気になるしプロフィールでも聞いておくか……。そう思い適当に打つてメールしてみたが、即返信はなかつた。おそらく仕事中なのだろう……。

それと返信してないメールがもう一つ……、彼氏だ。

こつちは中一日空いてしまつた……。なんて返したらいいものか……？で結局、『研修頑張つてる？電話出れなくてゴメンね。生活費の為に夜のバイト始めたから、夜に電話出れないかも。なんか急用だつた？』と精一杯の嘘のメールを送つたのだった。もちろんこつちも返信はなかつた。こつちも研修中だろう……。

小一時間後マッキーが照間さんと帰つてきた。私に田で合図を送つてゐる。でも何を伝えてくるのか分からぬ。果たして上手くいつたのか？

「すいません。えへと、田丸さんでしたっけ？」

「はい。」

「氷室さんの遠縁でいらっしゃるとか……。」

なんだこの読めない展開は？マッキーの方をチラツと見たが反応なしだつた。

「氷室さんの荷物の受け取りお願い出来ますか？」

「はあ……？」

おばあちゃんは教授じゃなかつたのか？

「じゃ担当の者が書類持つてきますので、記入して下せ。」

「はあ…。」

「じゃ、失礼します。終わいたら空港まで送りますので。」

そう言つて部屋から出でていった。どうなつたの？そんな感じでマッキーの方を振り向いた。相変わらず説明の下手なマッキーの話しさ聞いているところだ。

取り調べ室に入つて相手の顔を見て一瞬で“この女性は教授だ！”と思つたそうだ。教授の面影のある顔立ちだつたらしい。そしてマッキーの考えておいた嘘の設定で話し始めたそうだ。

『お母さん！』

やうやく、照間さんもその女性も口を點にしてマッキーの方を向いたそうだ。

『お母さんは何も言わないで…。刑事さん私が話します。実は私…、二コ一ハーフなんです。』

照間さんは目を疑つていた。この綺麗な人が二コ一ハーフ？と言わんばかりの目だつたそうだ。教授も始めはキョトンとしていたらしい。目の前で喋つている人がマッキーだと気付くまで時間がかかりたみたいだ。まさかマッキーまで、薬の影響を受けて性転換してるとは思つてもみなかつたからだらう。

『母と先生が会うようになったのは、私が手術を受けるちょっと前からです。始めは手術を思い留まるよう諭して頂けないかと相談していたのでしょうか。でもいつしか一人は男女の仲に…、そう、刑事さん一人は不倫していたのです。』

『そつ、そうですか…。』

『息子が「ユーハーフ。自分らは不倫…。だから名前を言えなかつたんだと思います。もし不倫が父にバレたら…。』

『じゃ、教授はどうしたんですか？お母さん？』

そこで打ち合わせしてたらしく葵からの電話だ。『10分後に電話くれ。』と送信ボタンを押すだけにしておいたボタンを、取り調べ室に入つて教授だと確信した時に押したそうだ。

そしてその場で電話に出て、教授の振りをした葵と電話で話したそうだ。教授は既に東京に戻っている設定らしい。照間刑事とも電話で話して、葵の偽教授もこつぴどく怒られてたそうだ。

「で、一件落着つてとかな。」

「成る程…。」

そんな嘘で、よく騙せたな…。

「それで夕方の便で3人で那覇に戻つて、羽田行きはチケット取れ次第帰る感じだな。」

「ふうん。席あるかな？」

「そこが問題だな。」

「だね。」

羽田 那覇間のチケットはまだ確保出来てないそうだ。そして遠縁の叔父さんこと氷室教授と初対面となるのだ。今の見た目は叔母さんとなっているみたいだけど…。

023 対面（前書き）

由宇の叔父ちゃんと氷室教授との初対面です。つていうか、やっと登場です。

歳は50半ばと聞いていたが少し若く見える。ところが30代と言われても納得しそうだ。

女性になつたからかそう見えるだけか…？それとも元々実年齢より若く見える人だったのか…？でもどつかで見たことがあるような顔立ちだ…。でもそれは思い出せなかつた。

「真木君悪かつたね、沖縄まで来てもらつて。」

「いえいえ、大丈夫です。」

「どうぞこちらの方は？」

おつと、じつやうの俺の事らしい。血口紹介でもするか。

「由宇です。田丸由宇です。」

「おー、由宇か。大きくなつたな…。それにしても由宇はずいぶんとボーイッシュな感じなんだな…。声も低いし、始め見た時は男子かと思つたよ。」

「はい。実は俺もマッキーと一緒にで…、」

「えつ俺？一緒にで？えー？なんで由宇まで…？そもそも真木君だつて…。」

「それは…。」

マッキーが那覇に向かう飛行機の中で、今までの経緯を細かく説明した。叔父さんも…、今は叔母さんと言つた方がしつくりくるか…。その叔母さんが、かみ砕きながらマッキーの下手な説明を聞いている。

「やうか…、真木君が巻き込んで悪かつたな。」

『マキクンがマキコンで…』って…、正真正銘の親父、ギャグだ…。以前にも似たような事があつたよ…。まあいいや、この親父ギャグは愛想笑いでもして受け流して…。

「ハハハ…。そつ、それで元に戻れるんですね…？」

「うーん。」

唸りながら俺とマッキーを見てる。もしかしたらダメなのか？

「君達に折り入つて頼みがあるんだ…。」

俺とマッキーが目を合わせる。なんだ…？

「おやらく戻れるとと思つが、その前にデータを取らせてもらえないだろうか？」

「おやけ…？」

「おやけってなんだよ？ 戻れないのか？ それにデータつて！ モルモットじゃないんだから！」

「シーツー由宇は何興奮して大声出してんだよ？ 他のお客に迷惑だ

る。とりあえず座れって！」

「だつてさ……。」「

「私はいいですよ。協力します。」「

「マッキーー？」

なんだかマッキーに裏切られた気がした。そりや、マッキーは叔父さんの研究の手伝いを、今までずっとしてきただらうけれど、じつちは……

「おっ、俺は……、俺には付き合っている人がいるから、一曰も早く戻してほしいです。」「

「恋人か……。」

「はい。それに大学に転入して友達作れたとして、途中で性別が変わることなんですが分かつたら、どんな目で見られるか……やっぱり一日でも早く元に戻してもらいたいです。」

「そうか……、そうだな……。だつたら、せめて春休み中はそのままつてのはどうだ？私もそのつもりだし。」「

「由宇もやうしなよー。」

「自らチューな……。自分本位過ぎる……。しかも『やうしなよー』って、ノリが軽すぎる……。こんな声じゃ誰とも電話すら出来ない……、それに春休み終わるまで、2週間以上あるじゃん！精神的にもつかな……。」

「それだつたら、帰つたら血液検査だけでもやつて欲しいんだ。」

「血液検査…？採血だけだつたら一回で済みますよね？」

「まつ、まあ…。結果が出るのはもう少しかかるが…。」

「俺に結果なんて関係ありません。」

「うう…。」

「先生わつきも話した通り、葵は『男のままでいいかな。』なんて言つてしまつたし、他のデータは葵にお願いしようよ。」

「そりだな…。」

研究する人の悪い癖だ。よつとくのデータが欲しいのだろう。

「よし！決まり！そうだ先生。」

「ん？」

「私にも配合データ見せて下せ。パソコンのパスワード変わつてて、見れなかつたんですね。」

「おう、おう、そりだか。そうだな、帰つてからな。」

「お願いします。」

「そのかわりトップシークレットだから！他で悪用されなによつ

にしなければならないからな。」

「はい。」

本当だ。こんな薬が世間に回つたら大変極まりない。絶対外部秘だ！

羽田行きは夕方の便が3人分取れて、文字通りトンボ帰りとなつた。初沖縄を満喫する暇は一切なかつた。食事だつて、ホテルと空港でしか味わえなかつたし……。こんなんだつたら留守番しとけばよかつた……。

なんだかこの2日間は座つてばかりだつたな……。あとはマッキーと絡みあつたくらいか……。いや……、あれを『くらいたい』と表現出来るモノではない。

そんな事を思い出してたら自然と、頬が緩んでしまつた。男として女の子とエッチをした……、男としての初めての快楽……。それにしても、あの時の自分の行動が未だに信じられない……。

女の時は、特にエッチが好きでもなかつたが、彼が望むなら……、彼が私で気持ち良くなつてくれればと、体調が悪くない限り、彼がしたい時はそれに応えていた。でも本当は他で浮気されたくないから……、彼が『したい』と言えば、『私も……』なんて強がつたりして……、そんなつもりはないけど体で彼の気持ちを繋いでいたのかもしない。

それにしても、アソコから分身が出る瞬間、もの凄く気持ちが良かつた……、彼が……、男がエッチ好きなのがなんとなく理解出来た気がする。

「バスタブにお湯張れたから先どりうぞ。」

「あー、ありがと。俺が先でいいの?」

「私が先入つていなら先入るけど?」

「いいよ。先どりうぞ。」

「あー、そう。じゃ、遠慮なく。」

あれつ? 入っちゃうんだ? ま、いつか。冷蔵庫を覗くと、水かビ

一
ル
し
か
な
い。
迷
わ
ず
ビ
ー
ル
を
取
り
出
し
喉
を
潤
す。
ツ
マ
ミ
に
な
り
そ
う
も
の
は、
美
穂
さ
ん
が
来
た
時
に
食
べ
た
ベ
ー
コ
ン
の
残
り
く
ら
い
しか
見
当
た
ら
な
か
つ
た。

ソ
フ
ア
ー
に
腰
掛
け
テ
レ
ビ
の
電
源
を
オ
ン
に
す
る。
ふ
と、
テ
レ
ビ
台
の
中
の
D
V
D
の
ソ
フ
ト
が
気
に
な
り
だ
し
て
見
て
み
る
事
に
し
た。
ポ
ピ
ュ
ラ
ー
な
洋
画
が
目
に
入
る。
この
間
観
た
ア
ダ
ル
ト
ビ
デ
オ
は
見
当
た
ら
な
い
。チ
ッ
と
思
わ
ず
舌
打
ち
し
ま
っ
た。
何
處
に
隠
し
て
る
か
ま
で
は
分
か
ら
な
い。
ど
も
探
し
て
ま
で
観
よ
う
と
は
思
わ
な
か
つ
た。

や
る
事
も
な
か
つ
た
の
で、
返
信
が
あ
つ
た
か
な
あ
〜
と
思
い
携
帯
電
話
を
見
て
み
る
と、
飛
行
機
に
乗
る
時
に
電
源
を
落
と
し
た
ま
ま
の
状
態
だ
つ
た。
電
源
を
入
れ
る
と、
予
想
通
り
の
人
達
か
ら
の
メ
ー
ル
が
1
通
ず
つ
届
い
て
い
る。

先
に
晴
子
さ
ん
か
ら
の
メ
ー
ル
を
見
る
と、『簡単なプロフィールですか
？それは私に少しは興味出てきたって事かな？（笑）え〜と、真
下晴子24歳スリーサイズは秘密です。胸は見た通り控え目（涙）
な感じで、身長は164・9センチで体重はダイエット中で頑張っ
てます。由宇のプロフィールも知りたいな。早く会いたいから早く
帰ってきてね！』と絵文字も途中途中にちりばめられている。最後
はお決まりのハートマークだった。

趣味などは一切書いてなく、ツッコミ甲斐のあるメールだった。
でも朝の内容の薄いメールに比べれば上出来だ。返信はあとにして
彼のメールを読む事にした。

『おいおい、夜のバイトってキヤバ嬢とかじゃないよな？もしそ
うだったら怒るぞ！ゴールデンウイークの予定立てたいから、バイ
ト休みの夜にでも一度電話くれ！たまには由宇の声も聞きたいし！
なんちゃって。（笑）』前半はこっちの事を心配して、更にヤキモ
チを妬いてくれているようで、何となく嬉しかった。だが、問題は
後半の方だ…、声は現状どうにもならない…。

はあ……。深いため息をついてしまう。こうなつたら明日すぐ
にでも採血してもらって、すぐにでも薬を貰えるよう教授に直談判

しう。マッキーは教授に協力的な姿勢だから、俺自ら頼まないとダメだろう。

今となつては、春休みが終わるまで待つてられないのだ！

「お風呂空いたよー。」

「まつたぐ、随分長風呂だったな…、先に入ればよかつたよ…。」

「何言つてるのよ。入つてくるかと黙つて中で待つてたのに…。」

「へつ? マジ?」

「嘘に決まつてるじやん。」

ウツ…、またマッキーにやられた…。どうも俺は人を信じる傾向があるらじい。マッキーのこの手の[冗談の見極めを早めにマスターせねば…。

「風呂入つてくる。」

「いみつべつ~。」

あ~情けない…。『入つてくるかと思つて中で待つてたのに…。』なんて言われて、ドキッとしてしまった。心はまだ女だと思つていた…、だけど気持ちとは裏腹に下半身とか本能といった部分は、下心でいっぱいらしい。

脱衣所でどんどん脱いでいく…、胸が無くなつてアソコには付いてなかつたモノが存在している。洗面台の鏡には、女だった頃の理想の男性が写つてて、程よく筋肉が付いてて、ジャニーズ系の顔立ちなのだ。ナンパしたら結構な確率で成功するに違いない。

一通り頭・体と洗つて湯舟に浸かつた…。女だった頃は“髪を洗

う”と表現するのが普通だつたが、今は“頭を洗う”と言つた方が
しつくりくる。その方が違和感が無いのだ。

あ～なんでだろ…、昨日寝る前に一回、起きてから一回ヒツチし
たのに、またしたいのはなんでだろ？風呂から上がつたらマッキー
誘つてみようかな…？

ん…、待てよ…、もしかして、明日教授が薬くれたら、今日が男
最後の日だよな…。なんかそう考へると、すぐ戻るの勿体ないかな
…。

いや…、違う違う！そつじやない！彼に電話するため一日でも早
く戻してもらわないと！今日マッキーとしない方がいいな…。セツ
クス中毒になつて戻りたくなくなつたら大変だもんな…。『あー、
もう…』ついつい独り言を言つて、頭を搔きむしりながら湯舟から
立ち上がつてしまつた。なんかよく分かんない…。

「由宇？」

「うわっ！？」

いつの間にかマッキーが風呂のドアを開けて覗いていたのだ。

「さつきから、何独り言つてるの…？」

「何つて…？」

「あれっ？またアソコ大きくして、」

ん？ そう言われて視線を下に移すと、言われた通りの状態になつ
ていた。

「うわっ！」

俺は慌てて湯舟へと身体を沈めた。エッチな事考えてたからか…？もしかして男に染まつてきてる？

「仕方ないなあ…。」

マッキーはそう言ひてドアを閉めると、部屋着を脱ぎ、頭に巻いたバスタオルを取つて風呂に入つてきた。

「えーっ！？何？何？」

「ほりつー・詰めて詰めてー。」

「えつ？」

俺は言われるまま片方の端に詰めた。するとその空いたスペースにマッキーが入つてくる。

「なんでまた入るの？」

「いや…、せつかくだから一人で処理する方法教えてあげようと思つて。この間中途半端に終わっちゃつたし。だからその前に体温めてさ…、」

「そんないいよ。お、俺は明日薬もらひつつて頼むからー…そしたら明後日の朝には女の子に戻つてるわけだし。」

「そりや無理だよ。」

「なんで？」

「なんでって……、今回の沖縄での材料調達が不備に終わったから……かな？手ぶらだったわ？」

「あつー！」

「なつ？」

『なつ？』じゃないよ～。じゃ、なんで取つてこなかつたんだよ～？

「だつ、だつたら、次の調達予定は？」

「しばらくゆつくり休むと思つよ？あの年で留置所にいたからな……、でも少し若く見えたな……。」

「若く……？あれ？若返りの効果もあつたりして？でもそんな事あつたら、その発見も凄いかも。古代からの人間の願望、不老不死。

「それだったら、ウチらで行こー！」

「ウチらって……、由宇はダイバー免許持つてるの？」

「えつ……？ダイバー……無い……。マッキーは？」

「私はまだ初心者だから水深の浅いところしか無理。しかもその免許も性別欄男になつてゐるし。」

免許は警察の時みたいに性同一性障害で「まかせるだろー。

「それに今、鑑賞用で乱獲されてて、許可なく輸送出来ないみたいだよ。ちなみに先生は、無許可で持ち出そうとしてたみたいだけどね。」

「えーつー? だつたらその鑑賞用買つてくれる。」

「今人気だからきっと高いぞー。それに都内はすでに品薄だりつ。入荷待ちってやつだな。」

「ゲツー!」

「だからわざわざ沖縄まで行つたんだろうナビね。」

「そんなん…。」

「一応他のも試したんだけど、マウスで成功しのアレだけなんだよ…。」

「えつ? 私達以前に実験で成功してたんですか?」

「そりや、一回の実験だけでは偶然って事も有り得るからね。あの日が3回目だつたのさ。2回目が成功したあと、材料が欲しくなった先生はすぐ沖縄に行く事にしたんだ。」

材料探しに行くつて事は、割つた瓶の薬の残りは少なかつたつて事か…。

「次はチンパンジーでの実験だなつて張り切つてたし…。で、今は

由宇も知つての通り自分も女性つてわけ。今思えば貴重な薬だつたんだよな…。」

「だつたらなんで、そんな大事のモノ三崎なんかに扱わせたんだよ？」

「だな…。俺も後悔してる。」

後悔しても、戻つてこないつーの…まつたく…。

「だけど先生、春休み中になんとかするみたいの事言つてたけど、当てでもあるのかな…？」

えーつー？それは確約じゃないんですか？それすらも未定？

「俺上がるわ。」

「ちよつと待つてよ。」

そう言つて向かい合わせに座つてたマッキーが、俺の足の間に入つてきて後ろを向いて寄り掛かつてきた。なつ、なんなんだ？誘つてる…？からかわれてるのか？

「ねえ？」

「なつ、何？」

「男になつてぢうつへ。」

「ぢうつて？」

「だから…、女の時と違つと思ひ事ない？」

「ん…、体付きたか？」

「そんな他人でも見れば判る事じゃなくて、感情っていうか…、感覚っていうか…、」

「感覚ねえ…。例えば？」

「例えば…。「ん…。五感とかは？」

「五感？あ～、ビールは美味く感じた。」

「ビール？」

「焼肉奢つてもさうした時はいつももなかつたけど、沖縄で飲んだ時は、まだ飲めそうだったし。」

「ふ～ん。他には？」

「え～、他～？そうだな…、なんかエッチになつたみたい。」

「えつ～？」

「昔は自分が「りじみ」だと思わなかつたのに、昨日はマッキーの事巻つりやつたし…」

「…。」

「それに自分で見慣れてる筈なのに、今だつて「マッキー」の方に振り向いた。

「マッキードキドキしてゐるんだ？」

「まあ…。」

「今日も「オッヂ」するや。」

せつからぬが合つた状態だ…、これはマッキー特有の「冗談か…

？見極められない……が、我慢出来ない……。

「本気こなすのよ。」

そう言つて両胸を後ろから鷲掴みにして乱暴に揉んでやつた。柔らかくて気持ちいい……、

「由宇……、」

ナード唇を重ねてやつた。向こうも柔らかな唇で迎えてくれた。

「上がりベッド行くぞー」

「……うん。」

珍しく俺がリードしてる？ っていうか俺のペース？ っていうかマツキーも随分素直じゃね？ そして疲れてる筈なのに、俺達はベッドで激しく絡みあつていった……。

昨日は何時に寝たか覚えてない。気付いた時……、それは今なのだ
が、携帯電話の着信で起こされたのだ。寝ぼけたまま電話に出て、

「もしもし……。」

「あれ?？」

「あー?」

「あー、すみません間違えました。」

やう言われ、速攻電話を切つてやつた。たく、間違えんなよ…。
そう想いつつ、また寝よつとしたら、また電話が鳴るのだ。

「なんなんだよ~。」

そんな独り言を二つ電話に飛ばす、

「…はー。」

「あの~度々すみませんが…、

また間違い電話の奴か?と細つたといで、ある事に気付いた。

「あんた誰ですか?」

この声の主が彼氏の小松和也だと気付くのが遅すぎた。あーやバ
イービーしたらしい?どう取り繕えば…?

「もしもし?聞いてます?」

和也がキレ氣味に聞いてきてる…。

「はあ…、貴方は?」

和也つて分かってるナビ、苦し紛れに口から出てしまつた。

「あー俺は、今アナタが持つてる携帯の持ち主の彼氏です。アナタ
は由宇といひゆう関係ですか?」

キレ気味だが、キレてるのを押さえている…。和也にしては珍しい対応の仕方だ…。

そんな時に横で寝てる裸のマッキーが目に入る。

「すいません。ちょっとお待ちトモ。」

電話を押さえながらマッキーを起しにかかる。

「マッキー起あヒー…」

「ん…、何? 朝からひるせいな…、びひした?」

「和也から…、彼氏から電話なんだよ。私の友達の振りして「ママかして! お願い。」

「ん? 何? ポーッとしてるからもう一回叫ひて。」

「だから…、」

2回目の説明でなんとか理解してくれて、代わってくれた。

「もしもしお電話代わりました。わたくし真木と申します。はい。あーそりなんですか? いえ、昨日大学で拾つたんですよ。」

拾つた? 咄嗟の嘘にしてはまつまい。俺もそう言えばよかつたのか

…。

「はい。ええ。それで春休みで事務員がいないので、落とし物預けられないの…、もしよかつたら持ち主の方の名前と特徴教えて下

「そうですか。いえ、では失礼しまーす。」
　　「さーい。いえいえ。あー成る程。分かりました。氷室教授の……あー

そう言つてあつさり切つてしまつた。

「はい、携帯。」

「サンキュー。」

俺の手に携帯電話が戻ってきた。

「なあ、由宇。」

一
うん

「こんな事言つのはなんだけど別れちやえば?」

「え？」

「いつ戻れるか分からぬし、春休み中だつて元に戻れるか怪しいよ。」

100

「いつまでも『ゴマかしきれないぞ』。」

そう言つて俺に軽くキスをして部屋を出て行つた。しばらくしてシャワーの音が遠くの方から聞こえてくる。

「だよな…。」

つて、今キスされた？いや、確實にマッキーの唇の感触が残つて
る。マッキー…何考てるんだ…？

それに、彼氏にゴマかしきれないだろ？から別れたらって軽く言
うけど、そう簡単に諦めきれない。和也は初めて付き合った人…、
唯一告白してくれた人なのだ…。

とはいえ、この状態はいつまで続くのだろう…。

027 欲求不満な女

俺がシャワーから出た後、マジキーハスで外出出来る準備を整え終えていた。

「えつ? 何? どうか行くの? 学校?」

「こや、ひみつと三崎とな……」

「三崎? 三崎君と向處行くの?」

「買物だよ。この間買物途中で引っこ抜かせられたからな、そのお詫びだよ。」

あれ? 三崎君とは俺も買物の約束をさせられてい。マジキーはいつの間に? …?

「やつ…。あつーの間の内緒話って買物の事だったの?」

「あ~あれ…、あれは…ちよつと嘘うそ。」

「違うんだ…。何を話したか教えてよ。」

「いや、別に教えない事もないけど…」

「じゃ、教えてよ。」

「うへん…、あれはな…、

「うふ。」

「『由宇を彼氏していい?』って聞かれたんだよ。」

「へッ?俺?彼氏?」

「だから…、三崎は由宇みたいのが好みみたいよ。」

「あ…、や…。」

嬉しこよつた、悲しこよつな…。

「あれ…、でもそのあと確かにマッキー『かぶつてもいい』みたいな事言つてたよね…?」

「あー、だから由宇は私と三崎と一股でいいから。」

「くつ…へちよつと待つてよ!俺はすぐにも元に戻りたい…、」

「だから戻るまでだよ。それに昨日も言つたけど、そんなくすぐ戻れる保証ないから。」

「う…、」

「それに私は体だけでいいから、三崎とせめて一してやつなよー。」

なんかサラつと凄い発言なんですね…。

「あと合鍵テーブルの上に置いたあるから出掛ける時は鍵閉めてつてな。」

「ちょっと待つて、何時頃帰つてくるの？」

「三崎次第だな。そんじゃ行つてきまーす。」

「おーー！」

そんな俺の呼びかけにも答えず、無情にも玄関のドアはバタンと音をたてて閉まった。俺は腰にバスタオルを巻いたままボーッと立ち尽くしてしまった。俺も連れていってくれよ……。

テーブルを見ると鍵とサンドイッチが用意されていた。卵とマヨネーズのシンプルなサンドイッチ。

ちょっと待て……、三崎君があの時点での『彼氏にしてもいい?』って聞いて、マツキーが『かぶつてもいいし』って言ったって事は……、あの時点でマツキーにも狙われてた?あれ?どうゆう事……いや……、この手の事を考えるのは止めよう。なんにせよ、元に戻れば問題ないのだ!それまで三崎君の事はうまくかわしていくばいい。テーブルでサンドイッチを食べていると、チャイムが鳴った。ハテ?誰だろ?マツキーの友達か?そんな事考えながら玄関に向かうと、急にドアが開いた。

「うわっ!あー、えっと、美穂さん。」

「何シャワー?」

俺といえば、今だバスタオル一枚の格好なのだ。

「あつ、すみません。」

「上がるわよ。」

「はい…。」

美穂さんがリビングに入ったといひで振り向いた。

「あの子は？翼の従姉妹。」

「さつき買い物行くつて出掛けましたけど。」

「わー…、わー わー…。」

「はい。」

「ねえ…？」

「はー…？」

「お姉さんとイイ事しようつか？」

「へつ？イイ事？まさかエッチな事…？朝から？

「みつ、美穂さんお仕事は行かなくて…、」

「今日は午後だから平氣！ねえ…。」

そしてソファーに押し倒され、バスタオルを剥ぎ取られてしまいました。

ノー――――――!

結局…、美穂さんとエッチしてしまった。始めは抵抗したが…、抵抗といつても口だけだけど…。それに最後はガンガン自分から腰振つてたし…。なんかどうしちゃつたんだろ…、っていうかどうなつちゃうのかな…？

「ねえ…？」

「なんでしょ？」

「彼女に悪い事しちやつたわね…。」

「…。」

「留守中とはいえ…、」

「大丈夫です…。」

「そう…、もしかして本当にあの子と付き合つて無いの？」

「付き合つてる人は地元にいるんで…。」

「そりなんだ…、聞くんじゃなかつた…。」

「あ…、もつまません…。」

「ねえ…、「

「ん？」

「なんで東京出てきたの？」

「なんでって…、」

「翼の真似してホストになりたかったとか？」

まあ、こには別にこまかす必要ないか。

「大学です。系列の短大から4年制に編入出来る事になつたんで、
出てきました。」

「そり…。」

「美穂さんは何してる人ですか？」

「私？」

「はい。」

「私は…、医者よ。」

「医者？」

「医者つていつても美容整形外科なんだけどね。今日も午後からオ
ペ入ってるんだ。」

「医者か…、凄いですね！」

「別に凄くないわよ。」

「凄いですよ。医者になるくらいだから頭いいだろ、つじ。」

「まあ……それなりに……。」

認めちやうんだー謙遜しないんだ……。

「今度から『先生』って呼びますね。」

「止めてよ。プライベートまで、そんな呼ばれ方されたくない！『美穂』って呼んで欲しいな……。」

「名前ですか……、『美穂さん』って呼べばいいですか？」

「う……ん……。」

なんか不服そうだ。そつだ！確かにマッキーが『美穂はizo（体质）だから……』みたいな事言つてたな……。

「美穂ー！」

「えつ……？はい。」

呼び捨てにしただけなのに、なんだか嬉しそうな顔をしている。急に呼ばれて驚いたのとは違うと思う。

「呼んだだけ。」

「何よ……、そうだ、私は何て呼んだらいい？」

「面倒臭い人だな……、

「適当に呼んでいいよ。」

「分かった……。」

一瞬悲しそうな顔をした気がした。愛ちゃんの時みたい感じに“名前で呼んでいいよ”って言つてやればよかつたかな……。

「ねえ？」

「ん？」

「美穂」とって真木翼つてどんな人？」

「翼？あっ、そうだ！今回の事は翼には絶対内緒にしてね。」

「えつ？あー、そう…。だったら口止め料にお小遣でも貰つておこうかな～？」

「しようがないな…、分かった。あとでね。」

「ラッキー！」

「で、なんだつけ？」

「だから真木翼の話。」

「あ～、翼ね。翼はとにかく優しいのよ。好みのタイプつてのもあ

つたけど、なんかハマつちやつてや。」

「『ハマつちやつ』か。」

「でもなんでそんな事聞くの？幼なじみなんでしょう？」

「それはあれだよ…、えへと、女性とは接し方違うだろ？」

「まあ…。」

「ママかせたか？それよりマッキーの事もっと聞きたいのに聞けな
そつだな…。」
話題を変えて…、

「それより美穂ってこいつ？」

「何それ？オバサンだつて言いたいの？」

「ちひ、違つよ。美穂に興味持つたらダメなら聞かないナビ。」

「えつ？ん…、ダメじゃないナビ。」

「じや、こいつ。俺はハタチー。」

「セーフ、36。」

「本當に…。」

「…、」

「干支？干支は……」

「ブー時間切れ！」

「あつ……えへと、本当はね……」

「言わなくていいよ。美穂は若く見えるよ。20代って言われても納得いくし。」

「……あつ……ありがとう。」

美穂が戸惑つてるように見える。別にお世辞じゃなく、実際29歳と言われたら信じる人もいるだろ？

「あつ！美穂もう一2時過ぎてるよ！仕事間に合ひつつ？」

「えつ！嘘？ヤバイ！シャワー借りるね。」

そう言つてダッシュでリビングを出でていった。部屋に残された俺は、美穂のバッグが目に付いてしまい、見てはいけないと思いつつその中を見てしまった。

中には保険証が入つていて、美穂の生年月日から計算すると…、ちょうど20才だから40歳！？扶養家族に12歳の娘さんが1人…。ん…バツありか？

それにしても…、40歳か…。自分の20年後なんか考えられないけど、そんな頃までエッチしたいものなのかな…？エッチ好きな大人の女性つて…、それとも個人差かな？

玄関まで美穂をお見送りにいへと、気前よく5万円渡してきて、最後にキスのおねだりをされた。

「甘えん坊だな～。」

「早く早く。」

「口紅落ちない？」

「そんなティープなキスじゃなくて…、」

面倒臭いと思いつつ、チユウと軽くキスしてあげた。

「行つてきます。」

「仕事頑張つて！」

そう言つて見送つた。でも美穂が若いのは、きっと自分のクリーツクで色々やつてるからだ。シワにヒアルロン酸注射をして、シワを消すつてなんかの本で読んだ事がある。多分自分でもやってるに違ひない。

でも5万円も貰つてよかつたのか…、なんか罪悪感を感じずにはいられなかつた。でも考え方を変えれば、援交したみたいなものか…？女だった頃に援交なんかした事はないが、こんな感じだらうか…？

でも美穂みたいああゆう人がホストクラブにはまるのか…。彼女達は月にどの位店でお金を落としていくのだろう…？

午後は暇だつた。そもそも研究の手伝いがなければ、東京にいる理由がないのだ。オバサンになつてしまつた教授は、一応明後日から研究室に出てくるそつだ。

とりあえず履歴書なしで働ける日雇いバイトでも捗そつと思い、東京に出てきた時に買ったアルバイト雑誌を見るが、日雇いはどれも安い。しかも基本的に履歴書はどこも必要な感じだし…。

それを考えたらエッチしただけでお小遣を5万もらつたのは効率的だつた。

アルバイト雑誌をペラペラめくついて、ふと、お昼ご飯を食べてなかつたのを思い出した。冷蔵庫を覗くが食材は卵くらいなもの。ベーコンは昨日の晩にビールと共に胃袋に収まつてしまつて既に無い。そして俺は何日か分の食材を買いがてら、食事をしに外出する事にした。

男になつて初めて一人で歩く。女だつた頃は、一人で外食なんて考えられなかつた。彼氏と一緒に友達と一緒にじゃないと、お店に入りづらいと感じていたのだ。でもどうだろつ…、牛丼屋やラーメン屋だつて今の俺なら「デビュー」出来そうな気がする。

でも結局入つた店は普通の喫茶店。ランチを食べ終えるとスーパーへと繰り出した。

籠を持つと、野菜・肉・魚・牛乳・お菓子と籠へ入れ、酒のつまみになりそうなものも忘れずに籠へと入れていつた。と、そこで女性に声をかけられた。

「お兄さん。」

回りを見ても、明らかに男は俺一人。

「俺?」

「 セリ。」

「 なんでしょうか?」

女性は見たところ20代後半の専業主婦といったところか…?

「いや、人違いでした。」

「 はあ…?」

「 あのあ…、お兄さん芸能人に間違えられません?」

「 芸能人ですか? ってあなたなんかの勧誘ですか?」

「 違いますよ~。ほらつ、なんていつたかしら、最近ドラマに出てくるよつになつたジャーネーズの子…。」

俺が女だった頃好きだった子に違いない。私自身似てる感じてるのだから、この人がそう思つても、なんら不思議じやない。

「 すみません。失礼します。」

そう言つて放置してきてやつた。でも、そういうえば、若い女性にはチラチラ一度見されてる気がする。確認されてるのだ。違うと分かつても見てる人もいた。

そういうえば喫茶店のウェイトレスにもガン見された気がする。こんな感じならホストで十分やつていけるかもしない。

短い期間でいいなら、ホストやつてもいいかなと思い始めていた

遅い！遅すぎるーー。マッキーはどこまで買い物に行つたんだ！？俺が作つたカレーは、鍋の中でとっくに冷めている。まったく、どこに行つたんだか…。

結局俺は一人で食事を済ませ、お風呂に入つた。風呂から上がつてもマッキーが帰ってきた様子は無く、俺は一人広いベッドで寝る事になつた。

翌朝、2日連続で携帯電話の着信で起しきされた。

「誰だ…？」

携帯電話のディスプレイを見ると“和也”と表示されている。横を見ても今日はマッキーがない。昨日は帰つてこなかつたようだ。一瞬出ようか迷つたが、昨日出て今日出ないのは変だと思い出る事にした。

「もしもしーー！」

「あーすいません。昨日の方ですか？」

「はい…。」

和也の声がトーンダウンしたのが分かつた。

「すいません。昨日は土曜で学校に行ってないもんでも…。」

「そうですか…。」

「明日は月曜なんに行つてみます。その教授さんの部屋に行きますので。」

「すみません。よろしくお願ひします。」

「いえいえ…。でも春休み中なんで、会えるかどうか分かりませんから、あまり期待しないで下さいね。」

「はあ…。」

和也がさらりと一言下している。

「それにしても随分心配なやつているんですね。」

「そりゃ…、いえ、それではお願ひします。」

「あっー。」

俺は和也ともう少し話してたくて、何か話題を考えた。

「はー?」

「彼女と…、彼女とケンカでもされたとか?」

「いえ…、ここ最近連絡が取れなかつたから、心配になつて…。」

うわつ、なんか本音っぽい事聞けて嬉しいなー!

「さうでしたか。それは心配ですよね。」

「あの～、あなたは大学生なんですね？」

「はあ…、一応。」

「ん…？ なんだ？」

「やつぱりあれですかね、女子大生は、キャバクラなんかのバイトしてる子多いですか？」

「おー！ マジで心配してくれてる！ 和也つたら…。でも俺はどんだけ信用されないんだ…。」

「えーと、俺の回りは聞かないけど、知らないだけでいると思いますよ。それにもしそうでも、自分からは言つてこないですよ。」

「…ですよね。」

「彼女もキャバ嬢してると疑つてるとか？」

「いえ…、そういうこともありません。ただ…、」

「だだ？」

「東京ですかね。」

「成る程…。でも彼女がどういった方が知りませんが、信じてあげたらどうですか？」

「はあ…、いや、あなたに言われるまでもなく信じてますよ。ただ

すぐ「会える距離じゃないから心配なだけです。」

「やつですか…。」

「見ず知らずの人にこんな話してすみません。」

「いえ…。」

「ではよろしくお願ひします。」

和也はまた電話を切る切り出し方だ…。2度も引っ張つたら変な人に思われるに違いない。俺は泣く泣く、

「はい。それでは…。」

そう言つて電話を切つた。電話を切つて、和也ともう少し話せなくて残念だが、なんだか和也がどう俺の事を思つてくれてるか分かつて、なんだか嬉しかつた。

「何ニヤニヤしてんだよ。気持ち悪いな…。彼氏か?」

「マツ、マツキーー。」

この女、朝帰りの上に盗み聞きしてたとは、しぶとい奴だ！
俺はいつの間にかマツキーの事を“女”と認識してゐるやつだ。だが俺はそれをまったく自覚してないのだ。

031 男ぶりごへ

「マジ、マジキーッ」

「何二ヤーヤしてんだよー。気持ち悪いな。」

「何處(どこ)でたんだよー。心配したんだぞー。」

「ハメンハメン。ちよっとな。」

「ちよっと何(なん)？」

「こや、だから…、」「こや、だからお酒が弱くなつちやったみたいで、起あたら知ら
ない男とベッドの上で…。」

「はーー?」

「こや、だから…、」「…」

「せりかわしちゃったの?」

「多分…。」

「馴鹿(アヒル)か?」

「由宇(由宇)に呪われたくなこよー。」

「…、確かに…。俺も沖縄でマジキーヌの寝込みを襲つてゐるか…、

「で、今の電話彼氏?」

「うう…、うん。」

「あの感じだと別れるつもりないの?」

「えっ…まあ…。」

やつぱり盗み聞きしてたのか…。

「こつまでも騙しきれないと思わない?」

「やうだけど…。」

「まあ、いいけど…。カレーは由宇が作ったの?」

「えっ? うん…。他に誰が作るんだよ?」

なんか今日のマッキーは話が一転二転するな…。

「美穂とか、愛ちゃんとか?」

「俺です…えっ…ちょっと待って、愛ちゃんってそんな頻繁に来るの?」

「なんで?」

「いや、別に…、少し気になつたから…。」

「そうだな…、美穂の次に来るかな。まあ、この一人しか来た事な

「ナニ。」

「ナニ。」

「愛ちやんか……。あのへりこの歳から性同一性障害だったんだがつ……。

「今日愛ちやんの店にひづる？」

「え？？」

「興味出しあたんだわ。」

「やなんじや……。」

「まつ、ここや。夜に愛ちやんの店に行ひつな。」

「行つてもマッキーは飲んだらダメだからなー。」

「由宇が一緒に平氣だら？」

「こや、あ……。」

「逆に由宇が一番危ないか？」

「何をー？」

「まほほ。」

またマッキーの冗談に引っ掛けてしまった……。せっかく俺は根

が素直らじこ……。

「カレー食べていいくかな?」

「あー、うさ。今、温めるよ。」

「自分でやるからこよ。それより出かける準備してよ。シャワー浴びるならサクッと浴びてさ。」

「出かけるって何処行くの?」

「着いてからのお楽しみ。」

ん…?なんか意味深だな…?それから言われた通りサクッとシャワーを浴び準備を済ませ出かける事になった。

今日も愛ちゃんのオンボロだ。まだマッキーの愛車こ、一度も乗せてもらっていない。

「マッキーの車って、このマンションの駐車場には置いてないの?」

「それだったら、愛ちゃんの駐車場にいる。たまにはエンジンかけてあげないとダメだよな。」

「入れ替えたんだ。」

「もう一台分駐車場借りるのは手間だからな。」

「そつかー、そうだよね。」

日曜の都内は比較的空いている。商業車輛がいなくなるからだろ

う。ただ幹線道路はレジャーに行き来する車で混む時間があるみつだ。

「わづ言えば三崎君は一緒になかつたの？」

「うと…、そうだね。」

「じゃ、一人で飲み行つたの？」

「いや、三崎と別れたあとナンパされて…、ついつい飲みにいっちやつてや…。」

馬鹿だな…。のこの付いていけば尻軽だと思われて、ヤラレるのが落ちだ。

「三崎君は平氣だったのかな…？」

「あ～どうだら、大丈夫じゃない？」

「わづかな…？」とひざのナシパしてきた相手って格好よかつたの？

「わづ…でもないかな…。」

「じゃ、なんで付いていたの？」

「いや、酒が強いつて自負があつたから、酔い潰してやれりと思つたんだけど、逆に潰れたみたいで…。」

「成る程…。今度から氣をつけね。」

「分かってる。由宇といふ時以外飲まないよ。」

「だね……。」

ん……なんか俺って頬られてる？それこそ、今、マッキーを“守らな
きゃ”とか思つた？

体や本能、そして気持ちまで男の体に酔染んでいくのかな……？

でもまだ由宇には自覚がない。由宇達は気持ちの上でも更なる変化を遂げるのだろうか……？変化後の性が支配していくのであるのだろうか……？

車は有名なホテルの駐車場へと入っていった。

「マックキーまだ毎前だぞー。」

「ん? おーい、由宇は何勘違にしてんだよ?..」

「えつ? 違う?..」

ホテルに入ったから、ついエッチでもするのかと思つたが、どうやら田的は違うようだ。

よくよく考えれば一緒に住んでるのだから、エッチはマンションですれば済むことだ…、わざわざホテルですることはないのだ。

「じゃ、何しに来たの?..」

「昔、ここの一階にスケートリンクがあつたんだよ。」

「今はそれを改装して、水族館をやつてるんだ。」

「昔?..?..

「ふうん。」

「イルカやアシカのショーもあるし楽しこよ。」

「ナリ?..。」

ん…？これって単なる「トーク？」

「わあ、行くよ。」

そして一人で車を降り水族館へと向かつたのだ。

「ここにな、3年前まで一緒に研究してた先輩が勤めてるんだよ。一年しか一緒じゃなかつたけどな。」

「へへ。」

「年上だけど何かとよくしてくれて、今でも仲良くなっちゃってるんだ。」

「ふうん。」

「お前関心ないね。」

「え…。だつて、俺の知らない人の話でしょ？」

「先輩の話じゃないよ。」

「ん？マッキーは何が言いたいんだ？勿体振るのはいいが説明はシンプルに願いしたい。」

「いいか、ここは水族館だ。」

「はあ…、」

「最近の水族館はな、映画の影響もあってクマノミとかも展示して

あるんだよ。」

「あーっ…ムゴッ…。」

ついつごトカイ声を出し、マッキーに口を押されてしまつた。

「静かにしろ！」

回りの人の視線が俺達に集まつてゐる。

「まだ譲つてもらえるか分からぬけど、メールはしておいたから事情は分かつてくれたはずだよ…。」

「いや、絶対譲つてもらわうよ。」

「つて言つて、もりえたとしても、山ちゃんが盗む形になるから、無理強いも出来ないし…。」

「そっ、わつか…。」

「だから今日は下見だよ。」

「下…見…？」

何言つてゐの?「まさか!」の有名なセキュリティも山ちゃんとしてそんなホテルに盗みに入ろうとしている?

「どうした?」

「いや、だつて…。」

「欲しいのか?」

「欲しいけど…。」

「だつたら決まりだな。」

えーーーーー!犯罪者にさせただけは止め!

「おっ、来た来た。センパーイ!」

『センパーイ』じゃないつーの!

いや、逆に先輩に大活躍してもらわないと、強盗犯にされてしまつ。俺も心の中で“センパーイ”と叫びたい気分になつてきた。

その山ちゃんと呼ばれてる先輩は、田を丸くし、疑つた田でマッキーを見てゐる。

「先輩?」

「本当に真木が?」

「あつ、そうですよね。紛れも無く真木翼です。なんなら免許証でも見ます?..」

「いや…。そうか、やつたな!そつか…、本当に薬出来たんだ…。」

なんかこの山ちゃん先輩は泣きだしそうな感じだった。ん…、も

しかしこの入って隠れ組合員、…？性同一性障害か…？

「ちゅうと…。」

そう言つて山ちゃん先輩を物影に引つ張つて行くと、

「由宇ちゅうと見張つてー。」

「えつ、あ、OKー。」

そして胸と「アソ」を触らせてあげたみたいだ。

「本物だよな？手術やつたとかじやないよな？」

と、先輩の歓喜の声が聞こえてきた。

「本物です。どうですか？一肌脱いでもらえませんか？」

「ん…、それは…、ちょっと考えさせてくれ…。」

いや、山ちゃん先輩は考へないで“力になる”と言つてくれ！

「そうですか…。」

「他の奴らに聞いてみよつか？」

「ツテありますか？」

「まあ水族館同士は、結構つながりあるんだよ。理由つけねば少し
くらご分けてくれるとこあるだろ。」

「そうですか…。」

「急ぐのか？」

「いや、由宇が…、この子が早く戻りたがつてで。」

「ん？この子が…？えつ？この子つて…男じゃなくて元女つて事？」

「どうも、後輩の田丸と申します。」

「どう、どうも…、山田です。」

「で、2・3匹早急になんとかなりませんかね？」

「ん…、あー、じゃ、なんとかやつてみる。チャンスは俺の夜勤の日だな。」

「夜勤あるの？」

「病氣の子とか出産控えてるイルカとかいるから、獣医とスタッフの2人は待機してるな。」

「そりなんだ…。」

「水槽と酸素送る機械用意しとけよ。」

「分かりました。で、夜勤いつですか？」

「スケジュール見てメールするよ。」

「お願いします。」

「じゃ、悪いけど仕事あるから行くな。」

「すみませんでした忙しいとこ。それと先輩、」

「ん?」

「この事は誰にも言わないで下さい。これ以上知られるのは悪いので…。」

「分かってるよ。」

そう言つて山田先輩は手を振つて行つてしまつた。山田先輩が大活躍してクビにならない事を祈る。

033 恥ずかしい？

ホテルを出た私達が向かつた先は叔父さん」と氷室教授の自宅だつた。買い物に付き合つて欲しいそつだ。

「ねえマッキー。」

「ん、何？」

「氷室教授のことなんて呼んだらいい」と思つゝマッキー達が『先生』って呼んでゐるのに、俺一人だけ『叔父さん』って呼ぶのは可笑しいよね？」

「そうだね。ウチらと一緒に『先生』とか『教授』でいいんじゃないい？」

「そつか…。」

「それに今は叔父さんって感じより叔母さんって感じだし。」

「だね。」

「それに、今日買い物してゐる時に『叔父さん』って呼んだら、店の人に変に思われるだろ？」

「確かに。」

どうやら私も『先生』って呼ぶことに落ち着きそつだ。

「そういえば、先生って性別変わつて帰つたけど、家族は本人つて分かってくれたのかな…？」

「あれつ？先生なら独身だよ。」

「えつ… そつなの？」

「そうだよ、知らなかつたの？由宇は本当になんにも知らないんだな。」

「そりや…、」

俺の編入の話が出る前なんかは、親ですら年賀状だけの付き合いでったのに、その子供の俺が、その人の配偶者の有無に興味があるわけがない。第一、教授つてこともあるし、そこそこのいい歳のオジサンのイメージでしかなかつた。年齢すら知らないのだ。

「ちなみに先生はバツ2つて話だよ。」

「バツ2？離婚歴2回つてこと？」

「そう。次はないだろ？ けどな。」

「ふうん。」

バツ2か…、でも相手がいるなら、また結婚すればいい…、誰かに遠慮することなどないのだ。

「着いた。」

「えつ…まつ、まさか、このアパート?」

「そうだよ。」

見るからに古いアパートだ。大学教授ともあろう人が住んでいる所とは到底思えない…。

「何かと出費が多いみたいよ。」

「えつ?」

俺が、教授なのになんでこんなボロアパートに住んでるんだ?って、心で思ってる事を、質問する前にマッキーが答えてくれた。

「なんでも感謝料やら養育費2人分やらで金が無くなるらしい…、金のかかる趣味はスキーバーディングくらいなものかな。」

「そう…。」

「よし、呼び行くか。一緒に来る?それとも車で待つ?」

「行くよ。」

なんとなくこの古いアパートに興味があつた。自分の叔父の住んでいる家を、見てみたかったのかもしれない。車を出てドアの前に立ちマッキーがノックをする。呼び鈴は壊れて鳴らないそうだ。

「先生ー!迎え来ましたー!起きてますかー?」

「おー、真木君待つてたよ。」

マッキーが呼んだりそう言つてドアを開けたのだ。
ただ、お風呂上がりだつたらしく、バスタオルを体に巻き付けた
だけの格好だつた。濡れた髪と胸元の谷間がセクシーな感じだ。そ
れよりなんか一段と若くなつてゐる？気のせいか……。

「なんて格好して待つてゐんですか？」

「なんでつて、真木君を待つてたからだよ。着替え持つてくれ
たんだろう？」

「あつ、さうだ！車に忘れてきた！今取つてきますね。」

「おう。早くな。」

「はい。」

そう言つてマッキーは車に取りに行つてしまい、俺は先生と残さ
れてしまつた。

「由宇。寒いから中に入つてくれる？」

「はい。」

3月末の昼間とはいへ、風があつてまだ肌寒い時期であった。
中は意外と綺麗にしていて、シンプルな感じにまとまつてゐる。
彼女でもいて掃除してもらつてるのかな……？

「男モノの服しかなくてな。今日色々買い揃えたいんだ。」

「ですよね。」

「由宇悪いけど、今日は荷物持ち頼むな。」

「はい…。」

「やつめり」と…、今田は荷物持ちか…。

「お母さんは元気か?」

「はい。パンパンします。」

「そうか。」

あれ? そのあとはふつり『お父さんは?』じゃないのか? ま、いいか…。

そんな中マッキーが『失礼しまーす。真木上がりまーす。』と言つてドアを開けて入つてきた。

「先生、バストは何カップですかね? とりあえず私のしかないのでも、私より小さいと助かるのですが…。」

「サイズなんて分からないよ。とりあえず乳首が服に擦れなければそれでいいから。」

「はい。あと服もウエストサイズ分からないので、スカートは止めてワンピースにしました。これはそのうち慣れますから、我慢して下さい。」

「まあ、」の容姿に違和感のない服装なら問題ないよ。」

そう言つとおもむろにバスタオルを取り俺の前に、着し氣もなく裸を見せたのだ。

「…。」

スタイルがいい。ウエストがくびれて、胸も形がいい…。

「まぢはパンツから…、」

「マジキー、俺車行つて待つてるから鍵貸して。」

「えつ、あー、うん…、わざわざ。」

鍵を受け取りそそぐと部屋をあとこした。
なんで恥ずかしいのだろう。女の裸なんて十分過ぎるほど免疫があるはずなのに…。

買い物は下着からアウターまでなんでも揃つて、低価格つてことで、某カジュアルショップに行くこととなつた。

二人は先に服を選ぶことはなく、バストとウエストを更衣室で計ることにしたみたいだ。先生の家にメジャーがあれば計つてきたのだろうが、男の一人暮らしにメジャーなんかあるわけないのだ。マッキーは前日の三崎との買い物の際、店員さんに計つてもらつたそうなのだが、他の人のを計る方は初めてなので不安と言つていた。この店は下着専門店じやないので、計つてくれる人はいないのだ。

「由宇！」

「何？ つていうか大きい声で呼ぶなよ。」

「ちょっと来て！」

なんだよ～。と、思いつつ呼ばれた理由は何となく分かつていた。

「何？」

「やつぱり由宇も計つてよ。私もわざと計つたんだけど、一人だと不安つていうか…。」

「はいはい。やればいいんでしょ…。」

「頼んだ。はい、メジャー。」

「はい。先生入ります。」

「悪いな。」

カーテンを開け中へ入ると、先生はバストを押されて待っていた。一応は恥ずかしいのだろうか…? 下はショーツだけ、布一枚だけの姿だ。まったく、なんで俺はドキドキするんだよ…、

「はい。じゃー、計りますので後ろ向いて手を上げて下さい。」

先生は素直なもんだ。鏡越しに綺麗な胸が見える。トップから計り、次にアンダーを計るので胸を持ち上げてもらつた。これにも素直に従つてくれる。

「はい、OK。服着ていいですよ。」

「サンキュー。ついでに悪いけど、ブラのホックと、ワンピースのファスナー上げてつてくれる?」

「はいはい…。」

なんとなく見慣れてきたのか、先生の素肌を見ても平気になつた気がしてきた。でも俺の下半身は存在を誇張しようとしている。

「どうだつた?」

「65のロでいいんじゃないかな?」

「ん…、それって私と一緒に…!」

「へー。」

なんともリアクションしちゃう。成長期にはそんな話を女同士でした覚えもあるが、今は何となく話に混せてほしくない感じだ。

俺が持つ籠はいつしか一杯になつていつた。下着を3セツトにババシャツ2枚に…、インナーからアウター…、パンツにスカートに…と、色々買い込んでいたのだ。いくら低価格が売りの店だからといって、こんなに買つたらさすがに諭吉が3・4枚いなくなるだろ？…。

ストレスを買物で解消する〇しみたいだ。調子よく籠に放り込んでいつた結果、俺の持つ両手の籠は既に溢れていた。

先生だつて4月から講義あるんだから、その時は男に戻つてないといけないわけで…。せいぜいあと10日間くらいだらう…、ホントにこんなに必要か～？

買物が終わリアパートへ帰ると、ちょっとしたファッショントリ一が始まった。買物も長い時間付き合わされたが、このお着替えタイムも長かつた。

なんだろ…、照れはあるが、先生の下着姿も見慣れて麻痺してきただ感じだ。つて、下着姿の前に裸を見たからか？ん…？いや、違う違う…本来俺は女なんだからこれで問題ないのだ。

「君達夕飯はどうする？どうか食べいくか？」

「いや、すみません私達行くとあるので失礼します。」

「そつか…、残念だな…、買物の御礼に飯でもと思つたのだが…、

「それだつたら、明日のランチお願いします。」

「分かった。」

「先生明日は何時くらいで出でますか？」

「10時だな。」

「わかりました。私達もそのくらいで出でます。」

それで先生のアパートをあとにした。

「夕飯くらごい馳走になればよかつた！」

「いや、先生は夕飯の時必ず飲むんだけど、飲み始めたら長いんだよ。」

「やうなんだ…。でもマジキーみたいに、お酒弱くなつて飲めなくなつてるかもよ。」

「みんながみんなそいつとは限らないだろ？」

「やうだナビ…。」

「だう？やうだ、ビーフカツの夕飯食べてから行く？軽食くらうなら向ひにもあるナビ。」

「向ひのやうだ、ビーフカツの夕飯食べてから行く？軽食くらうならたつけ。」

「え？覚えてないの？」

「えっと……」

「愛ちゃんのことだよ。」

あつー…そ�だつた。すっかり忘れてたしまつっていた。和也の電話で起こされて、水族館行つて山田先輩つて人に会つて、先生の買物に付き合つて、なんちゃつてファッショソシヨーに付き合わされて、濃い一日だつたから忘れてたしまつっていた。そして一日のシメが愛ちゃんの店に行く予定だつたのだ。

035 危険人物？

夕食を食べたあと愛ちゃんの店へ行ったのだが、想像してたのは全然違う、意外とこじんまりした店だったことに驚いた。二コ一ハーフの数も予想より下回っていたのだ。

「いらっしゃいませ~。」

「どうも。」

「あ~、マックキーに由宇ちゃんじゃない。来ててくれたの~。」

やつぱり愛ちゃんは苦手だ…。しかもこの手の店に来るのは初めてだが、他のスタッフからも見られてる気がする…。

「カウンターにする? テーブルがいい?」

「カウンターでいいよ。今日はスタッフこれだけ?」

「今日は私入れて3人。」

「あれ? いつもお子は?」

「ん? ああ、莉奈なら辞めたわよ。あと連絡ないけど那緒も、もう来ないと思~。」

「なんで?」

「莉奈に引き抜かれたのかな。」

「結局、自分の店出したの？」

「みたこよ。招待状来てたけど顔出さなかつた。」

「そりゃ。」

そんな会話をしながらマッキーはカウンターの真ん中に座った。カウンターと言つても5席しかなく、テーブル席は4人掛けが3つ の店内だった。
そのマッキーの右隣へ腰掛ける。

「何にする？」

「ウーロン茶ちょっとだい。」

「あら、珍しい。由宇は？何飲む？」

「えーと、生ビールつてあるの？」

「あるよ。」

そう言って手際よく準備していく。

「いらっしゃいませ。」

右後ろからそう声がした。その声は女性そのものだ。

「ママ。氷お願いします。」

「はい。ちょっと待つて。」

「あー、いい男。ママの知り合い?」

「はあ…。」

しかも丸ノ内Oのよつな綺麗なボディラインだ。スレンダー?
セクシー?元男には見えない。

「新人さん?」

横からマッキーが声をかけた。

「はい。美月つていいます。お一人はモデルさんかなにかですか?」

「いえ、一般人です。」

「あら、勿体ない。」

「ははは…。」

そういうつじでうちに飲み物が出てくる。更にテーブルのお客さん用の氷も出てきた。愛ちゃんは手際がいい。

「私も何かもらつていいかな?」

「もちろん。」

「ありがとうございます。」

こういったところのシステムはよく分からないが、お客様に断つて飲み物を用意するらしい。それが売上につながるらしいのだ…、要はお客様の支払いに乗っかるという事だ。

それからはカウンターの中の愛ちゃんと、くだらない話をして時間を過ごした。

ウチらの他にはテーブル席に1組のお客がいて、2人のお客様に対する対応で、キャストも2人。氷を取りに来た美月って子じゃない方の子は、俺と背中合わせの状態で顔は見えないが華奢で綺麗系のようだ。

「一人共前からいな子だね。」

「うーん。美月は知り合いのママに頼んでこの間から来てもらう事になったの。もう一人はマックキーも知ってる子よ。」

「見た事あつたかな？」

「！」の間までカウンターでボーカリやつてた子よ。」

「おー、そうか。」

「呼ぶから待つて。」

そういうと『うちわづま』と書いてカウンターから出ていった。

そして入れ代わりにその子がカウンターの中へ入ってきた。他の二人に比べ若い感じがする。

「はじめまして花音です。」

花音つて子は俺の方を向いて話し始めた。俺が一応男だから先に

挨拶したのかな…？

「どうせ。」

「何か飲み物頂いてよろしいかしら？」

「はあ…、どうせ…。」

「お前お伺いしてよろしくですか？」

「田丸です。」

「田丸さん。」

そしてマッキーの方へ向きを変えた。

「真木です。」

「あら、『夫婦ですか？』

「えつ？」

「だつてマキってお前の夫婦ですよね。」

「いや…、」

確かにマキって名前の女性もいるだつが、いくらなんでも夫婦つて…。

それにこの一人、さつき愛ちゃんが面識あるような事、話してたよくな…。マッキーだって分かんないって事…？

「恋人です。」

ブーーーッ！俺は飲んでたビールを少し吹き出してしまった。

「マジ、マジキ一はーいつから俺達そつなつたの？」

「何、由宇は焦ってるの？」

「だつて…。」

すると耳打ちするようにして『エッチしたし、同じ部屋住んでるんだから、他人からみたらどう見える？』と言つてきた。花音さんはテーブル拭くおしごりを用意してくれている。

「あひあひ、仲良くなれてよこね。」

俺にはれつさとしたり、れつさとした…彼氏が…。
和也の事は好きだ。でも今は、なんとなく違う存在に変化してきてこる…。

「花音さんつうと聞いていいですか？」

「はー。」

「工事は済んります？」

「あ…、いえ…。」

マジキ一が変な事を聞きました。花音さんも恥ずかしそうに答え

てる。

「ありあり?」

「はい…。」

「予定は?」

「今度タマの方を…、」

「こつ?」

「ちよっとマジキーー。」

「何?」

「そんな聞いたら失礼じゃん!」

「大丈夫ですよ。結構聞かれますし。」

「そうなの?」

「で、こつ?」

「一応来月中旬には…、」

「やつが…、ヒルヒル…、今日アフターしない?」

「はあ?」

「ちゅうとマッキー……？」

「なんだよ由宇。」

「まさか、次の時に呼ぶつもり?」

「やつだよ。由宇にしては勘がいいな。」の子が望むならと思つてさ。だから少し聞いてみようと思つて。

「…。」

マッキーはおかしな方向に走り始めてる…。」の子をモルモットのように見ているかのようだ。

「由宇は少し黙つてよ。」

「…。」

「二人共仲良くして下さい。それにアフター誘われるの初めてなんで嬉しいです。女性から誘われるのがちょっと悲しいですけど。」

「じゃ、アフター大丈夫?」

「もちろん。ママのお友達みたいだから安心だし、しかもカッフルだから安全だし…。」

「安心安全ね…。」

いや…、マッキーはある意味危険人物になりつつあるような気がする…。

036 立場

俺とマジキ一は、店の近くにあるファミレスで花音さんを待った。

「すぐ薬出来るか分からないんでしょ？」

「でも歎きでる子がいるんだから、手を差し延べてやつてもいいだろー。」

「神様にでもなつたつもつ？」

「神様…？」

「良くないよ…。」

「でも、どうせあの子だってどんどん手術繰り返して、愛ちゃんみたいに体いじつちゃうんだよ。」

「わつだらうけど…。」

実際、あの手の店に入る大半の子は、何らかの手術をしているだろう。ただ始めから見た目を諦めてる子はやらない人もいるみたいだが…。

「だろ？人助けだよ。」

「でも…、だつたらみんな助けるわけ？」

「みんな？」

「例えば…、店にいた美月さんとか…」

「あの子は…、」

「何?」

「去勢済みの子はちよつと怖くて出来ない。」

「去勢?」

「タマ無しつて意味だよ。美月つて子はニュー・ハーフ歴長そうだから、多分タマ抜きも終わってるし、女性ホルモンも長い事やってそうだし。」

「…。」

タマ抜き…、そつか…、マッキーみたく完全な男の体からなら、今みたく完全な女の体に変われたけど、生殖機能が欠けてたらどう変わるか分からぬって事か…。

「その状態の子に使つた時にどんな感じになるか分からぬだろ?」

「異形になるつて事?」

「だから分からぬ。」

「マウスで、やつをうடテストやつてないの?」

首を振つてゐる。やつてないみたいだ。

「どの道、少しの人数しか試せない……。」

「試す？ 実験感覚……？ やっぱり人助けとこうのは一の次か……？」

「変化の過程を映像に残せねばと思つてゐる。もちろん本人の撮影許可があつたらだけね。」

「うやうやしき事か……、映像資料を得るのが目的……。」

「うへん……。」

「由宇はうやうやしきの反対？」

「マッキーは……、」

間違つてゐる。うやうやしきかけて止めた。言つたところで、俺にマッキーの考え方を変える力はなさそうだ。

製薬会社ではモニターを集めて、薬の効果のデータを集めたりしてると聞いた事がある。

でも今回の場合は、人体実験に限りなく近い……。しかも認可が下りてないのにだ……。その前に申請も出してないだろうけど……。

「由宇が先生に『元に戻れるんですね？』って質問した時の、先生の答えた言葉覚えてる？」

「え～と、データの話？」

「違うよ。先生は『おさらく戻ると悪い』って言つたんだ。」

「確かに』おそらく戻れる……』つて……』

「先生も原理は分かってるんだろうけど、マウスは同じ薬じや元に戻らなかつたんだよ。」

「えつ！？元に戻らない？」

「びつくりした？でもそうなんだよ。だから、今ままなら先生は大学を辞めさせられるかもしねない。」

「嘘でしょ？」

「本当だよ。性別が変わつた先生を学長が受け入れてくれれば別だけど。」

「いや、やじじやなくて、同じ薬じや戻らないって本当？」

「マウスの実験では戻らなかつた……。」

「わつ……なん……だ。」

びつくりしたといつよう愕然といつ言葉の方がしつくりきそうだ……。でも、始めの話じや『春休み中だけでも……』的な言い方だつたのに……、だつたら山田先輩に貢つても俺は戻れないって事……？いや、俺用にもらつに行つたわけではなかつたつて事になる……。

「授業の方は、しばらく準教授にしてもりつとしても、その状態が長く続けば学校に居れなくなるだろつ。」

「……。」

「だからねそらく研究所を立ち上げると悪いんだ。その時は必ず手伝って欲しい。」「

「そう…、研究所…。」

「うん…。」

何がなんだか分からなくなってきた…。

「そつ、そつだ。聞いておきたいんだけど、マックキーって元に戻りたくないの？随分落ち着いてるけど、マウスではダメだったんだよね？」

「そうだな、薬が出来なきゃ戻れないね。」

「それって答えになつてなくない？男に戻りたい？それとも今ままでいいの？」

「どつちでもいいよ。」

「くつ？」

「性別なんてどつちでもいいと言つたの。」

「マジ…？」

『昔』今度生まれ変わったら男がいい？女がいい？』つて友達同士で質問しなかつた？』

「した……かな……？」

「俺はその質問こ『出産出来る男がいい。』って答えたよ。」

「えっ？」

「みんなそんなリアクションも。でも出産は女だけの特権だろ？」

「……だね。」

「でも生理とか面倒だって『うじちゃん』生理痛だつてあるじ。それ
さえなければ女でもいいけど。」

「やうだね。っていうかそのうマジキーハモ生理くるさじやな
い？」「

「ゲッ！？やうかな……？」

「うと、うと、うちは射精出来たんだから、普通に考えたら可能性高
いよね？」

「やつ、やうか……きたら色々アドバイス頼むね。」

「うと……、うと。」

「まあ、話戻すと、いづれは男に戻りたい。そのためには研究の手
伝いしなきやだろ？」

「まあ……。」

「将来的には性同一性障害の奴らだって助けられるだろ?」

「うそ…、だろ?ね…。」

『助けられる…』、『やまにマッキーは、自殺した友達の事が心の中で引っ掛かってるのだろうか?』

「由宇は早く戻りたいんだろ?..」

「やうだよ。」

「じゃあ、積極的にお手伝いするんだな!..」

「やっぱり、そんなの…?」

早く元に戻りたい俺は、少しでも早く“戻る薬”が出来るように、データを取るサンプルとしても協力しながら、手伝うしかないみたいだ…。

「どうかな花音さん？協力してもらいなー？」

「はー。いじらしくようじくお願ひします。」

「本当にやつてくれるの？」

「その話が本当ならやりたいです。でも、本当に一人共その薬で性別変わったんですか？俄かには信じられないんですけどー！」

「本当だつてー。」

「証拠見せてもらひません?..」

「嘘じやないってーっていうか、私は男の時あなたに会つてゐし。」

「えつ？」

「分からなーい？」

「はー。」

「ママの友達でマッキーって覚えてない？」

「マッキーをなんなら知つてます。店にもよく来てらつして、確かホストをやつしてー、」

花音さんの動きが止まり、マッキーを凝視し始めた。

「えーっ！…もししかして、マジキーさんですか？」

「やっと分かった？」

「いや…、どうから見ても女性の顔立ちですよ…、顔は、顔はいじつたんですか？」

「顔も薬のお陰で！」の通りだ。」

「やっ、やつなんですか…。胸とかもちろんとあれですか？」

「『あれ』？まあ、普通にあるよ。アソコも綺麗な感じだし、なんなり見せてもここと触りせてもあげるよ。」

「はあ…、」

「今からウチ来ない？」

「えっ…、」

「ここだらけ田舎へっこつか由宇からも離つてしまつたよ。」

「つてこつか俺はただの西湖で、あれはマジキーのマンションだしじ。」

「それでも…、」

「今日は遠慮しておきます。」

花音さんがマッキーの言葉を遮りて断つてきた。

「えつー…あつ、やつ…、それだったら、今度愛ちゃんと一緒に来なよ。」

「ママとですか…？」

「それなら安心だろ？」

「まあ…。じゃあ、ママはこの事…、「

「知ってる。この事を知ってる、数少ないウチの一人だね。」

「やつなんだ…。」

「よし、お寿司でも食べに行こつか？」

「えつ？今から？」

「何だよ由宇？」

「こんな時間に食べたら太るよ。」

「花音さんの初アフターが、ファミレスで終わったら可哀相だろ？」

「いえ、大丈夫です。それは殿方に単独で誘われた時ことっておきますから。それに私も太りたくないですし。」

「やつ…？」

「はい。」

「そつか…。そうだーちなみに聞きたいんだけど、美月さんは付いてるの？有り有り？」

「お姉さんは有り無しです。」

「そつか…。」

「どうやらマッキーの予想通りタマ抜きは終わってるらしい…。」

「美月さんもそつかの薬の話、誘つてみましょうか？」

「いや、今のところ訳があつて、有り有りの人だけしか出来ないんだよ。」

「そつかなんですか…。」

「愛ちゃんには明日の午前中に電話で話しておくから、気が向いたらウチに遊びに来なよ。」

「はい。」

「あと他の人には絶対に内緒ね。」

「…分かりました。」

「彼氏とかにも内緒だからね。」

「そんな人いません。」

「やつか…。まあ、なんにせよ前回を忘れてよ。

「やつします。つてこつかやつます。」

「本當にや。」

「だつて、タダですよね?」

「勿論。」

「痛くないですよね?」

「うんうん。」

「副作用もないんですよね?」

「うへへ、うへん。」

「あるんですか?」

「実は…、」

「何ですか? 気になりますー。話して下さいー。」

「副作用って詰じやないんだけど、性同一性障害の子に限つては、もしかしたらあるかもしねー。」

「やつなんだ…。それは教えてもらひ事出来ないんですか?」

「うへん…、確実かどうかまだ分からなければ、変化後も性同一性障害の可能性があるんだよ。」

「つて事は…？」

「花音さんが女に変わったら、今度は逆に女人の人を好きになつてるかもしぬないって事。」

「そつ、そうですか…。」

「まだ1人中1人ですけどね。それも今はどんな感じになつてるか、よく分かつてないですし…。」

「えつと…、」

「そいつだけかもしぬないし、全員そつなるかもしぬないってやつです。今の体に馴染んでるといいですけど…。」

「えつと、するともし仮に体が女になつたとしても、女性が好きになつて、そのあともその事で悩むのは変わりないって事ですか？」

「可能性としては有り得るんだよ…。」

「うへん。それは悩みますね…。」

「そつだよね。」

「その人に会わせて頂く事は可能ですか？」

「あー、はい。勿論ですよ。今度店に連れて行きますよ。それか今

週どこかで大学の研究室に顔出して頂けると有り難いけど…。」

「あ～、だつたら行きます。大学のキャンパスって、一度入つてみたかったんですよ。」

「本当ですか？」

「はい。」

「でしたら明日の午前中は遊びですか？10時とか？」

「分かりました。」

それから花音さんとの待ち合わせ場所を決めて、今日はお開きとなつた。

「明日は葵も三崎も時間には来るんでしょう?」

「あつー。」

「何?」

「三崎に会つたのを覚えてた。」

「なつー...葵に会つたのに三崎は覚つてないの?」

「葵にだつて言つてないよ。あつまはマウスの餌やりとか、薬を投げした奴らの経過確認つていうか、データ取りがあるから、毎日午前中は来てるはず。」

「やうやうの事か...、じゃあ、あつ遅いか三崎にはメールしつかば?

?」

「やうだね。そういうよ。」

でも時刻は深夜2時にならうとしていた。そしてなぜか普通にマッキーのベッドに2人で寝てくる。別々に寝たのは初めてここに来た日だけ。

「マッキー。」

「ん? ハッキなら今田はしないよ。」

「なつー…やづじやなくてわ…」

「何? 明日じやダメなの?」

マッキーは既に眠れる状態らしい。ついにいつか眠らし。

「ん~…、なんか凄い不安になつてきたんだよね…、

「うそ…、」

「」の体に馴染んでるひたゆうか、女だったのかすら疑問に思える
くらこだしへ、

「…。」

「でも地元に残してきた彼氏の事も忘れてないのも事実だし…、」

「…。」

「マッキー聞こてる?」

「…。」

天井に向けてた視線をマッキーの方に向けると、既に眠りに落ち
ているマッキーがいた。

「つたく…、話へりい聞いてくれよ。」

結局マッキーは三崎にメールせずに寝てしまった。俺の携帯電話
には三崎のアドレスは入っていないから、連絡は明日にするしかな

れなかった。

何やら体が揺れてる。どこつか揺すりされてる。そして誰かが何かを言つてる…、

「由宇起きてー起きなこと先に学校行つやつよー」

「ん…。」

そして無理矢理上半身起しあれたかと思つと、唇に柔らかい感触と共にチョット音がした。それでやつと田が開いたのだ。マツキー？

「おせよっ。シャワー浴びるなら早くしてね。」

なつ、なんなんだ？この新婚生活が始まつたばかりのよつなマツキーのこの態度は…？おはよつのキスが好きなのか…？和也にそんなのやれた事ない…。

「お…は…よ…。」

「早く準備しないと置いてけやー。」

「えつ…、あつ、はー。」

そして言われるままにシャワーを浴び、準備をとあつた服をそのまま着た。マツキーのセンスは別に悪くないと思つ。

俺が着替えて髪を乾かしてゐる間、マツキーは軽く化粧なんかして

「…。でも覚えてたのだろ？…？」

「三崎にメールした？」

「うそ。つい言つた電話だけね。」

「わふ。」

「来れないってさ。」

「なんで？」

「なんかこの間私と買い物して別れた時に、彼女もナンパされたみたいで、その彼とデートするみたいよ。」

「はあ？」

マッキーは三崎の事を『彼女』と言つた。すでにマッキーの中で三崎を女性として認識してゐるといつ事だらう。

「何？心配？それともヤキモチとか？」

「そんなわけないだろーっていつか大丈夫なのか？」

「やつぱり心配なんだ？」

「そっ、そりゃ…、」

マッキーみたく襲われてからじや遅いだろ？…。でも昼間だから平氣か？いやいや…、俺はおととい朝から美穂に襲われてる例も

あるし……

「三崎なら大丈夫だよ。由宇よつしつかりしてそうだし。」

「なつー？それってどうゆう意味だよ？」

「昨日の朝帰ってきた時、ソファーの後ろに誰かが脱いだストッキングがあつたよ。」

「えつ……？」

「ストッキングを脱ぐって事は、誰かと由宇がこの部屋でエッチな事を……」

「ちょ、ちょ、ちょ、ちよつと待つて……」

「あー、私なら平氣だよ。別にウチら付き合つてるわけじゃないし、美穂と由宇がどうなる?と……」

「えつ？なんで美穂つて分かつたの？」

「やつぱり美穂か？」

「げつー？」

「ヤバイ…。ヤバイよ…、言つちゃつたよ。

「別に気にしなくていいってーそれに口口にタダでいるの美穂に後ろめたかったし、美穂をどう納得させようか迷つてたんだよね。正直言つと、由宇をホストにさせて、美穂を手なずけて貰おうと思つ

てたんだよ。」

「なつ？」

「手なずけでは言い過ぎか？まつ、一人はすでにイイ仲みたいだし、手間が省けた。これからも仲良くしてあげてよー！」

「はあ……」

お咎めなしが…。つていうか美穂と仲良くつて…、むしろ罰が付加されてるような気さえする…。

「せつ、先生も来てるだろ、つっ学校行くよ。」

「うへ、うそ…。」

美穂との事バレてたのに一日何も言わないなんて…、いや、それより三崎は本当に大丈夫かな…？すんげえ心配だ…。

そして俺達は花音さんとの待ち合わせ場所へと向かったのだ。

駅で花音さんを待つてると、そこでなぜか愛ちゃんが現れた。

「あら～っ～由里さんなとこで何してるの？」

「あ～、愛ちゃん！」

あれっ、駅前で車止められないから、けみつけ離れたところで待機

「一人？」

「いや、マジキーティーと一緒に。」

「何、マジキーティーでも立ってるの？」

「いや、駅前で車止められないから、けみつけ離れたところで待機中。」

「車？」

「さう。じゃんの運転車ね。」

「え？ あー、そりなんだよ……、そうだ！ 調度いいせーすべそこ

？」

「マジキーが車で待機してるから会つて話を聞いてよ。」

「話？」

「うん…。」

なんか複雑だ…。愛ちゃんがあの薬を使える可能性は、今のところまだない。生殖機能を排除してしまつてるからだ…。それを私達は花音さんに試そうとしてる…。そしてそれがまた成功すれば花音さんも女になるのだ…、それも子供を産める可能性がある女性にだ…。愛ちゃんとすれば複雑だらう…。

マッキーの待機してる場所を教えると、愛ちゃんはそっちの方へと歩きだした。外見的には完璧に女に見えるのに…、後ろから見た体のラインだつて完璧だ。

「田丸さん…」

「わあ…。」

愛ちゃんの後ろ姿眺めていたり、いきなり肩を叩かれ名前を呼ばれたのでビックリしてしまつた。

「すっ、すみません。」

振り返ると花音さんがそこにいた。太陽の下で見る花音さんの女装姿はまだまだ未熟で、愛ちゃんとは比べものにならなかつた。化粧のせいかな？ 昨日は可愛いらしく見えたのに…。

「おはよつ。じゅ、行ひつか。」

「はー。」

車は近くにあって、すぐ着いた。そしてその助手席には愛ひちゃんが座っている。

「あれ? ママ?」

「あ～そつなんだよ。さつきそこで偶然会つてね。いいタイミングだから話してもうおつと思つてね。」

「そうですか?」

すると私達に気付いたのかパワーウィンドウが下がつて、

「後ろ乗つちやつてー!」

「うふ。」

そうして4人は駅前をあとにしたのだ。

「愛ひちゃんは何処に行くといひだつたの?」

「エステ。脱毛の方ね。」

「あ～あ、エステか。」

「ねえ花音?」

「はい。」

「いい人達に出会えてよかつたわね。」

いい人…、何だか罪悪感が湧いてきた。マッキーが映像資料を残したくて花音さんに協力してもらおうとしていることを、愛ちゃんも花音さん本人もまだ知らないのだ。

「そうですね。でも、なんか色々考えちゃって昨日は眠れませんでした。」

「一睡も?」

俺の横で頷いてる。

「そつか…。」

「女になれると思つて…、でも昨日あんな話を聞いたから…。」

「あんな話?」

すかわゆ愛ちゃんが食いついてきた。

「性同一性障害の子は、変化後も性同一性障害の可能性があるんだよ。」

「それって…、」

「それで、私と由宇と同じタイミングで性転換しちゃった子の中一人だけそういう子がいるから、今日は花音さんと会つて色々話してもらおうと思ってるんだ。」

「そつか…。」

なんだか車内が重い空気になりかけた。

「でも私はやります。私と同じような子達の為にもイイ前例になるし…。」

「花音…、」

「イイ前例か…、確かにそうなれば最高なのが…。」

「マッキー！」

「ん？」

「花音をよろしくね。」

「分かってるって！」

「本当に頼むからね。」

「うん。」

そして愛ちゃんを一駅先のHステの前で降ろし、私達は大学へと向かったのだ。

「あの～。」

「ん？」

「私の」と『わん』付けで呼ぶの止めてもらひつていですか？

「あつ、嫌だつた？」

「いえ…、年下なんで呼び捨てでかまいませんから。」

「分かつた。花音つて呼べばいいのね。」

確かに『花音さん』よつ『花音ちゃん』と呼んだ方がしつくつき
そうだ。

「はい、お願ひします。とにかくこれからの人つてどんな人ですか？」

「会つてみれば分かるよ。いい子だよ。」

「ふ～ん。」

「やついえば、じい何田か葵に会つてないね？」

「やついえば、やつだね…。」

最後に会つたのは沖縄行く前だ。この期間葵はどうしてこたのだ
やつ…？

時刻は10時を5分過ぎたといひだ。予定外だった變りやんと会つたことで、到着予定の時間より10分位遅れてしまったのだ。

「おはよひ」やむこめす。」

「おひ、おはよひ。」

「先生、葵来てます?」

「来てるよ。ていうか、変わり過ぎて驚いたよ。誰だか分からなかつた。」

「でも面影は残つてるでしょ?」

「そうだな。でもあの顔は驚いたよ。」

あの顔?

「怪我でもしてるんですか?」

「会えば分かるよ。」

「はあ……。」

そこに当の本人が入ってきた。

「なつ……、」

「おー！久々！」

「おー！って、どうか、ヒゲくらこ剃れよ。熊みたいだぞ。」

「熊？それは言って過ぎだろ？」

「ハハハ…。」

「いや…、決してそれは言って過ぎって事はない…、と俺は思つ。」

「えつと、後ろの…、彼女は誰さん？」

「あー…そうだ、」^{ハハハ花音。}

「はじめて花音です。」

「」^{ひつちがウチの教授で、}

「氷室です。」

「で、このひげ面なのが、葵。」

「じつも葵です。」

「じつも。」

「えっと花面説明しちゃかっていいかな？」

「はー。」

「由宇悪いけど『コーヒー』人數分頼むよ。」

「オッケー。」

つて、ここに来るのまだ3回目なんだよな…。コーヒーは何処かな…？

それから教授を交え色々話しあつた…。葵の今の心境は、自分でよく解らないそうだ。マツキーの事は綺麗だと素直に思うし、俺の事はカツコイイと素直に思えるらしい…。だけど、男と女どうちが好きかと問われると、なんとも複雑のようだ。

それから花音があの薬を投与して欲しい事を話した。話の流れからして先生も葵も、花音が薬を希望することは気付いていたみたいだ。花音が部屋に入ってきた時から、二人共そう思つてたかもしれない。

もし成功しても今の段階では戻る薬は作れてないこと…、それを花音に向かつて説明しているのだが、どうやらそれは俺に言つてるようだ…。それを先生の口から今日ハッキリ聞かされた…。

それについては俺の方がかなりショックを受けた。いや、ショックを受けたのは俺だけなのだろう…。『由宇悪い。沖縄で会つた時にちゃんと話せば良かつたんだけど、お前の事を思つと言ひ出せなくて…。』との事だ。

一分の望みを断たれた気がした…。マツキーから事前に聞いていたが、先生の口から言わるとショックだった。

マツキーが和也との別れを勧めていたのが何となく分かったような気がする…。俺はしばらく男のままらしい…。和也の事を諦めるのか…？

俺のショックを他所に話しさは変化の状態を録画させてほしいとの事を、花音に相談していたみたいだが、俺は考え方をしてて、会話

が一切入ってこなかつた。

和也との別れ…、2年間の2人の歴史…、振り返つてみるとケンカもしたけど、楽しいことの方が多かつた気がする…。和也が今の俺を受け入れるとは到底思えないし、俺だつて…、和也に抱かれるなんて想像出来ない…。いや、想像出来るけどあんまり考えたくない…。

「由宇…。」

「泣いてるの…？」

「えつ…？」

いつしか俺の頬に涙が流れてたようだ。

「大丈夫か？」

「…。」

「由宇ちょっと着いて来い。」

「…？」

先生が席を立ち、俺を着いてくるように囁つのだ。先生は隣のマウスとかいる部屋に入つていく。

「由宇…。」

「あつ、うん…。」

「マッキーに促されるまで立てないでいた。

部屋に入ると先生は椅子に座るよう勧めてる。

「期待させてちゃって悪かった。」

「いえ…。」

「ハツキijoと私もこの先、何年かかるか分からんんだ…。」

「…。」

「研究において、発見とは偶然によるものが時としてあるんだよ…。
最近それを思い知らされたばかりなんだ。」

性転換の薬の配合が、偶然出来たモノだとでもいつのか?でも“失敗作が大発明”といふことがある。”と聞いたことがある。そのことが言いたいのか?

「由宇…。」

「はい。」

「今後…、私のサポートをお願いしたいんだ。そうすれば、いつか戻れる時が来るだろ?…。」

「考えときます…。」

と言つても、選択の余地は今後の俺にはなさそうだ。

「悪かった…。」

「でも、大学には残れないんでしょう？」

「うーん。それなんだけどな……なんとか学長を騙せないかと思つてるんだ……。」

「騙す？」

「いや、だから……私の……氷室教授の知り合いで装つてだな……“私のいらない間の講義の代理に彼女を推薦します。”みたいな推薦状を書くってのはどうかな？つまりは今の姿の私なんだけど……。それなら私はここにしばらく残れるだらう。」

「そんな！バレたらどうあることですか？」

「ヤバいでなんだが……、」

「はい……、」

「由宇のお姉ちゃんはまだ向こうつか？」

「えつ？お姉ちゃん？」

俺には年の離れた姉がいるのだが、イギリスに留学中に知り合つた彼と5年前に国際結婚して、そのまま向こうに住んでいるのだ。おそらく向こうで骨を埋めるつもりだ。

「まだ、つていうか一生あつちだと思ひますけど？」

「お姉ちゃんに成り済ますなんて出来ないかな？」

「えつ？」

「確かに向こうの大学出てるよね？オックスフォードだったか、ケンブリッジだったか…？」

「なんて名前の大学か忘れちゃいましたけど、姉の学歴なら申し分ないんですか？」

「おそらく。学長なら調べるだろうからね。学長は何処の馬の骨か分からぬ奴は使わないだろ？し、ブランドに弱いから。」

「はあ…。」

なんだか変な展開になつてきただ…。先生が女のまま講義するのか…？しかも俺のお姉ちゃんなりすまして？それでいいのか？

花音への薬については山田先輩次第という事で落ち着いたようだ。それ以外にも、熱帯魚を扱うペットショップを各自廻って捜す事にして解散することとなつた。

しかし俺は、先生に呼び止められ買い物に付き合わされる羽目に…。学長に会う時のためのスーツが欲しいとのことだ。

確かに昨日買った洋服はカジュアルなものしかなく、学長の前に出るにはラフ過ぎる感じだった。とにかく学長の許可をとらなければ、研究室さえ使えなくなる可能性もあるのだ。少しでも印象が良いに越した事はない。

でも何故俺なんだ？ マッキーとなら車だつてあるだろ？ …？ 一緒にでもかまわないのでは…？

そうこうしているうちにマッキー達が帰つてしまつた。花音と葵と3人でご飯を食べに行くそうだ。俺と先生も誘つてもよくないか？

「ウチらもどつか食べ行きせん？」

「そうだね。何食べたい？」

「（）馳走してくれるんですか？」

「由宇がお金ないのは真木君から聞いてるよ。」

「ハハハ…。」

「姪っ子…、じゃなかつた。今は甥っ子だな。甥っ子払わせる気なんてないから、食べたいもの言つていいよ。」

「だったら…、東京ならではの食べ物がいいな。」

はて…？そりいえば東京ならではって何があるんだりう…深川飯とかもんじゃ焼きとかか？でも、せっかくおじつてもりうなら高いのがいいな…。

「だったら、今日は私の食べたいものでいいかな？」

「はい。」

で…、ちょっと期待と不安な気持ちの中、連れて来られたのは天ぷら屋さん…？

「(口)はなんでも美味しいんだよ。私はかき揚げが好きなんだが、由宇はどうする？東京っぽいって言えば六子天なんて東京っぽいけど。」

「どうしよう…？天ぷら屋なんてチヨーン店しか入ったことないから緊張するな…。でもどうせ叔父…、今は叔母さんだな…、叔母さんなら遠慮なく高そうなものを…、

「え～と、六子海老天丼頼んでもいいですか？」

「好きなものの頼みなさい。」

先生が頼んだのは天ぷら定食だった。

「由宇悪かったな。」

「もういいですって。それに俺がいつなつた直接の原因は、三崎の不注意なんですから……。」

「でも、謝りたいんだ……。」

「研究も……、研究も手伝いますから安心してトドこ。」

「助かるみ……。」

しづらべじて田の前にオーダーしたものが運ばれてきた。

「わ、冷めないうちに食べよつか。」

「はい。」

そして食べながら話していく……、

「せういえば、なんで今日ましまッキー達誘わなかつたの?」

「いや、由宇がトイレ行つた時に誘つたんだが、葵と用事が出来たとかで、じ飯食べたあと花音さんを送つて、どつか行くやうだよ。」

「どうか……?」

マッキーはたまに謎の行動に出るんだよな……。俺にも少しばかり話してくれればいいのに……。この間だつて三崎と一緒に買い物行つちゃつし……。

しかし、なんでマッキーの行動が気になるんだろう……?

「といひで由宇。」

「はい。」

「お姉ちゃんの学歴とか詳しく分かるかな？」

「だつたらメールして聞いておきます。高校までは俺と同じはずだし。」

「助かる。」

「いえ。」

「それで…まあ、これは聞きにくいが、彼氏はどうするつもり？」

「か…れ…、」

明日…、いや、せめて1ヶ月後の『ホールデン・ウェイーク』までに戻れる保証があるなら、コマかしながら会わずになんとかする自信があった。

だがそれが無期限の状態となると話は別だ。いつ戻れるか分からぬのに待たせるわけにはいかない。事情を話せば1・2年なら待つてくれるかもしれない。だけど現実は…、

「多分…、別れると思います。今の状態の俺があの人を幸せには出来ませんので…、」

「そつか…、」

「直接会って、事情を話したらマズイですかね？」

「うへ、うへん…。」

案の定、あまり良い反応ではなかつた。

「ですよね…。うまく別れる方法考えておきます。」

嘘をついて別れるのは辛い…。和也の事は、多分今でも好きだ…。
最後に会つたのはこつちに出てくる前の日…。その時こんな風になると
とは誰も予想出来なかつただろう。あーなんだか和也の事考
たら、研究室の時みたく涙が出てきそうだ…。
俺はそれを打ち消すように天丼を掻き込んだ。

先生は『パート』の婦人服売場へと俺を連れ出した。

「もつと安い店ありますよ？何も『パート』で買わなくともいいんじやありません？」

「まあ、一着いいのを持つてねばなんかの時に使えるだろ？」

「そうだけど…、それは先生が女の体に馴染んできた時に買った方がいいんじやないですか？」

「その時はまた買えばいいよ。」

「だから今日は安い店で買った方が…、」

「まあ、今回ほっこりでいいから。」

「はあ…、」

「何かお探しでいらっしゃいますか？」

「ああ…、えつと…、あつ、姉がリクルートっぽいースーツを探してて…。」

俺はどいつも店員に話しかけられるのは苦手だ。どいつもそれは男になつても変わつてないよつだ。それで咄嗟に先生の事を“姉”と言つてしまつた。

「それでしたらあちらの方にいきます。」

さつきから、もの凄く馬鹿丁寧な口調だ。

でもこの店員さんのお陰でスムーズに買い物が済んだ。買つにあたつて、まずは先生のスリーサイズを計つてもらつた。やつぱりサイズを計るのは、計り慣れた人にやつてもらうに限る。

先生が計つたり試着してゐる間、外で待つてゐる俺は手持ちぶたさだつた。

試着室に連れがいるとはいへ、婦人服売場に若い男がポツンと一人でいる状況だ。さつきから見られてる気がする……。変な目で見られてるんじやないかと気になり、視線をならべく下に向けていた。

「あの～？」

ん？俺か？振り向くと20代後半の綺麗なお姉さんがこちらを見ていた。店員ではなくお客様らしい……。

「俺ですか？」

「あっ、違う？しつ、失礼しました。私が好きな芸能人に似てたもので……。」

「いえ……、そうゆうの慣れてますので……。」

この間のスーパーで買物してた時と同じパターンか……？つて、視線はその類いの視線か？

「あの～、お一人じゃないですかね？」

「はあ？」

「いえ、もし一人ならお茶でも如何かと思いまして?」

「あー、えつと…、姉が中で試着とかします…、」

「今日はお付き添いでいらっしゃったのですか?」

「まあ…、」

「あのー、このあとお暇じゃないですかね?」

「えつ…、まあ…、予定は無いけど…。」

「でしたら是非お茶でも如何かです?もちろんお姉さんに聞いて頂いてからでかまいませんから!」

「はあ…。」れつて宗教の勧誘とか、なんかの営業じゃないですよね?」

「違いますよ~。」

困っていたその時、『失礼します。田丸様、中でお姉様がお呼びです。』と声をかけてくれたのだ。

「分かりました。すいません、失礼します。」

やう言つてそのお姉さんから離れようとしたらい

「すみません。」

「はい？」

「うん、これ、」

そういうながらバッグから何か出すと探している…、出てきたのは名刺入れのようだ。そして名刺を取り出し裏に何か書いている。

「これ、私の携帯電話の番号」とアドレスですのと、お暇でしたら電話でもメールでもして下さい。」

「はあ…。」

「気のない返事をしながら受け取つてしまつた。

「いつでも気軽に連絡して下さいね。」

それに会釈をしてその場を離れた。東京の女性って名刺を配るのが趣味なのか？ふとキャビンアテンダントの真下晴子を思い出した。あの子にも機内で名刺をもらつたのだ。考えてみればあの時仕事中だつたはず…。

試着室に行くとグレーのスーツを着ていた。膝が丸見えのスカートの丈だった。

「スタッフキングも買わないとダメだね。」

「それは面倒臭いな…。」

「結構スタッフキングつて暖かいよ…、じゃなくつて、暖かいつて言うじゃん！」

さつきから一人の会話を怪訝そうと、この店員さんは聞いていたのだ。実はさつきもサイズを計る際、俺がいるのに先生が脱ぎ始めてしまい、「弟さんは外で待つようお願い出来ますか?」などと言われてしましたのだ。

「ストッキング履くのって面倒じゃない?」

「えーと、お客様は今まで『履いたことなかつたのですか?』

そう言われて、やつと先生も気が付いたようで、

「今まで縁がなかつたんですよ。」

「そうですか。」

まあ、店員もさう答えるしかリアクションのしようがないよな…。

「由宇はさつきの紐色」と、このグレーだったらどうがいい?」

「断然こいつだね。」

「じゃ、これ下を。」

「ありがとうございます。」

それであつさつ置つてしまつたのだ。意見があつたのだろうか?先生が着替えるので、また外に出るとさつきの女性がまだいた。

「あの~。」

「うわー！？なつ、なんですか？」

「お名前聞いてもいいですか？」

「これって逆ナンだよね…？いくら綺麗系のお姉さんでも、ちょっと恐いな…。

「田丸です。すいませんが今日は連れがいるので…。」

「はい。では連絡お待ちしますので。」

そう言いつと立ち去ってしまった。逆ナンってすいこな…。って、あの人だけ特別なのか…？顔立ちが芸能人に似てるっていうのも困りもんだな…。

043 焦り。

「もしもし…？」

「…。」

「もしもし…、」

電話の相手は和也だった。かかってきた電話に受話ボタンを押し
たまではよかつたが、何をどう言つたらいいか分からぬ…。それ
で一言も言わずに切つてしまつたのだ。

切つた電話はもう一度鳴つた。今度は受話ボタンじやなく切る方
のボタンを押す。おそらく向こうには『現在お客様の都合により出
ることが出来ません。…』と無機質な機械の案内が流れてゐるはず
。

しかし、携帯電話は着信音を再度鳴らして存在をアピールしてゐる。
俺は再度同じ行動を繰り返した。俺は和也に對して、どう対応した
らよいのだろう…？

おそらく一番楽なのはメールで別れを告げる事…。

しかも一方的に…。

今の顔が、元の顔の面影がないなら会つて『由宇の新しい彼氏で
す。』とか言って、最悪一発殴られてもいいかと思つけど…、顔で
バレる可能性もある。

それに和也に会つて『由宇を諦めて下さい。』とか言つたら、俺
が泣いてしまうかもしない…。

やつぱりメールか？

また着信音がなるがディスプレイに表示された名前は、

真下晴子。

「もしもし？」

「『』無沙汰。」

「『』無沙汰。』じゃないわよー連絡くれるかと思って期待して待つてたのに、全然音沙汰ないじゃん！まさかまだ沖縄にいるわけじゃないでしょ？」

「あー、ちゅうとおしゃべりね。」

「そう…。あれっー？何か元気無いね？沖縄行つて旅行疲れしたとか？」

「いや…、疲れとかじゃないよ。」

「そう…、疲れてないんだつたら夕方から会わない？もう東京にいるんでしょ？」

「あー…、」

「そうだ、和也のことを忘れるためにも気分転換に、遊ぶのもいいかも。」

「何処連れて行つてくれるの？」

「会つてくれる？」

なんだか妙にハイテンションだな…？

「ああ。」

「場所は会つまでに決めとくべしすぐに出れる？」

「外出中なんだ。だから直接向かうから大丈夫だよ。何処に何時に
行けばいい？あつ、田舎者だから判り易いことにしてくれ。」

「だったらハチ公前にする？それなら知ってるでしょ？」

「そうだね…。」

一抹の不安はあった。あんなとこ行つたら、逆ナン天国じゃない
のか？でも時間も遅いし暗くなるだらうから平気かな…。それに知
つてる場所なんて少ない。唯一待ち合わせで行けそうな場所のよう
な気さえする。俺は東京に出て来てまだ日が浅いのだ。

そして渋谷で夕方6時に待ち合わせすることになった。

先生とは靴屋さんで買い物をしたあと別れた。洋服を買つたあと靴
屋にも寄つて、パンプスとスニーカーを買つている。買い物すること
でストレスを解消する○一さんみたいだ。昨日今日でいくら使つた
のだろう？

待ち合わせの時間に遅れたのは俺の方だ。とこよりはわざと遅

れて行つた。正直真下さんをこんな人ゴミの中から見つけるのは大変そうに思えたからだ。顔を忘れたわけではないが、向こうが探してくれた方が早いに決まつてゐる。一応『10分くらい遅れる。』とメールだけはしておいた。

予想を超える数の人…。酸欠になりそうだな…。駅から出てハチ公の方に向かうと、あつさり俺を見つけてくれた真下さんが小さく手を振つてくれた。

「久しぶり…、」

「久しぶり。」

「なんか顔やつれてる?それより顔変わつた?」

「えつ?」

「なんかあつた?失恋したとか?」

「してねえし!顔が変わるわけないじゃん!」

やつれてる?気付かなかつた…。それにしても『失恋したとか?』つて、今の俺には嫌な響きの言葉だ。

「そつかな…?この間会つた時より似てる気がするけど…、そんなわけないか?」

「行く場所決めたの?」

「ん~、着いてからのお楽しみ!」

「ふ～ん。」

「うつまつて俺の腕に絡んできた。

「うよーと真下わざー。」

「何?」

「何つて…。」

「こーじゅん! 腕組むへりご。それよつ『真下わざ』は上めてくれない?」

「あ…、だったらなんて呼んだらいい?」

「名前で呼んでよー。前の名前は晴子だよ。ちゃんと覚えてくれてた?」

「もうひるん覚えてたよ。」

でも本当はわっさの着信の時にディスプレイに表示されたからで、真トさんの名前など気にもとめくなかった…。

「本当に～?まあ、いいや、着いたばかりで悪いけどまた電車で移動ね。」

「だったらなんで待ち合わせひじしたの?」

「それは由宇君が田舎者だからー。」

そう言つて彼女は笑つてゐる。確かにわざは自分でそう言つたが、あれは自虐的に言つからいいのであって、他人に言われると少しカチンとくるものだ。でも確かにここへくらいしか分からないから仕方ないのだが…。

電車は乗り継いで芝公園に着いた。東京に来てから一番東京湾に近付いたような気がする。羽田空港も埋め立て地だから元は東京湾なのだろうが、海つて感じは一切しないのだ。

「どうする？お台場に行く？それとも今このホテルで食事する？それとも夜景見えて綺麗な時間だよ？」

「お台場だとまた移動でしょ？」

「そうね。」

「ここで降りたつてことは食事したいんじゃないの？」

「うーん、そうかな。」

「だったら、そうしようよ。」

「うん。」

お台場に行きたかつたら直接電車で行つてはづ…、何もこんなところで降りる必要はないのだ。

そしてよく来ているのかエレベーターで25階に上がり、その中の鉄板焼きレストランと書かれているステーキ屋に入つていく。

「晴子さん。」

「『せん。』は付けなくていいからーで、何?」

呼び捨て?まつ、本人がいいならいいか…。

「俺マジで金無いですよー。」

「そんな事心配しないでいいからー。」

「だつて高めにいじやないですか?」

「いいから、いいから。」

せめて割り勘にしようと思っていたが、せっかくなんで「馳走になることにした。席に案内され上着を店員に預けた真下さんの胸元は俺にアピールするかのような服だ。ただ残念なのは胸のサイズ…、

……残念?

いやいや、残念って俺は何を考えてんだ?それは男の発想だろー?
えつ?何だ?うわつ?俺って男になつてから何日だ?

「どうした?」

「○×…、なつ、なんでもないよ…。」

「せひ、頼むー。」

「ひひ、うそ…。」

はつあいつ言ひてこれってやばい事態じゃないのか?思考までも男になってきたのか?今後俺はどうなっちゃうんだ…?

044 晴子の将来

鉄板焼きの注文は晴子と同じでいいからと任せた。松坂、神戸、米沢…オージーと値段もピンキリだが、やつぱりおじってもらおうとしては値段を気にしてしまつ。叔父である先生におじいてもらつのはわけが違う。

食事やワインの味は正直よく分からなかつた。考え方をしていたのもあるだろ?…。

「ねえ、由宇?」

「…。」

「由宇?..」

「ん?あつ、何?」

「もうー私の話、全然聞いてないでしょー!」

「ん?あつ、ゴメン。なんだっけ?」

食事中はそんな感じだった。

店から見える夜景は晴子の言つ通りとても綺麗で、田舎にいた頃に思い描いていたザ・東京が目の前に広がっているのだ。

「夜景本当に綺麗だね。」

「でしょーーあそここヒビルが立つ前はもつとよかつたんだからー。」

「 もう…。」

「 ねえ、由宇…。」

「 ん?」

「 実はやつせ、上の部屋空いてるか確認してもらつたんだ。」

「 もう…。」

『 やつせ』とは、晴子が食事が終わりトイレに行つた時の事だろ
う…。

「 でね。空いてるみたいなの…。」

ん…?ん―――部屋?何だつて?部屋……つて、やつぱりあれ
か?あれだよな?

「 少し休んでいいかい?」

「 うひ…、うん。」

確かに男には“据え膳食わぬは男の恥”つていつ言葉があつたよな
…。誘つてる女性に恥かかせたらダメだよな…。

それ以前にキャビンアテンダントだけあつてお洒落に気を使つて、前に会つた時より魅力的に見えるし!今日晴子が着てきた服つて彼女にとつて勝負服だつたりして?

「 乗り気じゃない?」

「とんでもない。是非ゆづくら休んでいきましょー。」

「うん…。じゃ、行くつかー。」

俺つて節操ないな…、誰でもいいのか…？マッキーに美穂、それに晴子…。いや、美穂の場合は不可抗力…、なんて言い訳か…。

なんだ俺…。

一つ言える事…、

それはセックスが好きとこひとつだ。いや…、絶対に嫌いじゃない。

横にいる晴子の寝顔は可愛いと素直に思える。

晴子に会つたのは…、沖縄に行つた機内と、その夜のホテルのレストラン…、それと今日だ。

デートしたのは今日が初めて…、それなのにお互い裸になつて同

じベッドの上で絡み合つた。

指で晴子の髪をクルッと巻いて遊んでみる。ついでテグシの要領で指を通すとサラサラした髪で綺麗だった…。

「ねえ由宇…、」

「ん? ゴメン…起しちゃつたね。」

「寝ちゃつてた…?」

「そうだね。」

「由宇つてすいこね…、女のツボ凄い知ってるみたい…。」

そりや…、元女だからある程度は知ってるつもりだし、マッキーのレクチャーもよかつたってことになるのかな…?

「Hッチ好きなの?」

「…?」

「いや…、深い意味はないけど…。」

「ちよつと待つて…言つておきますけど私は誰とでも寝る女じやないわよー…由宇が特別なだけ…、私の…、理想の男性っていうか…、

「ゴメンね。逆に誰とでも寝ちゃう男みたいで…、付き合つてる子だつて俺こなーるの…。」

「そんなつもりで言つたんじゃなくて……ねえ、」

「ん?」

「また私と会つてくれる?」んな私じゃ嫌かな?」

「俺…、金ないから、晴子の負担になっちゃうし…。」

「もう!…それなら平氣だつて!あんまり言いたくないけど、これでも一応お嬢様なんだから!…社会人になって親のすねかじつてるみたいで嫌だけど、カードもある程度の額まで使っていいって言われてるし…。」

「お嬢様なんだ…?」

「やつ…、一人娘だから最近はつるをへつて…。」

「つるを…?」

「お見合にしらひてや…、しかも政略的な感じするし…。」

「やつか…。でも若こママつてのもいいじゃん!…」

「だつて…、持つてくる見合に写真見たらオジサンばつかなんだもん…。」

「オジサンか…、年上ダメなの?」

「別に…、由宇みたいに格好良ければ年上でもいいけど、写真見ただけでオジサン臭るのは嫌だよ。」

オジサン臭つて…いくつになつたら出るの？

「彼女と別れて私と付き合つてなんて言わないから、たまに会つてくれるだけでいいから…、ねつーお願い！」

「分かつたつて…。」

「本当に？」

俺は頷いて見せた。そして彼女は嬉しそうな微笑みを見せていた。

「ねえ、もう一回呼んでくれない？」

「何を？」

「さつき私の事名前で呼んでくれたでしょ？」

「やうだっけ？」

それはそつちがそう呼べって言つたからでしょ！

「うん言つた！だからもう一回呼んでよ。」

面倒臭つ！こりゆう事言わると“女つてウザ”つて男は思つんだな…、でも俺も今の晴子みたいに『私のこと好き？』的なこと聞いたことあつたな…。

「なあ、」

「何?」

「晴子の親父って何してるの?」

ただ名前を呼ぶのが嫌で質問をしてみた。

「詳しく述べは分からぬけど社長みたい。建築業で一応従業員何十人も抱えてるみたいよ。」

「そつか…、そうだわつき一人娘つていつたよね?」

「うん…、そうだけど?」

「じゃ、晴子と結婚する人は会社継ぐんだ?」

「そつなるのかな…? 何? 由宇が私と結婚してくれるの?」

「俺まだハタチだよ? それにまだ学生だし!」

「我なら待つわよ?」

「さつきの『たまに会つて』からかなり飛躍したね?」

「だね。」

そして二人は同時に笑いあつた。

この4つ年以上のお姉さんはあと何年後かには、誰かと結婚させられちゃうだろ。俺とは恋愛ゴッコというか、単なる思い出作りなんだろうな…、『あの時付き合つてた男はいい男だったな…。』的な…。政略的な見合い結婚させられたんじゃ可哀相だとは思つ。思

うけど今の俺には何も出来ない……。

いや、彼女がたまに会つて食事してエッチするので満足ならそれも有りかもしれない……。彼女の方が年下の俺の事を“遊び”と割り切つてるなら、今の俺にとっても楽しく遊べそうな相手に思えてきたのだ。

俺は静かに鍵を開け音のしないように中に入った。そして何事もなかつたようにソファーで寝た振りをしてマッキーの起きてくるのを待つたのだ。

しかしいくら待ってもマッキーは寝室から出てこない。いつもなら起きててもおかしくない時間なのに……？やつこいつしてのうち俺は本気で寝てしまった。

どのくらい寝てたのだろう……？俺は携帯電話の着信音で起こされた。

寝ぼけながらもディスプレイを見ると真木翼と表示されている。昨日も和也から電話があつて過剰反応してしまってる。和也からだつたら出づらいし……。だからディスプレイで誰からの着信か、確認してしまつのだ。

「おはようー起きてた？」

「うん……寝てた……」

なんでマッキーから電話？部屋にいなかつたのか？

「また無断で外泊して悪かったね。私達は直接研究室行くから、由宇も来るなら来なよ。」

「なつ……、」

突っ込み所満載だ。何から聞くか……？それにしてもまた無断外泊

か…。

「私達って誰とこるんだよ?」

「あー、えーと…、葵と一緒にいる。」

「あー葵ね。」

ん? んつ——? 葵のところ泊まったのか? 昨日からずっと一緒に
つたつて事か? 頭の中で色々な事を想像しだした…、まさかあんな
ことやそんなことしてないよな…?

「どうする? 由宇は来る?」

「あー、今日はバスしていいかな?」

寝不足だった。理由は明け方近くまで晴子と絡みあってたからに
外ならない。

「分かった。無断外泊してゴメンね。今度はちゃんと連絡するから
さ。」

いや、お互い様だから別にいいけど…。

「あー、そうだ。今日なんか予定あるの?」

「いや、特にないけど…、どうした?」

「そしたらセー、前に言つてたホストの件なんだけど、メールして
おいたら昨日返信があつて『面接しに寄越して!』だつてさ。履歴

書類ひなこし生活するのにお金無いんだからあるでしょ?」

「うー、うふ。」

仕方ないよな…。生活のためだし…、と自分を納得をせんみた。

「それでー、葵もやるつて三崎から4時頃マンションに来てよ。
迎えに行へがり。」

「マジ?葵もやるつて?」

「やめ氣みたいよ。」

「分かった。」

仲間がいるのは安心だ。

「そんじゃ夕方ね。」

やつぱり葵も履歴書の性別の欄でひつかつてるんだな…。って
いうかマツキーも三崎もこのままだつたら水商売しかないか?でも
マツキーは貯金あるつて言つてたし、三崎は実家暮らしだから当分
は平氣か?

それ考えたら先生はズルイな…。人の名前を名乗つたりやつなんて
…、間違えば犯罪だよ。

それから俺は無人のベッドに移つて一度寝ることとした。

寝ていたのだが…、またも携帯電話の着信音で起こそれた。

「うるさいな……」「

ディスプレイには葵ひかりの名前だ。時刻は12時ちょうど前。
2時間位は寝たらしい。

「大変だよ！」

「ふあーっ！まだ眠いんだけど？何が大変なの？」

「小松君！」

「はあ？」

「だから小松君来たよ！今マッキーが外に連れ出したとこー。」

「えっ！？今、小松って言つた？」

「そうだよ。由宇の彼氏の小松って名乗る人が来たんだよ！」

和也だ…。でもなんで？確か研修中のはず…？抜け出した？サボ
り？

「由宇聞いてるの？」

「ん？ああ…、で、どう、どうなってるの？何しに来たつて？」

「その彼氏が言うには『事務所に聞いたり、携帯電話の落とし物の届けは無い。』って言われたらしくってさ、それで研究室まで來たみたい。」「

「それで、なんだつて？」

「始めは『田丸さんいますか?』って言われて、それに『今日は休んでます。』って説明したら、住んでる場所聞かれた。」

「そんで?」

それからマッキーが上手く知らないどこまかしたみたいだ。それに知つても教えられないと言つたらしい。

本人の承諾なしに教えてストーカーだつたら困るから…。それを言つと、住所を知つてるとと思つたのか、一緒に写つてる写メを見せたり携帯電話の電話番号やメールアドレスを見せたりしだしたらしい。が、マッキーは『別れた彼氏がストーカーつて話しさよくある話だから、尚更もし知つても教えることは出来ません。』と突っ返したみたいだ。

それで押し問答になつた末、今はマッキーが廊下に連れ出したらしい。

「由宇どひすゐ?..」

「じつかるつて言つたつて…。」

本当にどひすゐ? マッキーは今どう対処してくれてるんだ?

046 冷静？（前書き）

「」無沙汰します。えーと、作者も設定を思い出しながら久々に書いています。多少表現が違つたりするかもしませんが、その辺は大目にみて下さい。

046 冷静？

葵には『何かあつたら連絡して…』と言ひて電話を切つた。

どーしよう…?どーする…?どーしたらいい?俺はブチパニックに陥つてるようだ。待て待て待て…、冷静に、冷静になるんだ…。

俺も学校に行く?いや、どの面をばげて…?いや、待てよ…、薄く化粧して女の時に着てた服着て伊達眼鏡してニット帽被つて、マフラーしてマスクしてけば……、

風邪引いたとか言ひて「まかせないかな…?

声か…?風邪声つてことに出来ないか…?

よく分からぬいけど、一応一通り集めてみた…。

そして……、スカートのウエストが入らない…、とりあえずワンピースに変更して…、すね毛が…、確か黒のストッキングどつかにあつたはず…。それにダウンを羽織つて…、

出来上がつた自分を鏡で確認してみた…、

まあ、見れなくはないけど、どうやっても昔の俺には遠い感じ…。今の俺つて意外と肩とかがつちりしてて…、男が初めて女装に挑戦しましたって感じに見える…。

「これでどうあえずテレビ電話で葵に電話してみた。

「どう?なんか進展あった?」

「今んとこなにかど…、それよりそれって口紅してるので?..」

「あー、どう?女だった頃みたいな感じに見える?..」

やつ言つて携帯電話をテーブルに置き、全身が映るであろうと下がつて葵に見せてみた。

「ふー…、テレビ電話なら」まかせるかもしないけど…、実際会うのは無理じやない?っていうか声がダメだろ?」「

「やつはダメか…?いや、そしたら風邪ひいた体で、声出れないで、テレビ電話で筆談だつたら?」

「由宇…、諦めろ。」

「ウッ、ダメか…。」

冷静になつて考えたつもりが、あつさつ葵に却下された…。

「やつじえぱ先生は?」

「みんなのお弁当買に行ってくれてる。」

「やつか…。みんな…、三崎は？三崎は今日は来てる？」

「あー、三崎なら今日も来てない。」

「なんで？」

「そんなの聞かれても連絡ないから分からないよ。」

三崎は向やつてるんだ？俺と一緒に今年から研究メンバーになつたはずなのに…。一日連續でサボりか？まさかまたナンパでもされたとか？

「せつか…。葵さ…、廊下で何話してんか聞こえないの？」

「無理。聞くえないよ。近くにいるかさえわかんないもん…」

「マジかよ…、あー、なんかどーすりやいーんだ？」

「由宇さ…」

「ん？」

「ほんなの俺が聞くのはアレだけビ、彼氏の事ビツツルつもつだつたの？」

「えつ…、それは…、」

「昨日先生言つてたじやん！『現段階では元に戻る薬は出来てない。

『つてー。』

「うん。」

薬が出来でないことを言わると、暗い気持ちになる。

「昨日は由宇が泣いたの見て、こっちが動搖しちゃったよ。由宇って、あーゆう時そつとしといて欲しい人？それともカラオケとかで騒いで気分転換したい人？」

「どうだろ……？」

実際には晴子に会つて、現実逃避してたわけだから後者寄りかも
しない。ん…？

「昨日は氣を使つて、そつとしておこしてくれたの？」

「あー、そうだね。マッキーはそのつもりだったのかもね。」

マッキー…。本当、どう対応してるんだろ…。

「なあ、由宇？」

「ん？」

「別れるつもり無いの？」

「…………、そのつもりだけビ、」

「だったら…、」

「どう切り出していいか分かんないんだよ！」

少し喰い気味に怒鳴ってしまった。

「それに先生は、極力外部に情報を漏らしたくないみたいだし……」

「由宇……」

「だから、和也にも……、彼氏にも言わないで済むならそうして欲しいみたいで……、今の……、男になつた俺じや直接会えないから、メールで……、メールで別れを伝えよつて思つてはいたんだ……。」

「うん……、」

「けど、東京出で来る前日まで仲良かつたのに、10日も経たないうちに“あんたの事、嫌いになつたから別れて！”とか“好きな人が出来たから別れて！”って言つたら変じやない？それで納得するとは思えないし……。」

「……やつ、やうだよね。」

「葵や……、」

「何？」

「新しい彼氏のフリして、和也に一発殴られてきてよ。」

「えつ！？」

「冗談だよ。冗談…」

はあ・・・。深いため息をついていた。葵との電話を切つて着替え直すことにしたのだが…、
それにしてもあらためて見ると今の俺の格好はひどいな。愛ちゃんにも負けてるし、花音にだって負けてる…。

ワンピースを脱ぎ、ストッキングも脱いだとソファで電話がかかってきた。进展があったのかと思い急いで携帯電話を取ると、そこには三崎同と表示されていた。三崎君?

「由宇?」

「あっ、うん…。」

あれ?名前で呼んだ?しかも呼び捨て?

前回三崎と話したのは…、確かに、沖縄行く前か?その時は『田丸さん』って呼んでくれたよ?つな…?

「今、研究室ですか?」

「いや、違つけど…、どうした?」

「あの、これからテレビ出るから見てもいいません?」

「はあ?」

三崎は何を言つ出したんだ?もしかして三崎つて変な子?妄想癖

があるとか？

「本当ですって！有名人のそっくりさんコーナーで出るから見ててね！」

「そり…。」

ん…？えつ？

「呼ばれたから行くね！絶対見てね！じゃ、また後で…」

「みさり…、」

ツーツーツー…。やばっ！出演を止めさせようと思つたが電話を切られてしまつた。すぐ電話をしてみるが、本番に向けて電源を落としたみたいで、無機質な“電源が入つてないか電波の届かない…”などとアナウンスが流れてる。

まあ、女として出る分には問題ないか…？“薬だけでの性転換に成功した元男です”とはわざわざ自分から言わないだろ？…。

そして一応、葵に“三崎から連絡があつて、テレビのそっくりさんコーナーに出るらしいから見て！”と素早くメールをしておいた。
俺は着替えて居間へ移動し、テレビの電源をオンにしてチャンネルを合わせた。おそらく眞間の国民的バラエティー番組に違いない。春休み特別企画のワントコーナーに出るのだろ？
嫌な方向にいかなければよいのだが…。

046 冷静？（後書き）

読んで頂き誠にありがとうございます。感想を頂ければ作者のモチベーションも上がりますので、コメント等して頂けると有り難いです。

春休み特別企画有名人そつくりわんショーやばじん進み3組目の出演が終わった。『はい次の方どうぞ!』そつ回会者が言つと、横のドアから出てきたのは三崎の母親だった。

まつたく、あのオバサンは…、

口止めしたんだから、こういうた類いの番組も普通は出ないだろーでも、口止めしたから平氣だよな…？あの薬の事、話さないよな…？

「お前とどちらから来たか教えて下せ。」

「えっと…、中野区から来ました三崎幸子です。」

「中野じゃすぐですね。誰が誰に似てますか？」

「えーと、息子が…、じゃなくて娘がグラビアアイドルの〇〇さん
に似ています。」

『息子…、』だなんて危ないな…、

『息子と娘間違えちゃったよ。御自分のお子さんなんですかい、息子と娘を間違えないで下さいよ~。』

『ははは…。』

三崎の母親は顔を引き攣らせながら笑っていた。そういう俺も弱冠引き攣り気味だ。

「はい。では、本人の登場です。どうぞ！」

そして効果音のあとにカーテンが開き、中から三崎君本人が出てきた。テレビの中の三崎の服装は、胸の谷間が強調されミニスカートに生足といった実にセクシーな出で立ちだった。一応ダウンジャケットを羽織つてロングブーツだが、外に出たら寒そうだ。評価する立場のタレントから“オー！”と歓声があがり、“似てる～！”の声が客席からも出てる。で、結局満場一致で“そつくり”の札があがり熱海温泉ペア宿泊券をゲットしたのだ。その間三崎本人はハニカミ笑いだけで、一言も話せないでいた。緊張してるのか？

「でも似てますね～。」

これにも笑いながら軽く2度頷くだけ。

「よく似てるって言われるでしょ？」

「はっ、はい…。」

喋った！しかも嬉しそうに笑ってる。でも、もう喋んなくていいから！

「誰か伝えたい人いますか？」

「えっと…、じゃあ…、由宇君に…、」

はあ？俺？

「じゃ、そのコウ君にブラン管を通してメッシュージを送りたい。」

「はい。えっと…、由宇、今度デートして貰いたい…お願いします。

「

なつ…何…？…全国ネットで何そんな事言つてるんだ！？

「おー！若いつていいですねー。全国ネットでデートのお誘いとは…。」

「すっ、すいません…。ダメでしたか？」

「いえいえ、いいですよ～。はい、ではコウ君これ見てたら今度デートしてあげてね～。」

それに笑顔で応えてる。

「それにしても本当に似てるよね～。本人に会わせてみたいです。」

「ははは…。」

「はい、ありがとうございました。では次の方どうぞー。」

それで三崎親子は舞台上手くさがつていつた。

一先ずは何もなくてよかつた…。

でもこのトレビ出演が、三崎にとって、とんでもない火種となつ

て燃り始めるのだ。でもそれはまだ先の話…。

三崎のテレビ出演を見届け、俺は出かける事にした。向かう先は大学で、和也に会つためだ。

自分の中で何かが弾けた感じだった。三崎が今の自分の姿をテレビで全国に晒しているのに、俺が和也に一人くらいに今の俺の状況を打ち明けられないってもいかがな物のか？そうゆう気持ちになつていたのだ。ある意味三崎に勇気をもらつた感じだった。

先生には部外者には極力漏らさないように言われたが、俺は和也に全部話すつもりだ。そうすれば和也も納得してくれるだろう。いや、納得するように話さなければダメだ。

直接本人に本当の事を言つて、自分の本当の気持ちにケリを付けていたのだ。

俺の本当の気持ち…、

本当の事を言えば別れたくない。元に戻る薬が出来るまで、待つていて欲しい…、それが本音だ。でもそれがいつ出来るか分からぬのに、待つてくれる男なんていないだろ…。

何年先になることやら分からぬ…、明日出来るかもしれないし、50年経つても出来てないかもしねり。

せめて3年待つてくれないかな…？

そう思つたりもした…、いや…、でも3年後に元に戻る薬が出来る保証なんて全然無い…。

この先和也にもきっとイイ人が現れるだろつし…。3年も強要出来ない…。和也には幸せになつて欲しかつた。

だから好きだけどサヨナラ…。

とにかく色々な想いにケリをつけたいのだ。

それに今の俺は…、今の俺は、既に他の子とエッチをしている。マッキー、美穂、それに晴子…。しかもその誰とも付き合つてるわけではなく…、本気でもない相手…。流れつていうか勢いつていうか…、まあ、そんなのなんの言い訳にもならないけど…。

『よおーしー全ては研究室に着いてからだ！待つてろ和也ー』

そう思いつつ大学に向かうのであつた…、

047 火種（後書き）

どうも作者の優楽です。先日久々の投稿だったのですが、結構読んで頂いたみたいで嬉しかつたです。あと、早速コメント頂けて有り難かつたです。投稿していて読者から何も反応がないのは、やつぱり作者側はつまらないもの……。実際他の作品でも“この続きを読みたいな”と思う未完物のが多々あります。私が“小説家になろう”を見つけたきっかけの作品も、出会った時には既に最終投稿日から何ヶ月か経つてました。たまには感想コメントが欲しいと思う作者でしたm(—)m

048 予想外の発言

中へ入るとそこには先生だけだった。

「おー、由宇。どうした？今日は来ないって聞いてたけど？」

「あー…、うふ。えーっと…、気が変わつて出てきました。」

「わー。」

「はー…、あのー、とにかくみんなは？」

「みんな？あー、葵君は友達から電話があつて『ちょっと出て来ます。』って出ていったきりだし、真木君は帰つて来た時に居なかつたし、三崎君は…、」

「マックキーまだ帰つてきてないんですか！？」

「ん、ああ…、そうだね…。」

始めて葵から電話がかかってきてから、かなり時間が経つてゐる…、あれからマックキーは帰つてきてないといふことなのか…？

「葵は？葵はどう行くとか言つてませんでした？」

「ん…、あ…、駅に友達を迎えて行くとかなんとか…、」

友達…？

葵の交遊関係なんか知らないが、今の姿になつてから会える友達なんか限られるだろう。いや、寧ろゼロに近いはず……、葵の場合は顔に多少面影が残つてるもの、今の体はがつちりして以前の葵と全然違うのだ。葵は誰に会いに行つたんだ？

俺が知つてる範囲で考えられる人は、前に会い行くとか言つてた地元の子くらいだが……。そういえば結局あの時会つたのか？ただ遠くから見ただけってことも考えられるよな……。それにあの時“女性に興味がわからなくなつた”的な事を言つてたような……。

いやいや……そもそも葵の事を性同一性障害だと知つてた人間はいたのだろうか……？

いや、そんな事より今は和也の方だ。葵に電話して確認してみるか？ん……待てよ、俺は駅からここまで歩いて來たが、葵とはすれ違わなかつた……。葵はメインのルート以外を通つたのか……？

そうだ！葵じゃなくてマッキーに連絡を……、そう思つたところで先生が話し掛けてきた。

「ところで由宇は、お昼ご飯食べた？」

「いえ……」

「じゃ、これ真木君と葵君の分で買つてきたんだが、よかつたら食べな。」

俺が色々考へてるのとは裏腹に、先生は呑気に弁当を勧めてきた。

「えつ……でも、これは一人の分じゃ……」

「二人が来たら、買いに行かせればいいさ。それに帰つてきた頃に

は冷めて美味くないだろ?」

「アッ…、そうだけじ…、」

落ち着いて、「飯を食べる場合ではないのだが、無下にも断れず食べることになってしまった。

まだ和也は東京に居るだらうか?今日は研修ズル休みだらうし…、会社は平氣かな…。

マッキーだつて和也[どうなつたか連絡くれてもいいだろ?]。それともまだ一緒にいるのか?

ハア・・・・、

なんだか考え過ぎてタメ息が出た…。和也に俺の現状を全部話そ
うと意気込んできたのに本人はいないし…。

いくら待つても葵もマッキーも帰つてこないし、携帯電話も一切
繋がらなかつた…。

「私は」のあと「行」つと思つてこりがあるんだが、よかつた
ら付き合つてもいいかな?」

「えつ?あー…、そのー…、」

「なにか予定ある?」

「えつ?」

「…?」

和也に話す事を、先生には言わずにおりうと思つていいたが、話してみようかな？和也に全て話す事を了承してくれるといいのだが…。でも「」の前みたいに“極力外部秘…”って言わる可能性もあるよな…。

「実はマジキーに急用があつて…、」

迷つた揚句和也に話そうとしている事を飲み込んでしまつた…。

「ん…？真木君とは一緒に住んでるんだり？家に帰つてからじゅダメなの？」

「まつ…、まあ…、はい。急用で…、」

「そつか。」

「ヒルで、行きたい場所つてどいですか？」

「んつ…、いや買物にな…、」

「またですか？今度は向を聞くつもつですか？」

「化粧品を…、」

「けつ、化粧品…」

なんか少し呆れてきた。なんか女になつたのを楽しんでいるよつな…、

ん…？待てよ…、

そもそも研究を始めたのは自分のため？元々そっち系の人ってことか…？でもバツ2で子有りだよな…？どっちかといえば普通に女性が好きなノーマルな人に分類されるはず…。バイセクシャル？

「いや、ほら、大人の女性がすっぴんで出歩くのも変だろ？」

「まあ…確かに。」

「この間スースー買いに行つた時だつて『ストッキング履いたことない。』って言つたら、天然記念物でもみるような目で店員さんに見られてたし。由宇が化粧品を適当に見繕つてくれれば助かるんだが…、」

「んー…、だつたら、デパートの1階の化粧品売場のお姉さんに教えてもらつてのはどうですか？結構しつかり教えてくれるし、1品2品買えば更に丁寧に教えてくれますよ。」

「うーん。でもああゆうところに私みたいな化粧素人が行つたら力モにされないか？どんどん買わされて…、」

「うーん…、俺が女だつた頃は、化粧つ気がなかつたからな…、そうだ！花音の勤め先のママに教えてもらつていうのは？」

「花音の勤め先つて…、ニユーハーフの店じゃないのか？」

「そうですよ。」

「『『そうですよ。』つて…、』

「その辺の女性より化粧もお洒落も敏感ですよ。それにママさんは、マッキーの昔からの友達で今のウチらの事情も知ってるし、キレイ系で化粧も上手だし。」

「なつ、なんだって？今なんて言つた？」

「んつ？なんかマズイ事言つたかな…？そう思ひくらい先生は驚いた声を出した。“事情を知つてる”つてのがまずかったのか？

「いや…、花音の話だつて一応は話しておかなきゃいけない人ですし…」

「ん…、まあ…、そり…、そうだけど…、」

「それ」マッキーが女になつてから何かとお世話になつてます。彼女がいなかつたらマッキーだつて苦労してたはず…。」

「わつ、分かつたよ由宇。その人はウチらの…、なんて言つから理解者と考えていいいのかな？」

「まあ…、広い意味では多分そうです。それにもつと言えば俺の恋人にだつて、ちゃんと説明したいですよ…、」

「由宇…、」

「先生だつて、ウチの親に説明してくれてもいいんじやありません？」

「うう…、」

「お姉ちゃんの名前も借りて騙るわけですし……だから……」

なんか分からぬけど、いつの間にか不満をぶちまけるような形で勢いよく喋つていた。

「由宇。」

「だから……」

「由宇……」

「えつ？」

2度目にな前を呼ばれた時は、先生の声がかなり大きくて少しひっくりしてしまった。

見上げると、苦虫を潰したようなひどい表情を先生はしていた。
そして、

「悪かった。」

「えつと……そんなつもつじや……」

「本当にすまない……。由宇がそんなに精神的に追い込まれてゐるとは思わなかつたから……」

年上である先生に頭を下げさせてしまつた俺は、なんともバツが悪かつた。謝つてもらいたいと思つて言つたわけじゃないのだ。

それに俺が精神的に追い込まれてゐるのはどうなのだろうか?
他人からはそう見えるのか?

「みんなに本当の事を話さう。」

話す？しかもみんなって…？誰に…？和也？お母さん？洋長？色んな事を考えて、返事を出来ないまま先生を見てると、

「薬の事を世間に発表しよう。」

「えつ？えーーーつーー？」

思わず大声で『えーーーつーー』と言わずにはいられないなくなりふな意外な発言だった！

049 口譜(前書き)

今回由宇は登場しません。

一方その頃、学校内の駐車場では…、

「だから、それが事実なんですって！」

「つていうか、さっきから俺の事、馬鹿にしてるだろ?」

「してませんよ。」

「第一っから本当にそんな薬が作れたのかよ…？それに大学教授ともあろう人が、そんな研究するなんて考えられない！」

「うーん、いや、元々は海洋生物の性転換を研究していくですね…、えーと、どうやつたら信じてもらえるんですか？」

「『どうやつたら』って…、だったら証拠…、証拠見せて下さ…よーその…、性別が変わつたつていつ…、」

「『証拠』って言つてもな…、」

「ほらー！そんなの信じろって方が可笑しいだろー！」

「あーそうだ！だったら私の運転免許証と学生証見てみます？[写真]に面影残ってると思うんですが…、葵も今学生証持つてる？」

「えつ、あー、うん。あるある。」

葵が電話で呼び出された相手…、そう、それは真木翼だった。『先

生に私からの電話つてバレないよう上手く言つて、車まで来てくれ!』とでも言つたのだろう。だから葵は駅に向かうことはなく、

当然学校から駅までの道で由宇とすれ違わなかつたのだ。

それで今3人がいるのは愛ちゃんの車の中。

「はい。こっちが免許で、こっちが学生証。」

和也はそれらを受け取りマジマジと写真と本人を比較し始めた。

「んー…まあ…似てなくもないかな…でもこれって本当にあなた免許証ですか?」

「勿論!」

「あなたがこの…、真木翼つて証拠もないし、免許証も学生証にも性別は記載されてないじゃないですか。兄弟の物つてことも考えられますよね?」

「『兄弟』つて…、じゃ、小松さんは兄弟の免許を持ち歩いた事ありますか?」

「いや…、それはないけど…、」

「でしょーだつたら!」

「ちょっと待つてー真木つて…、あの時電話に出た、由宇の携帯電話拾つた人と一緒にいた人?」

「あー…、そうだね…。」

「『うだね。』って…、由宇の携帯…、由宇の携帯は、まだその人が持つてるんですか？」

「でしょうね。本人の携帯電話ですから。」

「はあ？」

「いや、だからあの時電話に出た男の声の主が、由宇本人ですよ。」

「はあ…？」

小松和也は“この人何言つてるんだ？”って顔して真木を見ている。頭の中はプチパニックの状態なのだろう。

「男性の声だつたのが納得いかないかもしだせませんが、あの時電話に出たのが紛れも無く由宇ですよ。」

「…、」

「で、『拾つた』って言つたのは、私が考えたとつさの嘘です。」

「『嘘』…？」

「はい。あの時由宇は、自分が男になつてしまつたことを小松さんに隠しておきたかったみたいですから。」

「…？」

和也は何がなんだか分からぬ様子だ。

そしてしばらくの沈黙のあと和也が重い口を開いた。

「その人に…、あなたが言つてる由宇本人に会わせてくれ！」

「だからさつきも話したよ」、由宇はまだ気持ちの整理が出来てないみたいだから…、つて由宇が男になつた事は信じてくれたんですか？」

「いや…、そのあんたが由宇っていう人と話してみてからだよ！…人しか…、俺と由宇しか知らない事をその人が知つていたら信じれるかもしれないし。だからその人と会わせてくれ！」

「分かりました。」

「マッキー 分かりました。』つて…、会わせるの？』

「仕方ないだろ？会わなきや納得してくれそうにないし。由宇だってその方がスッキリするでしょ。』

「まあ、確か[。』

「本当に？』

「葵、由宇に電話してくれない？』今から迎えに行く』つて！』

「マジだよ。どのみち今日はバイトの面接行く予定なんだから、迎えに行くのが少し早くなつただけのことだろ？』

「わつ、分かつた…。』

そして切つっていた携帯電話の電源を入れると、不在着信が2件と

メールが3件ほど受信してあることが表示された。そのいずれもが由宇からのものだと容易に想像がつく。それを確認するのを後回しにして葵は由宇に電話したのだ。

トゥルルルル・・・

俺は研究内容を発表することを先生に止めようひつ説得していた。もし発表したら色々な問題が発生する事が考えられるからだ。俺らだけ最悪の場合、色々な人から奇異の目で見られる可能性さえあるのだ。もし発表するにしても戻る薬が出来てからにしてほしいものだ。

そんな中、葵からの電話が鳴ったのだ。俺はディスプレイの“葵ひかり”の文字を確認すると慌てて電話に出た。

「今どこ? 和也?」

「由宇声! カイよ。」

俺は続けざまに大声で質問していくよつだ。

「ゴッ、ゴメン……、つていうか何度も連絡したのに、携帯の電源が入ってないってどーゆうことだよー!」

「あー、」

「いや、それはいいや。和也? マッキーは和也の事どう対処してくれた?」

「あー、うん。それはこれからそつちに行つて話すよ。」

「そつち? そつちって何処?」

「いや、だから……、マッキーのマンション? 居ることでしょマンション

ンに?」「

「いや、今、研究室にいるんだけど。」

「はあー? なんで?」

「『『なんで?』って、そりゃー和也』…、』

「あー、先生近くにいるの? イエスかノーで答えてー。」

ん? 先生に聞かれたくない話か?

「イッ、イエス!」

「じゃ、”適当に用事が出来たから帰ります”とか言つて出てー。」

「あー、いや…、それが…、」

「何? どうしたの?」

「あー、うん…、葵がこいつち来れない?」

「なん? 」

「えーっと…、先生がこの研究内容を世間に発表するって言い出しだせ…、止めるように説得してるんだけど、一人じゃ説得出来そうになくて。」

「えつー? マジで?」

「うん。」

「なんでもうなったの？」

そう言つと、葵の後ろで誰かが『じりした?』と声をかけたのが聞こえた。マックキーの声に似てるような...? その声の主と葵が何やら話してころぶ。

「うつと葵へ。」

「えっ? あー、今戻るから待つて。」

「分かった。」

どの位の時間で戻つてくれるか聞きたかったが、俺が『分かった。』と言つた途端電話を切られた。

「葵君か?」

「あつ、はい。」

「由宇。」

「はい...」

「私の中では、発表は早いか遅いかだけの問題で、由宇の言つてる『発表しちゃダメ!』ってレベルじゃないんだよ。」

「だつてこれって問題ですよ! 性別が変わっちゃうんですよ! ? 政府の反発だって、いや、世界中の色んな人や団体から反発されます

よー。」

「中には賛成する人だつているだろ?」

「そりでしょ!ナビ…、」

「由宇は世界でどの位の人々が性転換したか知ってるか?」

「いや、知らないです。知りたいとも思わないです。」

「そりが…、」

「はい。」

「じゃ、少し話の角度を変えて…、性適合手術をしてる人達やその準備段階の人の中に、性ホルモン剤を摂取しているのは知ってる?」

「そりなんですか…、あつ、そりいえばマッキーがそんなような事を言つてたよ…、」

「それに個人差はあるが、多かれ少なかれ副作用があつて大変なんだ。寿命も短くなる可能性もある。」

「はあ…。」

「でもこの薬があれば、そんなリスクもなくて済むだろ?」

「それはまだ分からぬぢやないですか!この薬だつて副作用あるかもしけないし。ウチらまだ何日も経つてないぢやないです!もつと経過観察つていうか…、」

セヒードアが勢いよく開いた。葵とマッキー……それに、和也…？和也も一緒に

久し振りに見る和也。

走ってきたのか少し息が荒い。

その和也と目が合ひ。

お互い何も言えないまま沈黙が続いた。

「葵君そちらはどうなた？」

そう言つて先生が沈黙を破つた。

「あっ、えつと…、そちらは…、」

葵がモジョとしてマッキーの方をチラリと見て助けを求めている。

「また希望者を連れてきてくれたのかな？」

希望者？

「違います。男性から女性は花音一人で十分でしょー。」この人は由宇の彼氏だそうです。」

も、「むじ」としている葵に代わって、マッキーが本当の事を答えてしまった。

「ほ〜う。 そうなの?」

「はい。 小松と申します。」

「そう。」

「それより先生、もう発表するつもりですか?まだ何一つ論文というかレポートにまとめてないじゃないですか!」

もう?『もう』って言つた?ってことはマッキーも発表するのは賛成なんだ…。

「そりや、あれだよ。大急ぎで仕上げるよ。だから花音さんの映像が取れ次第発表出来ればと思つていい。」

花音の映像…、

「先生。」

「なんだ?」

「発表の時の資料は花音の映像じゃない方がいいと思いますよ。人の映像では問題がありますよ。前に言つてたチンパンジーは確保

出来ないんですか？

マッキーと先生がそんな話を始めた。こっちの話題も気になるのだが、俺とは和也の方が気になつて仕方ないのだ。

「あの……」

「なんじょう?」

「そこに座つてこむ方が由宇ですか？」

この時俺は、マッキーが和也に全てを話した事を悟つた。マッキーの方を見ると小さく頷いている。本当の事を言うつもりで来てはいたが、こやこの状態で会つとなると和也の反応が気になる。

「久し振り……だね……。」

俺はそつうのが精一杯だった。

俺と和也は、マッキーの計らいで隣の準備室に一人つきりにしてもらっていた。

「本当に由宇なのか？」

「うへ、うそ……」

「本当に……」

和也と田が会つ。その状態のままで頷いてみせた。

「本当かよ……、つていうかあんた誰かに似てるよね。えーと、あのアイドルグループの……、なんていつたつけ……」

「でも中身は間違いなく由宇です……。」

それから和也と俺の付き合い始めから最近あつた出来事など話してあげた。

それに和也からのいくつかの質問にも、覚えている範囲で正確に答えていく。

「だったら一年前に旅行に行つた場所は？」

「箱根でしょ！初めて食べたアワビの踊り焼きに感動して、和也つたらはしゃいじやつてたよね～。仲居さんに笑われて恥ずかしいつ

たらなかつたよ。」「

「…。」

その質問の答えを聞いて和也が黙ってしまった。何かフォローの言葉をかけてやらないとダメかな…？

しまいに和也は、左手を顔に宛て目の辺りを円を描くように擦り始めてしまった。更にその行動はエスカレートして、今度は両手で頭を掻き乱し髪の毛をぐしゃぐしゃにしている。

「あの～…、」

「…、」

「和也？」

「…、」

なんだろ？大丈夫かな？すると和也が急に動きを止め、目を開くと、

「すぐ戻してもらえーあの…なんだ…、あっちの部屋にいた…白衣着てた先生っぽい人に言えば戻してもらえるんだろ？」「

「そつ、それが…、」

「何？」

「戻る薬が出来てなくて…、」

「…。」

「それが出来てたら、和也に隠す必要がなかつたわけだし…、」

「ハア～？」

「…、」

和也がキレそつた感じだつた。

でもどうやら、俺が由宇だつて事は信じてもらひたいし。

「だから…、だからわ…、」

『だから…、』の後の言葉に詰まつてしまつ。“別れ”を切り出すいいタイミングだと思ったのだが、それを切り出す事がこんなに勇気がいるものだと知らなかつた…。

告白なんかしたことないが、告白より勇気がいるのではなかろうか?やつぱりメールで別れを伝えればよかつたと、今更ながら後悔してしまひ。

「だから何?」

「せつ、先生が言つにはなんだけね…、」

「おひー。」

「もつ、元の体に戻す薬が出来るメドも立つてないんだつて…、」

「ハア――?」

やつぱつキレる？

「デカイ声出でな」でよー。」

「チツー。」

デカイ声の次は舌打ちかよー。あーなんか嫌な感じだ。和也の「いつゆつ」とこは直して欲しかった。

「俺は男同士ケツ掘り合ひの趣味なんかねえぞー。」

「…、」

そんな光景なんぞ想像したくもない！

ボーイズラブ系のマンガは、友達が好きだった影響で少しくらいは読んだ事はある。でも実際それが自分となると想像したくない。

「俺だつてなりたくつて男になつたわけじゃないんだよー。巻き込まれたつていうか…、」

「聞いた。あの、真木つて奴に。あいつも元はアレだろー。違う性別だつたんだろ？」

「うふ…、」

「あーあ、つたく…、とつあえず別れるか？」

「えつ？」

向ひの口から予想してなかつた言葉が出て、びっくりして聞き

直してしまった！

「いやだから別れようぜーっていうか、俺は男と付き合ひ趣味ねえ
しー。」

「うへ、うと。」

「こんなもんか…、こんなあつさ…。しかも、結婚いひちの方が
フランてるし…。」

「心配して来て損したぜ！…たく！」

男の姿になってしまったとはいえ、和也ことつて俺つてこんなに
あつたり別れを告げられる存在だったのか？悲しいはずなのに涙も
出やしない。

「和也…、」

和也が怒った口調で『何？』と返事をした。

「いや、やっぱいい…、」

また同じ口調で『言いかけたんだから言えよー気になるだりー。』
と怒鳴られた。

「じゃ、じゃあ言つけど、もし、もし近いウチに元に戻る薬が出来
て、その時お互いに付き合つてゐる人がいなかつたら…、」

「おーーって、無理・無理・無理！っていうか今お前男なんだよ！
そんなのに言われても無理に決まつてんだろー？それにこっちの状

況つていつか心境解つて言つてゐる?」

「…。」「

「連絡取れない彼女の事が心配で様子見に来たら『男になつてしまつた。』って状況なんだよ。こっちの頭ん中整理ついてない時に言う事じやねえだろー!」

「『うひ…じめん。でも、そつちが『言ふ』つて言つたから…、』

「あつ…、だよな…、悪い…、』

そこで会話が一旦止まつてしまつた。

お互ひ口を合わせられず別の方に視線を向けてしまつた。
しかし同じタイミングでため息を漏らしたところ再び口が合つ
そこで和也がフツッと笑つて立ち上がると、

「帰るよ。」

「あつ、うん。」

なんだか寂しいような、それでいて胸のつかえがとれたような

「さつきの話なんだけどさ…、』

さつわ?

「『もしも互いに付き合つてる人がいなかつたら』つて言つてたけ
ど、』

「うん。」

「その薬が出来た時に由宇は女に戻つてゐるんだよな？」

「そう…だね。」

「戻つた直後なんだから彼氏はいないわけじゃん？」

「う…うん。」

「だったら俺に彼女がいなかつたらいいことになるよね？」

「…。」

「まあ、保証はしねえけど、その時彼女がいなかつたら考へてやらないこともないけど、期待はしないでくれよな。」

なんていうか…、和也なりの優しさみたいだ。

「分かった。3年…、10かから3年連絡いかなかつたら忘れてくれていにから…。」

「分かった。3年ね。頭に入れておくよ。」

「ありがと…、」

「じゃあな。」

「うん。」

そう言つて準備室から出ていった。ドアの向こう側でマッキーと話しているのが聞こえてくる。“他言無用”をマッキーからお願ひされているようだ。

和也がマッキーと話しながら廊下に出たのか、その会話ももう聞こえてこなくなり、和也の気配が感じられなくなつた。

そしてそこで、俺の目から涙が溢れてきた。あれっ…、なんで今頃…、俺って鈍感なのかな…。今頃になつて涙が出るなんて…。

ひつして和也との2年の交際が幕を閉じたのだ。

由宇、ハタチ…、人生初の恋人との別れだった…。

052 それぞれの事情（前書き）

由宇のアツといつ間の何日間（作者は何日だったか把握してません。）が過ぎて、やっと大学に編入します。これから由宇にどんなキャンパスライフが待っているやら…。

052 それぞれの事情

和也との別れから1ヶ月…。大学とバイトとで新鮮で充実した日々を過ごしている。今となつてはなんで別れる事をグダグダ先延ばしにしていたのか解らない。そのくらいスッキリした心境なのだ。

先生といえば、素直にありのままを学長に話し、一定の理解を得たらしい。だが、授業に関しては生徒達の混乱を避けるため、准教授に任せることで落ち着いたようだ。

今後このまま学校に籍を置くには、研究内容がどう世間の評価を受けるかにかかっているみたいだ。そう…結局は研究内容を発表する方向らしい。そこで発表を前に特許申請をしたみたいだ。発表は特許が取れてからになるらしいのだが、1年は取れないだろうとの見通しだった。特許自体取れるかどうかも怪しいものだ。

そんな先生は、医薬メーカーの研究所に行つたつきりで、最近は顔を見る機会が無くなってしまった。なんでも、先生が作った薬の成分分析をしているところで、同じような効果が得られる成分を見付けだしてゐみたいだ。

その医薬メーカーとどういった契約をして研究所の一室を借りたのか知らないが、そのメーカーの何人かは“薬”的存在を知つた訳で、後々面倒な事にならなければよいのだが…。

研究室のメンバーは…、

マッキーが2週間前にマンションから引越してしまった。料金先払いシステムのアパートだったため、保証人も必要なく、すんなり

契約出来たのだ。

大学にもしつかり通つてゐるらしい。2浪して入学したからには親の手前、卒業を目指すことと。“らしい”というのもマッキーとは学年が違うのもあって、この2週間はまったく会つてないのだ。何日か顔を合わせてないだけなのに少し寂しい気がする。

葵は…、葵は一年休学することにしたとのこと。あまりにも体格・体型が変わつてしまつたから、というのがその理由らしい。外見といふかシルエット的に全くの別人なのである。30センチ近く身長が伸びたらそりや別人だよな…。友達とかにどう対応したらいいか分からぬ…ってのもあるみたいだ。

かといって学校に来なくなつたかといえばそうではなく、研究室のマウス達の世話をしている。

そして夕方には俺とバイト先で顔を合わせている。授業を受けなくなつた葵はほぼフル出勤だ。ホストのステッジが似合つてるのが意外だった。髪を落ち着いた茶色に染めたのが良かつたのかも知れない。

そして三崎なのだが…、

「なつ、なあ…、」

「ん~? なあ~? に~?」

「もうちよつと離れて歩かねえ? つていうか、いつから腕に絡んでるの?」

「いーじゃん少しくらいー」

「『いーじゃん』つて…、」

学年が同じ三崎は何かといえば隣にいるのだ。というかキャンパスにいる間はほぼ一緒にいたりもいいだろ。

三崎にはいつも仲良くつるんでいたグループがある。三崎の他は男女2人ずついて、一応、三崎が女の子に変わった事を理解してくれた様子…。中には嫌悪感を持つてる子もいるかもしねないが、今所表面には出てない。でも俺や三崎がいないどこで陰口を言つてる可能性はあるだろ。

そのグループの中に俺も入れてもらつたのだが、三崎はいつの間にか俺の横をキープしていいのだ。

しかも三崎といふと田立つ。いや、田立つといひよりも、そもそも三崎とマッキー自身が学校内で噂の的なのだ。モデルのように変わつたカツコ綺麗なマッキーと、グラドルみたいに可愛いくなつた三崎。

三崎もマッキーも回りから一コ一ハーフと思われている。去年まで男として存在していたのだから、回りがそう思つのも当然といえば当然なのだが…。

そんな三崎と編入して早々仲良くしているのだから、自然と俺も噂になつてゐるみたいだ。それでなくとも俺の場合は、あの人気タレントに似てるということで一度見されることが多いというのに…。

そんな中、『知らないかもしれないけど、三崎つてこの間まで男だつたんだよー』と教えてくれる子もいるし、『あんなのと付き合つてたの?』とか、『あんなオトコ女と別れて私と付き合つて下さい!』って告白される始末…。その度に『付き合つてないですよ。ただの友達です。彼女は地元にいるから付き合えません。』と返答するのだ。最後の“彼女が地元に”というのは当然作り話で、何か

と面倒臭うなのでそうゆう事にしておいた。
回りからそんな風に誤解されるくらい、いつも三崎が傍にいるの
だ。

「ねえ、由宇？」

「何？」

「明日からの予定は？」

「明日から？」

「『ゴールデンウイーク』じゃん？ どうか遊び行こうよ。」

「あー、『ゴールデンウイーク』か……、そうだねたまこマッキーと
葵でも誘つて……、」

「ちよつとーなんでそつなるかな～？」

“？”ってな具合で三崎の方を見ると、不服顔をして俺を見る。

「たまこには『一人でどうか行く』つよ。」

「『たまこには』つて……、」

毎日一緒にいる三崎にそんなことを言われても、なんとも実感がないのだ。それに今だつて一人だし……。

「どうか行きたい場所もあるる？』

「うへん…、うん。あるー。」

「何処?」

「マハンション! 真木をひって、いないんでしょ?」

「えつ? ウチ?」

「そう! 招待してよー。ベランダから見える夜景が綺麗って言つてた
よね?」

「いや…、そうだけじ…、」

「何? 嫌なの?」

「ほり、夜はバイトだし…、」

「じゃあ、毎日でもいいよー。」飯作つて食べよつよー。」

「毎は…、」

「……。なんなの? 私の事嫌なの?」

「いや、「ゴールデンウイーク中の毎間ウチに来るのはヤバイよ。いつ美穂が来るか分からないし…、」

「ゴールデンウイークともなると、毎間から美穂が来る可能性がある。もし、仲良く料理でもしている時に美穂と鉢合わせしきものなら、あー考えただけでも恐ろしい…。」

でも実際の美穂のゴールデンウイーク中のスケジュールは、オペ

の予定で一杯だったみたいだ。そんな忙しい中、ホストクラブに来て由宇のとこ泊まる余裕なんて無かつただろ？

「だったら、いつだつたらいいわけ？」

「つて、その前に会うつていつ決まったのさ？」

「『いつ』つて…、だつたら『行きたい場所ある?』なんて聞かなかやいいじゃん！」

「う…、う…、もつとも…。

「『ゴメン…。いや、ウチはヤバイよ。』

実際俺は美穂の扱いに困っていた。いや…、美穂だけじゃなく、三崎の扱いにも困っている…。

美穂とは何か約束したわけではないが、マッキーが引越しして以来、たまにマンションに来るので、それというのもマッキーが美穂に『由宇が“騎士”でホスト始めたから顔出してあげて!』とメールしたからだ。マッキーは他の客にもメールしていく、お陰で新人なのに俺と葵には太い指名客がいる状態。

といつてもまだまだ新人の俺達には、指名の無い日の方が多く大体が先輩方のヘルプ。浴びるほど飲まれ酔い潰れることもあるし、どうやって帰つて来たか分からない日すらある。

とにかく俺は美穂にとつてマッキーの代わりで、囮われてる愛人みたいな存在なのだ。住むとこをそのまま間借りしてるのでから俺としても文句を言える立場ではなかった。その事は三崎もよく理解しているはずだった。

「分かったよ…。」

「悪いね…、じゃ、俺バイトあるからー。」

「あつー！」

何か言いたそうな三崎を残し、地下鉄の駅の階段を早足で駆け降りたのだ。後ろからは『メールするねー』とだけかろうじて聞こえてきた。

三崎の事は決して嫌いなわけではない。グラドル並に可愛いし、魅力的なボディラインだし…。性格は…、普通…？でもグループ内の微妙な空気が、何となく三崎を少し遠ざける要因になっているのだ…。

でも三崎は俺が元女だと知っている数少ない内の一人である。だから絶対羨みには出来ない。

そう、俺は三崎やマツキーと違いカミングアウトせず、元から男として生活しているのだ。

053 ホスト由宇

裏口から入るとロッカールームに直行する。葵は既に出勤して店内の掃除をやつたことだろう。そして開店のお客様を出迎えるため、仲間と通路に立っている頃だ。

「遅いぞ由宇！」

「あっ、すみません。着替えてすぐいきます。」

「このマネージャーさんで中田さんだ。
通称ナカさん。

面倒見がとてもいいのでありがたい。

『遅いぞ』と口調は少し尖っているが顔は笑ってる。俺が学生つてことを今のところ最大限に理解してくれて、今日みたいな多少の遅刻なら目をつぶってくれるのだ。マツキーがメールで上手く言つてくれただろうし、マツキーの上客を俺と葵で何人かずつ引き継いでいるのも原因だろう。客を呼べるホストは優遇されるのだ。それも大金を落とす客なら尚更だらう。

「なあ由宇？」

「はい。」

「お前、大学なんか辞めて毎日ウチで働けよ。最近、表の写真パネルとかネット見て、お前指名していくる客増えてるみたいだぞ。」

「マジっすか？」

「ああ、本当だよ。ネット見てきたお客様は、お前の出勤をチェックしてくるからいいが、休んだ日の一見客からの指名逃してるぞ！」

「そつか…、でも大学は辞められないですよ。」

バイト感覚の俺にとつて、これが当然の受け答えだひつ。

「そうだよな…。だつたら週4日と言わば、暇な日は出でこいよ。」

目的はこれだ。始めて無理なお願いをする。その後にハードルを下げてお願いをするのだ。人間の心理からいうと一度断つた後、だけに、一度田は断りずらいということらしい。しかもお世話になつてる人から言われたら効果は大きいだろう。これを知つて使つてのだろうか？

「はあ…、一応考えておきます。」

「頼んだ。」

それには頷いて応えた。確かにたまに指名は入るが、俺の指名はまだまだ少ない方なのだろう。ただ初めてのお客様が俺を指名してくれるのは、表に貼つてあるパネルの写真[写り]がいいからだ。おそらくパソコンで画像修正してるだろうが、あのタレントそのものと書いてもイイほどの出来だ。

「あつ、そうだ！」

「はい。」

「翼じうじてる？連絡あるか？」

「いえ…、」

実際ここにとこり会ってなかつたのでそり答えた。

「やうか…、」

「どうかしました?」

「いや、メールしたんだけど返信がなくてさ…。」

「…マッキー何してるんだ?」

「俺からもメールしてみます。」

「頼むよ。」

ナカさんはマッキーにどんな用件があつたんだ?それにしても最近会つてないだけに、マッキーのことが気になつた。

今日は週末からか、ほぼ席が埋まっている。ナンバーーとナンバーーのお客様が競うかのように高いお酒をオーダーしてきて、今日は何度目のシャンパンタワーだろ?…。コールに加わるのも面倒臭いし、新人に分類される俺達は当然グラスを空にする役廻りだし…。流し込む様に飲むので今日は後で大変だろ?…。そんな中俺に指名が入つた。

「こりっしゃいませ。ナイトへようこそ。」

「どうも。先週も来たけど覚えてる?」

「もちろん覚えてるよ。」指名頂けて光栄です。」

「お客は前回新規で来たにも関わらず、ドンペリのピンクを3本入れてくれた里奈だ。20代半ばといったところだろう。ウチの店ではピンクは一本10万円となつていて。その里奈が俺を本指名してくれたのだ。これで俺が彼女の担当になつた。

でも2週連続ともなると支払いの方が心配だ。売り掛けにされて飛ばれでもしたらこっちが大変なのだ。どれくらい余裕があるお客かを見極めるのも重要になつてくる。俺らとしたら無理をしない程度に適度に足を運んで欲しいのだ。

里奈は前回、40万以上払つていて。一体彼女は何をやつている人だろう? それとも家が資産家でお嬢さんとか?

「何かお飲みになります?」

「あー、そうね。ピンク頼もうかな。」

「ありがとうございます。」

黒服に皿をやると向こうもこちらを見てた。入ってきたばかりのお客とあって、注文する可能性が高いとみていたのだ。

「ねえ、何回くらい来たらアフターしてくれる?」

「アフター? 今来たばっかじゃん? もう帰りの話?」

「うん…、あーそうだよね…、じゅー、今日は? こいつ使つたらア

フターしてくれる？

「今日？」

今日は俺が入つて2回目の締め日だ。それだけにナンバー1もナンバー2もじやんじやん自分の客に頼ませてる。ナンバー1を死守したい者とその座を奪いたい者。双方の常連達もその辺が分かって、今日の店はある種の熱を帯びている。その熱い争いに入る余地は、今の俺に到底無い。

お客様には基本的に無理をさせたくないのだ。1回で沢山お金を使つて来なくなるよりも、今の俺は上客の常連を一人でも多く作りたいのだ。でも締日ともなると、正直自分の売り上げを伸ばしたいのも現実だった。

「それとも、もう今日は誰かと予定入ってる？」

「いや、ラストまで遊んでいってくれたら、喜んでアフター行かせて頂きます。」

本指名してくれた日にダメとも言えない。それに彼女は世間で言うところの“いい女”なのだ。それに…、彼女は俺にとつて“いいお客様”になる可能性が十分ある。ウチの店は永久指名制だから俺が辞めない限り、彼女が此処に通う間指名を変えられないのだ。

「ほつ、本当？今日大丈夫なの？」

「ええ。」

マッキーには『始めの内は勉強だと思つて、枕営業したらいんじゃない？それでお客を見極めなよ。』と言われ、次いで『常連に

アフターを言われても最低でも2回に1回は断れ。』と言われてる。ケースバイケースで客にもよるが“いつでも寝る男”的イメージが出来るのはなにかとマイナスらしい。上手く焦らすのも必要とのことだ。

「嬉しい！…じゃ、ピンク止めてプラチナにして。」

「えつ？」

「ブツ、プラチナ？ブラックとゴールド飛び越えてプラチナを頼むの？」

「何？私がプラチナ頼んだらダメなの？」

「いや…、大丈夫？」

俺は支払いを心配してしまった。プラチナといえば確かウチの店だと1本70万円はしたはず…。

「あー、支払いなら大丈夫。今日は帶付きを3つ持ってきてるから。」

そう言って持ってきたバックの中を見せてきた。中には本当に3百万入っている。

「大丈夫なの？」

「平氣だから気にしないで。」

「おつ、おつ…。」

なんか俺の中の感覚が崩れていく感じがした。一度しか会ったことのない男に、こんな風に注ぎ込めるものなのか…？
一ヶ月前まで自分も女だつたが、とても同じ生き物とは思えなかつた。

オンナ…、

実はその感覚は薄れつつあるのだ。いや…、身体が男なのだから、現実的にそんな身体と毎日向き合つていれば、前の感じを忘れるのは当然なかもしれない…。今となつては、俺は元から男だつたのではないかと錯覚するのだ。

意識の中では女心を忘れないよつとこいつている。でも、色々な女性に接したり、その女性と裸で抱きあつたりしているうちに、どんどん俺の中の何かが変化していいるのだ…。一ヶ月程度でこんな感じなのだから、この先俺はどうなつているのだら…。

今は朝の9時半。完璧に寝坊で、大学には完全に遅刻だった。土曜くらい休みにして欲しいものだ。

俺は昨日、ホテルで客の里奈を抱いた。今もそのホテルのベッドの上にいるのだが、実は客と寝るのは今回が初めてだつた。お客様に誘われるまで、枕営業をする必要がないと思っていたからだ。でもマネージャーのナカさんには、『新人なんだからどんどん自分がから枕営業するんだよ』。

女つてのは一度抱かれたら、また次行つたら抱いてくれるかな?って思うもんなんだよ。

特に渴いてるご無沙汰な干物女はな。だから一発目にちゃんと気持ちよく逝かせてやれよ。そして2回目は何回か通わせてからにするんだ。そこは少し焦らしたりしてだな…、まあ、女は2度抱かれたら惚れるもんなんだよ。ホストは惚れさせないと金になんないよ)。『とレクチャーされながら煽られている。

基本イイ人なんだが、その発言を聞いた時にはちょっと引いてしまつた。それを聞いた時には“女目線”的方が強かつたのかもしれない。

そしてバスルームのシャワーの音が止んで、しばらくするとバスタオルを巻いた里奈が現れた。

「おはよう。」

「おはよー。ルームサービスでも頼む?」

「んー、それだったら田代覚めのキスを頼むよ。『コーヒー』よりそっちの方が目が覚めそうだ。」

なんて、そんな冗談を言つてみたら…、

「オッケー。」

そう言つとベッドに上がつて俺の横に肩肘付いて寝そべると、軽く唇を重ねてきた。冗談のつもりで言つたのに…。でも何日か振りの寝起きのキスだ…。

マッキーは寝起きのキスをする人で、エッチした翌朝などはほぼ100%してきていた。いや、実際は俺が目覚めてなかつただけで毎日それでいたのかも知れない。

「なんで俺だったの?」

「ん…?あー、えーっと…、タイプだったから。それに…新人だからかな。」

「新人だから…?」

「新人なら、まだそんなにお客も付いてないでしょ…」

「あーなるほどね。」

古株のホストだと常連客が多く付いていて、アフターに誘つても先客がいる確率が高いということだろう。だから顧客が欲しい新人なら食いつくと踏んだのだ。それにまんまと俺は乗せられてしまつたらしい。

「納得してくれるの?」

ん?裏の意味でもあるのか?

「ん…、どうちがいいの？」

「どうちがへ。」

「いや、『納得した』って言つて欲しいのか、『本当の理由は？』って聞いて欲しいか。」

「“聞きたくない”ってよく言われるでしょ？」

「どうだら？ 里奈が言いたくなれば聞かないし。」

「ふつ…、なんか大人だね。っていうかドライなのかな？」

「どうだら？」

「年上」まかしてると、なんか年下だと思えないよ。」

基本的にホストが客にプライベートなことを聞くのはタブーだ。でもここは店ではない。年齢とか、なんで羽振りがイイか聞いたらやあうかな？ 寝たんだし聞いても平気かな？

年齢を聞かれ答えた時に『年下か』。』言つていたことから、俺よりお姉さんという事だけは分かっている。ただ、今のところくつ上からは分からぬ。

「里奈や…」

「うそ？』

「いや、ほんの心配するの違うんだけど、お金大丈夫だつ

たの？無理してない？」

「平気だよ。つていうか、そんなこと気にするホストなんかいないよ。つていうかお金使わせてナンボの世界じゃないの？」

「まあ…、そうだけど…。里奈が無理してないって言ひならいいけどさ…。」

薄々は感じていたが、どうも里奈はホストクラブに通い慣れてるようだ。他の店にも俺みたいな男がいたのかもしれない。飽きたら他の店に行つて違う男を漁る……、そういうふた具合だらうか？

「ありがと。ねえ、そんなことよりお願いがあるんだけど。」

「お願い？なんだ…？」

「何？俺に出来ることなら力になるけど？」

「写メ撮つていい？」

「写メ？」

「実はね…、」

彼女の話は簡単に説明すると……、俺が女だった頃好きだったアイドルが相当なヤリチンみたいで、里奈の友達が何回か会つてやりポイされたらしい。そこでその人にそつくりな俺とベッドの上で写メを撮り、それをそのアイドル本人としてネットに流したいとのこと。

写メの構想もあるらしく、シーツから肩を出して寄り添い、いか

にもさつき（エッチが）終わりましたって雰囲気を出したいみたいだ。それでその『与メ』に週刊誌でも食いつけば、尚更痛快ということだろう。

『彼女の代わりに仕返ししてやりたい。』と言つてはいるが、実は里奈本人の話じやないかと俺は少し疑つている。

「うーん。」

「ね？お願い。またお店に遊びに行くし、迷惑かけないから。」

「でもそれって俺の顔曝されるってことだよね？」

「えつー…?」「うん…。」

「里奈は？里奈の顔は？」

「田のところに黒い太線入れるから平気。」

「そつか…。」

『画質が悪い写メなら本人と見間違える可能性はある。そうなるとそのアイドルの人気も少しは落ちるだろう。…って事はホストクラブでの俺にも多少の影響が出るのかな…？』

「ちよっと考えとく。」

『考え方』と言つた時は、おそらくやる可能性が低い。でも断つて相手がイヤな気持ちにならないように、前向きな表現であやふやに先延ばしにしておくのだ。でも相手もこっちが嫌がってるのを感じてくれるだろ？。

「うう…、うふ。」

「俺を指名した本当の理由ってそれ？」

「違うよ…。」

里奈の口調が弱くなつたように感じた。図星か…？こんな感じで今日別れると、里奈はもう店に来なくなるかな…？

「ねえ？もつ一回エッチしようつよ?」

「ん…？んー、するか。」

これも断つたら空気が悪くなりそつで、これ以上空気が悪くなるのが嫌だった俺は、つい里奈の提案に乗つてエッチをしてしまつた。結局、里奈の歳を聞くタイミングも逸しちゃつたし…。朝から俺は何してるんだか…？

俺がこの日学校を休んだのは言つまでもない。

俺は死んだように眠っていた。いくら若いといつても昨晩は結構飲んだし、遅くまで里奈と絡みあってたしね。多少は寝たのだが、寝足りなくて帰つて来て昼寝をしたのだ。そんな中、電話で起された。

「今どこ?」

「ん、誰？」

「あれっ？ もしかして寝てた？」

「ん、うん。」

寝起きなので声の主を誰か理解するのに時間がかかりました。

「今日泊めてよ。」

「えつ…？」

「ダメ?」

「んつ、いいけど……。」

「ありがとう。あつ、電車来た！10分後くらいにはそっちの駅に着くから、着いたら電話するね。」

「んつ、」

それで電話を切られた。

フワーッ…つて、まったく…人が気持ちよく寝てたのに…、つて、
んーー？今『泊めて』つて言つた？つて…、ウチに泊まるつてこと
？はあ？マジか？あいつは何考えてんだ？どうしよう…、今から断
るか…？つて今何時だ？6時…。俺は何時間寝てたんだ？あーそん
なことより三崎だ。適当に理由付けて電車のある時間までには帰ら
せよう…。いや、他にもつといい方法ないか…？

トゥルルルル…・

「今、駅に着いたんだけど、ソハからどうやって行けばいいの？」

「あー、今向かってると…」。もひすぐ着く。北口にコンビニあるか
らそこで待つて！」

「分かった。北口ね。」

俺は駅に向かつて歩いていた。最悪泊めてもいいが、まずは水際
作戦に切り替えたのだ。ウチまで連れて行かないこと…、まずは晩
飯でも食べて、次にカラオケかネットカフェでオールに持ち込む。
うん、このプランだな。

でも予想に反して彼女は大荷物だった。

「旅行…に…でも行くの…？」

「違うよ。親父に家から出された。」

۱۷۳

「だから、単身赴任中の親父がゴーリデンウイークってことでウチに帰ってきて、私の格好見て激怒して大喧嘩。」

「大喧嘩」？

「『親から貰つた身体を勝手にいじつて女の体になんかにしやがつて！顔だつてそんなに変わつて……出て行け！……』って具合。お母さんもかなり怒られちゃつてや。で、お父さんが単身赴任先に戻るまで、家出する』としたの。だからしばらくなろしくね。」

『『しづめへひりぬ』って……、それで俺のとこなの？』

「いいでしょ？他の友達のとこだと…、なんかホラつ私つて自分で言つのもなんだけど、最近敬遠されてるっていうかキモがられてるじゃん？」

「キモがられる? そういうなの?」

「 そうだよ。んーってそうか…、そういうのって本人じゃないと気付かないよね。」

まつたく気付かなかつた。逆に三崎が意識し過ぎてるのだけなのではなかろうか？

「始めのうちは興味本位なのか色々と聞いてきたりチヤホヤされた感はあつたけど、結局は変態扱いっていつか…変な目で見られているっていうか…。しまいには『エツチしよー』とか言われちゃうし、

L

「そり…。」

「うーん、『エッチしよー』か…。男の生態つてよく分からないな…？男から女になつたのでもやりたいつて思えるのか…？三崎くらい可愛い感じだと“有り”なのかな…？」

「まあ、始めてからそういう事言つ人もいたけどさ…。だからセ…、なんていうか男友達のところは危ないし、女友達からは距離おかれてる感じだから、泊まるところないでしょ？」

「そんなことは…、」

でも実際はどうなのだろう？去年までのグループ内の三崎らの距離感が俺には分からないからなんともいえないが、グループ内の奴らも少し距離をおきだしたのだろうか？

男友達も…元男を泊めたら回りから変態扱いされる可能性もあるか…。女友達なら…？女友達も微妙かあ…？気にしない奴は気にしなそうだけどな…。

「だから消去法で自然と由宇のトコしきないつて結論に至つたわけ。」

「はあ…。」

「美穂さんだつけ？その人が来る時はネットカフェでも行くからさ。お願ひー！」

「いや…、」

美穂さんが来るとすれば今のところ水曜もしくは土曜だ。結構流行ってる美容整形クリニックみたいで、土日は日帰りのプチ整形のオペが集中して基本的に忙しいみたいだ。一応木曜日に休みをもらつてるらしいのだが、だいぶストレスが溜まつていてるみたいだ。

俺がホストクラブで働き出してからは、欠かさず水曜に来店しラストまでいてアフターのパトーンなのだ。単に次の日が休みだからだろう…。しかもマッキーがいなくなつてからの水曜は、今所2週連チャンでお泊りしてる。それで先週初めて土曜に来たのだが、シラフだったからかその日は大人しく帰つてくれたのだ。

で、今日もその土曜日なわけで…、

「そういえば、今日バイト休みなの?」

「えっ? あっ、そうそう。」

三崎には“俺は予定のない限り店に出てる”ということにしている。

三崎はグラドルみたいで誰もが振り返るくらい可愛いのだが、なんとなく敬遠してるのだ。

最近分かったことがあって、グループ内の女の子の片方が、どうも三崎の事を好きだつたみたいなのだ。
それが休み明けに三崎が性転換していたものだから、気が動転して大変だったとのこと…。

好きだつた男が今や自分と同じなりをしているのだ。しかも自分より可愛く魅力的なボディラインを兼ね備えて…。そんな三崎といきなり編入してきた俺が仲良くしていく、そいつも芸能人に似てカツコイイ…。ムカつく矛先を何処に持つていけばいいのやら…。つて具合らしい。それもあつて距離をおかれてるのかもしない。

「ふうん。」

「昨日、先輩方のお客さんがどんどんシャンパン頼むから、新人の俺達が飲まなくちゃならなくてさ……」

「それで飲み過ぎちゃったわけだ?」

「だね。」

「それで休みもらったの?」

「そつ、そつ。」

「随分融通効くんだ?」

「看板ホストってわけじゃないから。」

「ふうん。」

まったく……、「ゴールデンウィーク」ときで、単身赴任先から帰つてくるなよ……。はあ……、「ゴールデンウィークか……。

本当なら今頃、和也が東京に出てきてラブラブしてゐるはずだつたんだけどな……。つて、それだ! 美穂には以前、田舎に恋人がいることを話した事があった。その恋人がこっちに遊びに來てるって言えば「ゴールデンウィーク中は美穂はここに寄り付かない! いや、それだと休みの間三崎をずっと置いてやつてもいいことになる……? いや、このことを三崎に言わなければいいんだ……。

「由宇?」

「……ん?」

「さつきから一人で何ブツブツ言つてゐるの?」

「えつ?いや、ちょっと考え方。」

「」飯作つてあげるからスーパーに買い物行こつよ。」

「へつ?」

「最近お母さんに料理教わつてるんだよねー。腕試したいから感想
言つてね。」

「いや……」

「さつ、行くよー。」

俺のプランが崩壊していく……。

結局、マンションのキッチンには三崎が立つていて何かを作っている。包丁の扱いは、最近料理を教わり始めたと思えないくらい上手だった。

俺はそんな三崎をおいといて部屋へと移動した。プラン²だ…までは美穂へのメール。内容は『地元から彼女が遊びに来てるから、ゴールデンウイーク中は会えないけどゴメンね。彼女が帰ったら連絡します。』と、嘘のメール。でも、これだけ送つておけばまずこのマンションには来ないだろ？

今年のゴールデンウイークは次の水曜までだから、三崎のお父さんも水曜日までは帰るに決まってる。そうなれば三崎だって水曜には帰るに違いない。その日、俺がバイトから帰ってきた時に三崎はいないということになるだろ？

連絡しなくとも、美穂はいつも通り水曜に店に来るだろ？か？つていうか俺もお金貯めて早くこじから出よ…。でないとなんか変になりそうだ。

それによくよく考えればバイトをするにあたって、履歴書の性別欄を男にしたところで別にたいしたことないのではなかろうか？身辺調査をするわけでもないし、俺が通っていたのは男女共学の高校で女子高というわけではない。履歴書に○○女子高卒業と書くわけではないのだ。

「ちょっと由宇一。」

キッチンで三崎が俺を呼んでいる。

「何ー？」

「何しているの?」

振り向くと、お出でを買った三崎が立っていた。そんなに広いマンションではないが、いつの間にアパートのところまで来たんだ…?

「何って…、」

「座りいな…。」

「何が?」

「携帯電話にさきつて何しているの?..」

「何って…」されはだな…、「

「…ヤバイ…なんてこまかそう…、つて別に三崎とさき合つてゐるわけでもなんでもないんだから、何してようが問題ないか…?」

「あつ、あれだよ、あれー営業メールー“また店に遊びに来てよー”みたいな…。」

「ふーん。あつ、うう。それ終わったら手伝つてね。」

そう言つて部屋を出て行つた。フーッ…。つていつかさつきのメールだけでも消去しておいたかな…、でもさすがに俺の携帯黙つて見たりしないか…。

そうだ!ここはいい機会だから俺と三崎の関係をはつきりさせてしまおう。俺と三崎はただの友達。それ以上でもそれ以下でもない。いや…、あの“薬”的秘密を共有してるとこた意味では、戦友と

「いか仲間といふか…」

別に深い関係になつてもいいのだが、三崎とは今の所そうゆう感じじゃない。それに、これ以上そういう人がいたら身が持たなそうだ。そう決意してキッチンへと向かった。

「何手伝つたらいい?」

「あー、うん…、いや、やつぱ別にいいかな。座つてて。」

「分かつた。」

さつき『手伝つて』って言わなかつたか?内心“何だそれ?”と思いつつソファーに座つた。そこでメールを受信した音が鳴つたのだ。三崎の痛い視線を感じながらメールを開くと、予想と反して違う人からのメールだつた。

予想では美穂からの返信だと思つていたのだが、グループの中にいる子からのメールだつた。それも“相談したいことがあるから今から会えないかな?”という内容のメールだ。

「お密さんから?」

「いや、貴美ちゃんから。」

俺は素直に答えてしまつた。ちなみに貴美ちゃんとは、同じグループにいる中森貴美子で、三崎のこと好きだった方の女の子だ。

「貴美ちゃん?なんだつて?」

「いや…、相談乗つて欲しいから会つてくれつてさ。」

「ふうん。由宇に相談つてなんだろね?」

「ああ……、」

つて、三崎の事だろ!と言つてやりたいのを我慢した。三崎が男の時は鈍感な奴だったんだろうな。」

「分かつた。あれじゃない?また由宇に告白したい子がいて仲介頼まれたとか?」

「ゲッ!また……。」

確かにそんな事も以前にはあったが、今回は違うだろ?。

「いつ相談に乗つて欲しいって?」

「いや、バイト終わりで駅にいるらしくから、ちよつと行つてくるよ。」

「えつ?今から?」

「そう……だね。ほら、確か貴美ちゃんのバイト先つてそこの駅ビルの何とかっていうケーキ屋だったろ?」

「あー、そうだね。」

「ちよつと閉店時間じゃね?」

「まだ早いでしょ?んーそうだー貴美ちゃんも呼んじやいなよ!私も相談乗つちゃう!」

「あのな…。」

「何?」

「三崎に相談出来る事なら始めっから俺じゃなく三崎に連絡するだろ?付き合って俺より一年長いわけだし。」

「そう…だね…。」

「グループの新参者の俺だから言える話だつてあるだろ?」

「え?…?」

「あー、つひいうか三崎に関しての相談の可能性だつてあるわナジやん?」

「私の…、」

「三崎は思ひ当たる事でもあるのか、急にトーンダウンしてしまった。」

「とにかく、行つて来るから飯は一人で食つてくれ!」

そう言つて、財布と鍵と携帯電話を握りしめ玄関の方へ向かうと三崎も玄関まで付いてきた。

『『『一人で食つて』つひひどくない?一人分つづけたし!』』

「三崎には経験ないかもしけないけど、女の子の相談つてのは長い

んだよ。なんなら先寝ていいからー。あと俺の分はラップして冷蔵庫突っ込んでおいてー。」

「なつー?」

「それに俺達って付かねーてるわけでもないし、俺が誰と休みおつと関係ないだろ? 蒲団は密間のクローゼットの中にあるから。」

やつたー。やつたー。でもちよつといい顔の顔が曇つたよつたな…。

「…。」

「そんじゃ行つてくるー。」

そう言つてマンションを出た。後ろからせ『ちよつヒー』と聞こえてくるが、それは無視した。

本来なら貴美ちゃんの方に『友達と会つてゐるから今日は無理。休み明けじゃダメかな?』と断れば済むはずだった。けど俺の優先順位で、三崎は低いようだ。

そしてメールで『5分で着くから北口のロハビリ前にいて。』と返信し、駅へと向かつのであった。

「よつー。」

「あつー。ゴメンね急に。」

「大丈夫。えーと何処がいい? ファミレス? ファーストフード? それとも…飲み行く?」

「あー、そうだね。ちょっと飲もうか?」

「じゃ、そこの店でいい?」

「うん。」

そんな会話があつて、俺達は近くにあつた全国チーンの居酒屋に入った。それで二人共とりあえず生ビールを注文。

「一人で飲むのって初めてだね。」

「そうだね。」

「うん…えーっと…、それで相談つて?」

「うん…えーっと…、実は三崎君の事なんだけど…、」

「三崎ね。」

予想通り三崎の話みたいだ。

「由宇君と仲イイみたいだし、最近の三崎君の事詳しいよね？」

「まあ……わづかな…。」

「ちよつと教えてくれるか?」

「うん…、」

「あの…、その…、三崎君ってあれだよね…、全身美容整形したつて事だよね?顔もそうだけど、身体も…。」

「ん…? セウだね。」

どう答えていいか分からずそのまま答えてしまった。

“薬”の事はグループの奴らにも言つてないので、他の奴ら同様に三崎は整形したものと思つているのだ。

「それじゃ、やっぱり下も終わってるのかな…?」

「下?」

「…、なんていうか…その…下っていうか…、下腹部も完全に女子になつちゃつたのかな?」

貴美ちゃんが俯きながら恥ずかしそうに質問してきた。再度確認したかったのである。

でもそれ自体は、以前みんなの前で三崎自身が『全身全部工事済みでーす!』と公言していた。表向きは性転換手術をして変わった事にしたのだ。

「俺もそいつ聞いてるけど？」

「そつか…。」

俺の言葉を聞いて、貴美がやんが落ち込んだよつて見える。

「あー貴美ちやんや…。」

「うん…、」

「三崎の事好きだったって聞いたんだけど、それって本当?..」

「えつー…?..」

「いや、なんてこいつか、今日だつて三崎の事聞きて来たわけだし…、まだ…、」

「…うん、うん。そつ、そうなの…。春休みに入る前に気持ちは本人に伝えたんだ…。」

「マジ?..」

貴美がやんは軽く頷いてくる。

「返事は?..」

『『少し考へてもいいれ。』つい言われた。』

「うん…、」

「でね。春休み明けたらあんなでしょー? その……、なんていうか……、グラビアアイドルみたいな感じで……、私なんかより全然可愛くなっちゃって……。しかもテレビに出たって話だし。」

「ああ、テレビに出たのは俺もびっくりしたよ。」

『私より全然可愛く……』つい、とこには触れずに会話を続けた。もしパツと見だつたら三崎の方を選ぶ人が断然多いだろう。元男つて教えても三崎の方を選ぶ奴はいるのではなかろうか……?

「だよね……。」

「今更、返事貰おうとは思つてないんでしょ?」

沈黙になるのが嫌で変な質問をしてしまった。結果、貴美ちゃんのキズに塗を塗るような発言だと気付きますぐに後悔がやって来る。

「そりや……まあ……。」

顔色が一層曇つたような……。そこへやつてきた生ビールを見るや、両手で抱えて半分まで一気に飲み干した。貴美ちゃんつて飲める子だつたつけな……? それに一杯目なんだから、乾杯してもよせそういうものじゃないか……?

「それだつたら三崎なんて忘れちゃいなよ。」

「やつだよ。男なんていつぱいいるじゃん!」

「やつだよ。男なんていつぱいいるじゃん!」

しばらく沈黙が続いた。なんとも嫌な重い空気になる。するとジヨツキに残っていたビールを飲み干し、店員さんを捕まえてオカワリを注文している。

そしてオカワリがくるまで重い空気が一人を支配するのだ……。

「ねえ。」

「ん……？」

「由宇君って三崎と付き合ひしの？』

「はあ？ そんなわけないじゃん！」

「せうなの？」

「せうだよ。三崎が引っ付き過ぎなんだよなー、つたぐ。』

「ふーん。でも、そうだよね。由宇君モテそうだし、わざわざ二コ一ハーフと付き合わなくても女の子達がほっととかなそうだもんね。』

「まあ……。』

貴美ちゃんはせうきの三崎の話のショックがあるようで、たまに話が途切れ沈黙する。

でもどうなのだらう？ もし三崎の下腹部が男性器のままだつたら、貴美ちゃんはまだ三崎と付き合えたのだらうか？ そりがつと不思議な質問だった。

「せうだー三崎、親父さんと大喧嘩したりじょよ。』

「えつ？」

「単身赴任先から帰ってきたお父さんが、三崎の女の子になつた姿を今回初めて見たらしくって、大喧嘩したらしくよ。」

「えつーーお父さんに言わないで手術したって事?」

「あつ、えつ、うん。そうみたい…。」

「言わぬ方がよかつたか…？」

「ふ～ん、なんかす～いね。でも、お父さんが激怒するのも分かる気がする。久々会った息子が娘になつてたら、怒るつていうよりびっくりして…、」

「だね…、でも帰省直前に親戚から電話で『テレビで同が女の子の格好して出てたけど、いつからあんな風になつたんだい?』って色々質問されたらしい。で、帰ってきて実際に喧嘩になつたみたいよ。」

「やつ…、それってこの話?」

「えつーーえーっと、今日?・今日かな?」

俺はどいつも言わなくていいことを言つていいたよつだ。

「くーーー、三崎瓶は田中君はまだ連絡していくるんだ?」

「だね…。」

「ふ～ん。それで、大喧嘩のあとびひつたの～まさか『家出』『由宇君のと』『泊めて』的な事言つてきたとか？」

「げつー～めつー、女の勘つてやつ？鋭過（ハリカ）やる…。

「だね…。」

「えつー～めつたり？」

それには頷いて応えた。

「えつと…、それで泊めるの？」

「うー、うー。実はむづくちにこるんだよ…。」

「嘘ー？」

「マジ。」

「えつ、じゃあ帰つてあげなよ。待つてるからドンドン…。

「いやー、それは大丈夫だよ。それでちよつと抜いて困つてしま…。

「

「困つてゐる…？」

「まあ。」

「迷惑だつたらなんでOKしたの？断ればよかつたじやん？」

「せうなんだけど、泊まるといつて置いてし、夕方だから暗くなるし危なくなる時間だろ?」

「危なく…? 元男なんだから平気じゃない?」

確かに「せう」だが、今三崎は完全に女性のだから、腕力はその辺の子と大差ないだろ?。

「せうなんだけど…、今のあいつ理解してやれる奴って少ないじゃん?」

「せう…だね。」

「だろ?」

「それで? いつまで置いてあげるつもりなの?」

「いや、それはまだ話していないけど、親父さんが帰るまでいるつもりなのかも…?」

「そんなのダメだよ! 親子なんだからいつまでも喧嘩したままじゃ…。身体は…、身体はもう元に戻らない状態なんだろうし、いつかはお父さんにも理解してもらわなきゃでしょ?」

「ん… そうだね。」

いや、元に戻る薬はいずれ先生に作つてもうないと困る。

そういうえば三崎の家ではどんな話し合いがされたのだろう? 薬の話は親父さんにしつらつただろ? もし三崎本人が話してなくて

も、あのねばれんなりあつわつ話してわづだ。

「だつたら早い段階で話しあつて、和解しなきやダメだよ。」

「明日元でも返した方がイイって事?」

「出来れば。」

「多少時間空けた方がお互い冷静になると想ひながむ。」

「わづだけど、由宇君は三崎君がいて扱いに困つてゐるんじゃないの?」

「げつ…わづだ! そうだつた。」

「わづ、わづなんだよ…、困つてゐるんだよ…どうゆうつやいこかな?」

「今日はじょうがないこじても、明田家に帰したら?」

「わづ、わづしてみるよ。」

てな具合で三崎の話に始まつて、グループの仲間の話やら家族の話やら色々と愚痴を聞いてやつたのだ。どちら貴美ちゃんはそういうストレスが溜まつていたらしい。

それにつまみも美味しいのかどんどんお酒が進んでいく…。そしていつしか俺まで貴美ちゃんの飲むペースにはまつてこゝのだった

…。

ん…、朝か…？んつ…頭、痛つ…。あーそうだ、昨日貴美ちゃん
とじこたま飲んだんだ…。3件目の店のあと…、んー記憶が曖昧だ
な…、あれつ！？えーっと…ここは何処？

「ふわーつ…、由宇君おはよう。」

「えつ…？」

寝返りをうち反対方向に体を向けるとそこには…

貴美…ちゃん？

そこで始めて同じベッドに貴美ちゃんと寝てることに気付いた。
貴美ちゃんの方を凝視する…そして俺の方も確認した…。

はだか…、

じゃなくて安心した。

貴美ちゃんは昨日着ていたパークーをそのまま着て寝ていた。な
んとか友達の一線は守れたようだ。

男になつてエッチが好きになつた俺なら、酔つ払つた無意識の状
態でも貴美ちゃんを襲いかねない…。でも今回は大丈夫だったみた

いだ。節操なしの俺でもアルコールの力には敵わないらしい。

「おせむ」

גָּדוֹלָה

つてこうか近つ！ そう感じて離れよ'りとしたら…、

「ひめ」

ベッドは狭く、俺は“ドスン”という音と共に、掛け布団を引きずりながら呆気なく床へと落ちてしまった。

一
痛
つ
。

「だ、大丈夫？」

ベッドの上から顔を覗かせながら貴美ちゃんが聞いてきた。

ハツハハハリ、大丈夫。

「まつたく…、なんか食べる?」って言いつてもパンとタマゴくらいしかないけど。」「

「あー、ありがとう。」

「じゃ、用意するね。」

そう言つたと思つと急に『キヤア。』と言つてシーツを取り外して自分に巻き始めたのだ。ん? どうした…?

「由宇姉ち...、」

「うん?」

「アリにあるスカート取つてくれるかな...。」

「えつ...、あー、うん。」

どうやら貴美ちゃんの下半身はパンツの状態らしい。でもスカートの傍りで俺のジーパンも丁寧にたたんで置いてあった。あれっ?俺も下着...?あれ? もしかしてなんかしちゃった?

「...はい、これ。」

「ありがと...、えーと...、ちょっと回り回しててくれるかな。」

「えつ?あー、はいはい。」

そんなの別に気にしないの?...、と思いつつ、後ろを向いてそばにあつた姿見の鏡で、貴美ちゃんのスカートを着る仕種をチラシと見てたり...。

「いいよ。」

そう言つて貴美ちゃんは立ち上がる、キッチンに行く途中に俺のジーパンを取ってくれた。

ところでなんでお互い下着だったのだ?...?襲おうとしたけど、途中で力尽きて寝ちゃった...とか?
ジーパンのまま寝る習慣も無いが、パンツだけで寝る習慣もない。

はて……自分で脱いだのか？それとも脱がしてもういた……とか？

「あのや……」

「由宇君……」

ちようどハモるようにして言葉を発して、お互に『先どひで』
なんて譲り合つたりして……。

「由宇君から先に歸つてよ。」

「ああ……えつと、じやあ一応聞くナビ。なんかした……？」

「えつ？」

「いや、だから俺、貴美ちゃんに何かやらかさなかつたかな……って
思つてた。……。」

記憶にないものは仕方ない。でもクリアにしておきたいのだ。

「まつたく……何もあつませんでした。何も……。」

「ホントに？』

「えーホントです！」

何やら一瞬声が大きくなつて、更に不機嫌な感じで言われた気が
する。

「ホントに？』

「しつこな…。」

あれ…？前にも増して不機嫌？なんかしつこかったかな…？いや…、逆に何もされなかつたから怒つてゐ…とか？

でも何かやらかしかつたとしても、あつちが何も無いつて言つてるからにはそれに甘えておこう。うん。俺つて平和主義だし。

「布団、ベッドの上に乗つけておいてね。」

「うん…。」

その時、貴美ちゃんの携帯電話が鳴つた。

「誰だろ？。」

そして貴美ちゃんは『あー麻衣だ。』と言つて玄関の方に移動しながら電話に出た。

麻衣とはグループの一員のもう片方の女の子で金子麻衣のことだ。スラッシュとした体型でいつもお姉系のファッショングキチッとした感じだ。

みんなで何回か飲んでいたのだが、どうもこの金子麻衣とはまだ馴染めてない。馴染めてないのだが、廻りの人間が“麻衣”と呼んでいるので俺もそう呼ばせてもらつていい。

その金子さんと玄関先で話始めたと思つたら、今度は俺の携帯電話が鳴つた。

俺はそんなに焦つていなかつたのだが、玄関の方で貴美ちゃんが『いや、誰もいないよ。テレビ、テレビ。いやだな…、』などと言つてゐる。

そんな事聞かされた俺は、黙つて携帯電話を持つて静かにベランダへ出るしか出来なかつた。そしてそのベランダで電話の相手と話

始めた。

「電話に出たの遅いだぞ。」

「ゴメン。若干取り込み中で。って久々電話してきてその言い方は無いでしょー。」

「悪い悪い。でも取り込み中ならかけ直すよ。」

「いや、ちょっとなり平氣だよ。」

すると部屋の中からガラスをノックする音が聞こえたので振り向くと…そこにいたのは…

麻衣…？

な、なんで麻衣が…？その後ろで申し訳なさそうに貴美ちゃんが立っている。

「マッキー…、」

「ん？」

「悪いけどかけ直す。」

そう言って俺は電話を切った。

059 敵意

「田丸由宇君。」

「…はい。」

なんか、久々にフルネームで呼ばれた気がする。ドモの場合は呼び方には敵意が感じられる。

「朝から貴美子の部屋のグランダで向してんのかな？」

「いや、向つて…？」

「田丸由宇！」

「はい。」

「確かあんたは4月の時点『地元に彼女がいる』的なこと書いてなかつた？」

「はー…。」

確かに言つたのだが、それはその方が何かと都合がいいと思つてついた嘘だ。

「それが何？浮氣？それもよつとよつてなんで貴美子なの？」

「いや…、浮氣なんて…何もしてないよ。貴美ちゃんからも何か言ってやつてよ…、」

「田丸由宇！」「

「はっ、はい……、」

「じゃあ、あなたの彼女が男友達のところまで『何も無かつた』って言つたら信じるの？怒らないわけ？」

「そりや……、」

俺には今、恋人と呼べる存在はない。ここで俺は想像してみた…、もしマッキーが誰かに抱かれてる…といつところを…、無意識にマッキーだった。和也や他の誰でもなくマッキーだったのだ。

なんだろ…？なんで今マッキーだったんだ…？

「田丸！」

「はっ、はい……。」

「麻衣ホントに大丈夫だつて！ホント何も無かつたし、由宇君ちよつと飲み過ぎちゃつたみたいだから泊めてあげただけだし。」

「ホントにそうなの？」

「それに由宇君は、すっかり記憶ないみたいだし…。」

「ホラッ！だから何にも無いって言つたひ？」

「もうやつ問題じゃない！」

んー…、麻衣は友達想いなのか…？それにしても、いつもクールなイメージの麻衣なのに、なんだか今日は熱い感じだ…。

あ一分かった。この手のタイプは、男が合コンとかに来て欲しくないタイプの子だ。妙に仕切つたり、時には友達風吹かして『あんな男止めときな！』とか言つちゃうタイプだ。要はなんだかんだ自分を一番に持ち上げてくれないと嫌な質なのだ。

短大の友達にもそんな子いたな…。『今度飲み会する時はあの子抜きでお願いね。』なんて何度も言われたことか…。

「じゃあ、コレは何？」

「あつ…、」

そう言つて麻衣の右手が持ち上げたのは、俺のジーパンに付いたはずのベルトだった。

「これって由宇君のだよね？」

「それは…、」

「あー、それは私が取ったのよ。」

「貴美子が？」

「そう…、寝る時ベルトなんかしてたら苦しいかな…と思つても…。」

「

「そう…、」

「

ホツ…、なんとか切り抜けそつだな…って、やつぱりジー・パンも貴美ちゃんが脱がしたのか?しつかりたんであつたし…。しかもさつき『由宇君は、飲み過ぎてすっかり記憶ないみたいだし…。』つて言つてたよな…。『由宇君は』つてことは貴美ちゃんは記憶あるつてこと?

「まーそこまで貴美子が言つなら許してやるか!」

なんか理不尽さを感じながらも、この先この話題に俺から触れるのは避けよつと心に決めたのだ。

「あーといひで由宇君も、」

「はい。」

「私も三崎君のこと詳しく聞きたい!昨日貴美子に話してくれたんでしょ?」

「あー…、うん。」

「今から一人共俺ん家来ない?」
「一緒に来ない。

「あー、貴美ちゃんには話したんだけど、昨日からウチに三崎が来

「なんで?」

て泊まつてるんだよ。だから今もいるはずだから直接聞いてくれる？」

「なんで？なんで三崎君が由宇君ん家にいるわけ？」

「ハハして一度手間ながら三崎家の親子喧嘩の事を説明していくのだ…。」

「成る程ね…。でもあれだ由宇君は三崎君を一人ほつたらかしにして、貴美子と飲み明かしたわけだ？」

「そうだね…。」

「でもなんでホストの由宇君が飲み潰れてるの？」

「ハハ…だね…。」

確かに不思議だ…、いくら貴美ちゃんのハイペースに付き合つて飲んだからといって、普段からホストで慣らされてる俺が潰れるなんて…。

いや、確かにたまには酔い潰れることもある。あるがプライベートで飲んでたのだから多少ブレーキをかけながら飲んでたはず…。知らない間に変な薬とか飲み物に混ぜられたとか…？ってそんなこと貴美ちゃんがするわけないか。

「あー、それじゃ着替えたり準備していくから20分時間頂戴。」

「えつ？あー、うん。」

そう返事をすると、麻衣は出ていってしまった。

そういうえば普段力チッとした服装の金子さんが、今は部屋着というかジヤージ姿で…よくよく思えばスッピンだったような…。

「えーとせ、麻衣つて…？」

「あー、うん。隣の隣に住んでるの。」

「隣の隣？」

「うん。たまたま同じマンション契約してたの。同じって一Kのマンションで手頃な値段だから学生が多いみたい。」

「そうなんだ。」

それで仲がいいのか。洋服の趣味がバラバラな感じのこの二人が、なんでいつも仲良くなれるんかと疑問だったのだが、やつと腑に落ちた。

「ゴメンね。さっき由宇君の電話が鳴ったのこまかしきれなくて…。

」

「いや、それは大丈夫だけど、一つ聞いていい？」

「うん…。」

「麻衣はなんで三崎のこと気になってるの？」

「えつ！？・・・。私が告白したの知ってるからかな…？」

「相談したんだ。」

「まあ…、でもあれじゃない?」三崎君が体をいじつたことに興味はあつたんだけど、中々本人と話す機会が無かつたから色々聞きたいとか?「

「やつ…?」

廻りの同級生同様、興味本位的な感じなのかな…?と、この時はそう捉えておいた。

そして着替え終わつて戻つてきた麻衣は、化粧もしてあつていつもの金子麻衣に変わつていた。

「じゃ、行きますか。」

「はい。」「うん。」

俺が帰ってきたことを察知した三崎が、玄関まで出迎えたくれた…というより、連絡しないで外泊したことに文句を言いたかったのだ。

リビングのドアを開きながら『つたく！由宇は何時だと思つて…』『そう言いかけて固まつたのだ。その時の驚いた顔は印象的でそう簡単に忘れられそうにない。

やつと帰ってきたかと思ひきや、後ろに貴美ちゃんと麻衣を引き連れてきたからである。

「おはよ三崎君ー」

「…。」

麻衣の挨拶にも反応出来てない。

「三崎君？」

「あー…、おつ、おはよ…」

「あー三崎さ、なんか二人が三崎の話が聞きたいって言つから連れてきた。本人と話した方が早いかと思つてさ。」

「えつ…、」

いかにも浮かない表情というか、拒絶してるかのような面持ちだ。そういえば、あまり気にしてなかつたが、グループ内で三崎との一人が話してるのをあまり見た事ない。男友達の方とは普通に話

してゐるに、考えてみれば不思議だ。

講義は俺の隣のことが多いし、移動の時といえば何かと俺に引っ付いてくるし…。

三崎の方が女性陣を意識しちゃつてゐるのかな…？つていうか女性陣の方も意識してるとか…？

「お邪魔しまーす。」

「じゅわじゅわ。」

麻衣の方は三崎と話をする毎回マンマンにしゃべりしが、貴美ちゃんの方はあまり乗り気じゃないらしい。三崎を嫌いになつた訳ではないのだろうが、やはり複雑なのだろう。流れで付いて来たはいいが、さつきから言葉を發せないでいる。

「今、お湯沸かすからソファーにでも座つててよ。」

「分かつた。つて、テレビおもしろいねー。高かつたでしょ？」

「まあ…」

俺が買つたわけじゃないから知らないが、おそらく高かつたであろう。そう答えてつつきッキンに入りケトル取り出し水を張つて火にかけた。

リビングから『ちよつと貴美子へ、景色いいよ。貴美子もこいつきて見なよ~。』などと聞こえてくる。するとキッチンへ三崎が入ってきた。

「ちよつと由宇。」

「ん?」「

「連れてくる前に連絡へりこしてもここんじやない?」

「連絡したら三崎が逃げるかと思つたわ。」

「ん?...」「

「だら?」

「じゅやい図壁りこ。」

「それに最近あの一人とはまともに話してないんだろ?」

「...ん?」

「貴美ちゃんには「クられてたみたいだし、」

「聞いたの?」

「まあ...」

「それ以外考えられないだら?...と思つて、ナリに突っ込むのは止めといた。」

「麻衣とは?麻衣とはなんかあつた?」

「え? ?」

「いや、だから...」

「麻衣からもなんか聞いたの？」

「いや、麻衣からは何も聞いてないけど……」

やうほり麻衣との間にも何かあつたのか…?と勘繰ってしまふ。

「……」麻衣とは何もないよ。

「そんでもうそんだ
俺たちごとのあと抜けるわ」

揚げる揚げるさてどが行くてどが

卷之三

ପାତା ୩

「うん。さつきマックキーから電話あって、折り返しにいみからか
け直すことになつてて。」

「電話なら申ですればいいじきん？」

玄関のすぐ外でかけるからそんな心配すんなって！すぐ戻るから！」

לען... ען... ל

「じゃ、お湯頼むな。」

そう言って紅茶と砂糖を用意してあとをお願いした。

「早く済まして戻つてね。」

「はいはい。あつーそつだ。」

「何?」

「薬の事なんだけど…。」

「分かってる。言わないうでー。」

「あー、うん。そうだね、お願ひ。じゃなくて、お父さんには話しだ?」

「あー…、お父さんね…。私は話してないけど、たぶんお母さんが話しあげたんじゃないかな…。」

「やつか…。」

トに向いて申し訳なさを口にしてたので“大丈夫”の意味を込めて頭を軽く撫でてあげた。

「すぐ戻る。」

三崎と麻衣がどんな話をするかは気になるが、マツキーからの用件も気になっていた。そんな俺は玄関を出る前から携帯電話を操作し、マツキーへと発信したのである。

「随分取り込んでたみたいだな？」

「えつ？ ついでに用意の早くない？ ワンゴールしてないじゃん？」

「あー、ちょっとメールしてて、入力してたら吹き出しちゃったみたい。」

「成る程ね。って、それより第一声が嫌味ってどうなの？」

「ハハハーツ、まあ、そんなことよつ三崎知らねえ？」

「えつ？」

「いや、朝から三崎のお母さんから電話あって、あいつ家出したらしいんだよね。」

「あー三崎ね……」

一瞬、ホントの事を言おうか迷つたが、

「ウチにいる。」

「やつぱつ。」

「やつぱつ？」

「だってあいつバイトしていないだろ？」

「あー、うん。」

「所持金は月の小遣い程度だろ?」

「そりなんだ…、それじゃ、ずっとマンガ喫茶つてわけにもいかないってことか…。」

「だらうな。それに女に変わったのを理解してやれる友達だつて少ないだらう。」

「もうだよね…。」

「でな、お母さんが『連絡ついたら家に帰つてくるよ』なんて頼まれたんだけ、由宇から言つて貰える?」

「えつ?あつ、そつ。へー、分かつた。言つとく。」

お父さんは話し合つ態勢になつたのだらうか?それともただ単に子供が心配なだけ?

「それと、話変わるんだけ?」

「うん。」

「先生から『女から男に変わりたい子を探して欲しい。』ってメールがきてさ。」

「えつ?今なんて?」

「だから…」

セウはメールの内容をもう一度言つてもらひた。

「それってまさか……？」

「あー、うそ。花音と同じ時に映像資料取りたいらしい。」

「……。」

先生もさうだがマッキーもどつかしてゐる。でも研究熱心とうか、実験感覚といつか。でも仕方ないのか……？

「由宇?」

「あー、うそ……、聞こえたる。」

「わー。そんな子廻りにしないかな?」

「どうだろ……? 表立つて“私男になりたいんです!”って宣言してる子なんていないんじゃない?」

「やうだよな……。」

「それこそ花音が愛ちゃんに聞いてみたり?」

「知り合いでいるかな……?」

「このんじやない?」

「でもな……。」

「何?」

「あの業界つて、噂広まるの早うじやない?」「へり歎ひやんが上手く言つてくれたとしても…」

「うへん…、確かに…。」

「だから由宇もさ、廻りでそれっぽいつの見つけられないかな?」

「それっぽいって…、まあ…、気にかけてみるけど…。」

「頼んだ。そんじゃ、また連絡する。」

そう言つて電話を切られた。

それにしても、そんな事頼まれても見当つかない。短大の時、女の子が多いこともあって『あの子達レズつてるらしいよ』なんて噂が耳に入ってきたこともあつたが、他人の俺に真相なんて全く分からぬ。まさか『君達レズなの?』なんて冗談でも聞けないし。

仲のいい女同士か…。そう思うと、ふと家の中の麻衣が気になつた。さつき貴美ちゃんの部屋で俺に対し言葉がきつかったのは、俺にヤキモチ妬いてたとか…?それは無いか…。恋の相談も受けたくらいだからな…。

とそう思いつつ、その事が頭を離れないのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5619e/>

氷室研究所

2010年10月8日21時25分発行